

経塚横穴墓群・古墳群

福岡県田川市大字伊田・伊加利所在遺跡の調査

1999

田川市教育委員会

経塚横穴墓群・古墳群

福岡県田川市大字伊田・伊加利所在遺跡の調査

序

田川地方は、旧豊前の国の西端に位置し、内陸交通の要地として古くから栄えて参りました。近代においては、筑豊炭田の中心地の一つとして栄えたところでもあります。

田川市内には、弥生時代研究の初期に重要な資料を提供した下伊田遺跡群や、新羅系軒瓦の出土で著名な天台寺跡（上伊田廃寺）など、重要な遺跡が多数所在しています。田川市の東部を流れる彦山川流域には、多数の古墳群・横穴墓群が所在しており、当報告書に掲載している経塚横穴墓群・古墳群もその一つです。

本報告書は、経塚横穴墓群・古墳群のうち、鎮西中学校運動場整備工事及び市道環状線建設工事に先立つ緊急発掘調査の報告書です。

今回調査した経塚3号墳は、これまであまり解明されていない、当地方の古墳時代前期小首長の実体を明らかにする上で、貴重な資料となりうるものです。

また、経塚横穴墓群は、1987年に行われた轟尾横穴墓群の調査成果とあわせ、古墳時代の家族構成や、社会構造の解明のために重要な資料を提供するものです。

貴重な文化財が消滅することは、まことに残念なことではありますが、この調査成果が当地方における古墳時代研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たって、多数の方々からご指導、ご協力いただきましたことに厚くお礼申し上げます。

1999年3月

田川市教育委員会

教育長 月森清三郎

例　　言

1. 本書は、鎮西中学校運動場整備工事及び市道環状線建設工事に伴い発掘調査を実施した経塚横穴墓群（第1・第2支群）・経塚3号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、田川市教育委員会が主体となって行い、文化課主事田代健二が調査を担当した。
3. 挿図に記入した方位は、すべて磁北である。
4. 本書に掲載した写真は田代が撮影した。遺構の実測は、横穴墓群第1支群の大部分を中川恭子・吉武敦子が行い、その他は田代が行った。また、3号墳土層断面図の一部を、直方市教育委員会田村悟氏、村島彰俊氏に実測していただいた。遺物の実測、遺構・遺物実測図の添写は田代が行った。
5. 本報告書の中で、第3章は、金宰賢氏、古賀英也氏、田中良之氏に執筆をお願いした。他の部分の執筆及び編集は田代が行った。
6. 出土遺物、実測図、撮影フィルム等は、田川市石炭資料館（〒825-0002 田川市大字伊田2734-1 石炭記念公園内、TEL・FAX 0947-44-5745）に保管している。
7. 山本建設社長山本正氏には、発掘調査を進めるに当たり色々と便宜をはかっていただいた。また、横田義章氏、横田賢次郎氏をはじめ九州歴史資料館の職員の方々から色々とご指導・ご助力を賜った。記して謝意を表したい。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 発掘調査の要因 1

第2節 調査体制 1

第3節 発掘調査の経過 2

第4節 経塚横穴墓群・古墳群周辺の地理的・歴史的環境 3

第2章 経塚横穴墓群の調査 11

第1節 はじめに 11

第2節 遺構 13

第3節 遺物 34

第4節 小結 47

第3章 田川市経塚横穴墓の出土人骨について 56

第1節 はじめに 56

第2節 人骨所見 56

第3節 考察 60

第4章 経塚3号墳の調査 62

第1節 はじめに 62

第2節 遺構 62

第3節 遺物 68

第4節 小結 71

まとめ 72

挿図目次

第1図 田川市位置図	3	第39図 2-15 横穴墓実測図(1/60)	29
第2図 調査地周辺遺跡分布図(1/50000)	6	第40図 2-16(a.b.c)横穴墓実測図(1/60)	30
第3図 経塚横穴墓群・3号墳遺構配置図(1/300)	9	第41図 第1支群遺構検出中出土土器(1/3)	34
第4図 周辺地形図(1/2500)	11	第42図 1-1 横穴墓出土土器①(1/3)	35
第5図 1-1 横穴墓実測図(1/60)	12	第43図 1-1 横穴墓出土土器②(1/4)	36
第6図 1-1 横穴墓人骨・副葬品出土状況(1/30)	13	第44図 1-1 横穴墓及び1-2 横穴墓出土土器(1/3)	37
第7図 1-2a 横穴墓実測図(1/60)	13	第45図 1-3・4 横穴墓出土土器(1/3)	38
第8図 1-2b 横穴墓実測図(1/60)	14	第46図 1-6a・6b・7 横穴墓出土土器(1/3)	39
第9図 1-3 横穴墓遺物出土状況(1/30)	14	第47図 1-7 横穴墓墓道出土土器(1/3)	40
第10図 1-3 横穴墓実測図(1/60)	14	第48図 1-7～2-7 横穴墓出土土器(1/3)	41
第11図 1-4 横穴墓実測図(1/60)	15	第49図 2-8・9 横穴墓出土土器(1/3)	42
第12図 1-5 横穴墓実測図(1/60)	15	第50図 2-9 横穴墓出土土器②(1/3)	43
第13図 1-6a 横穴墓実測図(1/60)	16	第51図 2-10・11 横穴墓及び2-11・12 中間前部出土土器(1/3)	44
第14図 1-6a 横穴墓人骨・副葬品出土状況(1/30)	16	第52図 2-13・14 横穴墓及び10～15 横穴墓 前部出土土器(1/3)	45
第15図 1-6b 横穴墓実測図(1/60)	17	第53図 2-10～15 横穴墓前庭及び16 横穴墓 出土土器(1/3)	46
第16図 1-6b 横穴墓人骨・副葬品出土状況(1/30)	17	第54図 2-16 横穴墓出土土器(1/3)	47
第17図 1-7a.b 横穴墓実測図(1/60)	17	第55図 2-10～15 横穴墓前庭出土須恵器 [「夫」のヘラ書有り](1/2)	48
第18図 1-7 横穴墓墓道横断面実測図(1/60)	18	第56図 1-1 横穴墓墓道底面出土石製紡錘車(1/2)	48
第19図 1-7c 横穴墓実測図(1/60)	18	第57図 経塚横穴墓群出土鉄器(1/2)	48
第20図 2-1 横穴墓実測図(1/60)	18	第58図 1-6a 横穴墓出土鉄刀刀装具(1/2)	48
第21図 2-2 横穴墓実測図(1/60)	19	第59図 1-6a 横穴墓出土鉄刀(1/3)	49
第22図 2-3 横穴墓実測図(1/60)	19	第60図 経塚横穴墓群出土装飾品類(1/2)	49
第23図 2-4 横穴墓実測図(1/60)	20	第61図 経塚3号墳平面図[調査前](1/200)	63
第24図 2-5 横穴墓実測図(1/60)	20	第62図 経塚3号墳平面図[調査後](1/200)	64
第25図 2-6(a.b.c)横穴墓実測図(1/60)	21	第63図 経塚3号墳墳丘土層断面図(1/100)	65
第26図 2-7(a.b)横穴墓実測図(1/60)	23	第64図 経塚3号墳第1主体実測図(1/30)	66
第27図 2-8 横穴墓実測図(1/60)	23	第65図 経塚3号墳第2・第3主体実測図(1/30)	66
第28図 2-9 横穴墓実測図(1/60)	25	第66図 経塚3号墳墳頂部集石遺構(1/20)	67
第29図 2-9 横穴墓前部遺物出土状況	26	第67図 経塚3号墳第1主体出土銅鏡(1/1)	67
第30図 2-10b 横穴墓実測図(1/60)	26	第68図 経塚3号墳第1主体出土鉄劍(1/3)	68
第31図 2-10c 横穴墓実測図(1/60)	26	第69図 経塚3号墳出土鉄器等(1/2)	69
第32図 2-10a 横穴墓実測図(1/60)	27	第70図 古墳以前の遺物(1/3)	70
第33図 2-11 横穴墓実測図(1/60)	27	第71図 古墳以後の遺物(1/3)	71
第34図 2-12 横穴墓実測図(1/60)	28		
第35図 2-13 横穴墓実測図(1/60)	28		
第36図 2-14a 横穴墓実測図(1/60)	29		
第37図 2-14b 横穴墓実測図(1/60)	29		
第38図 2-13・14a 中間前部遺物出土状況	29		

表 目 次

第1表 経塚横穴墓群横穴墓一覧表	32・33	土器一覧表③	53
第2表 耳環一覧表	50	土器一覧表④	54
第3表 玉類一覧表	50	土器一覧表⑤	55
第4表 土器一覧表①	51	第5表 頭蓋骨計測値(女性)	61
土器一覧表②	52		

図 版 目 次

図版 1-1 経塚横穴墓群第1支群・経塚3号墳調査前の状況(南西から)	図版 4-6 1-7c 横穴墓玄室内遺物出土状況
図版 1-2 1-1 横穴墓検出状況	図版 4-7 第2支群調査前の状況(西から)
図版 1-3 1-1 横穴墓閉塞石①	図版 5-1 2-1 横穴墓石組及び閉塞石
図版 1-4 1-1 横穴墓閉塞石②	図版 5-2 2-1 横穴墓正面觀
図版 1-5 1-1 横穴墓遺物及び人骨出土状況	図版 5-3 2-1 横穴墓石組
図版 1-6 1-1 横穴墓墓道大甕出土状況	図版 5-4 2-2 横穴墓正面觀
図版 1-7 1-2a 横穴墓正面觀	図版 5-5 2-2 横穴墓石組側面
図版 2-1 1-2b 横穴墓	図版 5-6 2-2 横穴墓玄室内
図版 2-2 1-3 横穴墓羨道部遺物出土状況	図版 5-7 2-3 横穴墓正面觀
図版 2-3 1-3 横穴墓玄室内	図版 6-1 2-5・4 横穴墓正面觀
図版 2-4 1-3 横穴墓正面觀	図版 6-2 2-4 横穴墓閉塞石
図版 2-5 1-4 横穴墓検出状況	図版 6-3 2-4 横穴墓前室
図版 2-6 1-4 横穴墓閉塞石	図版 6-4 2-4 横穴墓玄室内
図版 2-7 1-4 横穴墓玄室内	図版 6-5 2-5 横穴墓閉塞石
図版 2-8 1-4・3・2a・2b 横穴墓	図版 6-6 2-5 横穴墓玄室内
図版 3-1 1-5 横穴墓正面觀	図版 6-7 2-6a 横穴墓閉塞石
図版 3-2 1-5 横穴墓玄門部	図版 6-8 2-6a 横穴墓正面觀
図版 3-3 1-5 横穴墓玄室内	図版 7-1 2-6a 横穴墓玄室内
図版 3-4 1-6a 横穴墓鉄刀出土状況	図版 7-2 2-6b 横穴墓遺物出土状況
図版 3-5 1-6a 横穴墓人骨・遺物出土状況①	図版 7-3 2-6c 横穴墓
図版 3-6 1-6a 横穴墓人骨・遺物出土状況②	図版 7-4 2-7a 横穴墓閉塞石
図版 3-7 1-6a 横穴墓玄室内	図版 7-5 2-7a 横穴墓玄室内人骨出土状況
図版 3-8 1-6b 横穴墓遺物出土状況	図版 7-6 2-7b 横穴墓(?)
図版 4-1 1-6b 横穴墓人骨・遺物出土状況	図版 7-7 2-8 横穴墓閉塞石及び遺物出土状況
図版 4-2 1-7b 横穴墓閉塞石	図版 7-8 2-9 横穴墓前庭部遺物出土状況
図版 4-3 1-7a・7b 横穴墓及び墓道	図版 8-1 2-9 横穴墓閉塞石
図版 4-4 1-7c 横穴墓閉塞石	図版 8-2 2-9 横穴墓正面觀
図版 4-5 1-7c 横穴墓正面觀	図版 8-3 2-9 横穴墓玄室内人骨出土状況
	図版 8-4 2-10a 横穴墓正面觀

- 図版 8-5 2-10b 横穴墓遺物出土状況
図版 8-6 2-10a 横穴墓羨道・玄門(玄室から)
図版 8-7 2-10a 横穴墓羨道(前庭から)
図版 9-1 2-10a 横穴墓玄室内
図版 9-2 2-11 横穴墓正面観
図版 9-3 2-11 横穴墓羨道
図版 9-4 2-11 横穴墓玄室内
図版 9-5 2-11 横穴墓玄門・羨道
図版 9-6 2-11・12 中間前部遺物出土状況
図版 9-7 2-12 横穴墓羨道
図版 9-8 2-12 横穴墓玄門(玄室から)
図版 10-1 2-12 横穴墓玄室内
図版 10-2 2-13 横穴墓閉塞石
図版 10-3 2-13 横穴墓羨道
図版 10-4 2-13 横穴墓玄室内
図版 10-5 2-13・14 横穴墓中間前部遺物出土状況
図版 10-6 2-14a 横穴墓正面観
図版 10-7 2-14a 横穴墓前室
図版 10-8 2-14a 横穴墓玄室内
図版 11-1 2-14b 横穴墓
図版 11-2 2-15 横穴墓
図版 11-3 2-15 横穴墓正面観
図版 11-4 2-16a 横穴墓玄室壁面工具痕
図版 11-5 2-16a 横穴墓閉塞石
図版 11-6 2-16c 横穴墓正面観
図版 11-7 2-16c 横穴墓閉塞石
図版 12-1 第1支群調査後全景(南から)
図版 11-2 第2支群・第1支群調査後全景(西から)
図版 13-1 2-7 横穴墓前部工具痕
図版 13-2 2-9 横穴墓羨道工具痕
図版 13-3 経塚横穴墓群出土玉類
図版 13-4 経塚横穴墓群出土耳環
図版 13-5 1-6a 横穴墓出土鉄刀金具類及び柄部残片
図版 13-6 経塚横穴墓群出土鉄器
図版 13-7 1-6a 横穴墓出土鉄刀
図版 14 経塚横穴墓群出土土器①
図版 15 経塚横穴墓群出土土器②
図版 16 経塚横穴墓群出土土器③
図版 17 経塚横穴墓群出土土器④
図版 18 経塚横穴墓群出土土器⑤
図版 19 経塚横穴墓群出土土器⑥
図版 20 経塚横穴墓群出土土器⑦
図版 21 経塚横穴墓群出土土器⑧
図版 22-1 経塚3号墳遠景(東方、彦山川から)
図版 22-2 経塚3号墳調査前(北西から)
図版 22-3 墳頂平坦部調査前(西から)
図版 22-4 調査後の墳丘(北西から)
図版 22-5 第2・第3主体検出状況
図版 22-6 第2主体断面(短軸)
図版 22-7 第2・第3主体完掘状況
図版 23-1 第1主体(粘土櫛)検出状況
図版 23-2 第1主体床面検出状況
図版 23-3 第1主体鉄剣出土状況
図版 23-4 第1主体銅鏡・鉄剣出土状況①
図版 23-5 第1主体銅鏡・鉄剣出土状況②
図版 23-6 第1主体粘土櫛南端部断面
図版 23-7 第1主体土層断面
図版 23-8 東トレンチ墳丘土層断面
図版 24-1 西トレンチ墳丘土層断面
図版 24-2 東側墳端部の状況
図版 24-3 北トレンチ墳丘土層断面①
図版 24-4 北トレンチ墳丘土層断面②
図版 24-5 北側墳端部の状況
図版 24-6 蔵骨器出土状況
図版 24-7 経塚3号墳調査後(南から)
図版 24-8 墳丘盛土除去作業
図版 25-1 経塚3号墳調査後全景(北西から)
図版 25-2 第1主体出土銅鏡
図版 25-3 第1主体出土ヤリガンナ
図版 26-1 第1主体出土鉄剣
図版 26-2 第1主体出土鉄斧
図版 26-3 第1主体出土錐
図版 26-4 不明鉄器
図版 26-5 第1主体出土鉄鎌
図版 26-6 鉄剣(68-1)付着布拡大写真(中央付近)
図版 26-7 鉄剣(68-1)付着布拡大写真(先端部)①
図版 26-8 ②
図版 27 出土人骨①
図版 28 出土人骨②

第1章 はじめに

第1節 発掘調査の要因

経塚横穴墓群は、福岡県教育委員会文化課が1977年に発行した福岡県遺跡等分布地図（田川市・田川郡編）に記載があり、以前から周知の遺跡であった。

1994年11月、例年実施している市役所内の各事業課の工事計画の照会の際に、市都市計画課より経塚横穴墓群所在地の一部を通過するコースでの市道中央環状線道路新設改良工事計画の回答があり、遺跡の保護について協議を行ったが、設計変更等による現状保存は困難であるとの結論に達し、1997年度に記録保存のための発掘調査を行うことになった。

また、1995年10月市労働対策課より鎮西中学校運動場整備工事計画の通知があった。工事予定地内に経塚3号墳と経塚横穴墓群の一部が含まれており、遺跡保存のため協議を行ったが、これも現状保存は困難であるとの結論に達し、工事を実施する1996年度の前半で発掘調査を行い記録保存の処置を講じる事になった。

第2節 調査体制

1996年度

田川市教育委員会 教育長	月森清三郎
教育次長	藤沢 悟
文化課長	越知 作光
文化課長補佐	永田 哲夫
石炭資料館館長	佐々木哲哉
〃 係長	久原 秋男
〃 主任	森本 弘行
〃 主事	田代 健二（調査担当）
〃 事務補助	古原みちよ
〃 解説員	小野 裕弘
調査補助員	中川 恭子
発掘作業員	安藤セイコ、甘村源一、石崎貞美、井関タカ子、大下常利、 大畑幸恵、岡田雅夫、小野宮子、甲斐直子、香月久美子、 木村春義、熊谷千津子、佐藤正裕、村上貞子、長尾豊子、 中藤哲生、中村正己、中村陽典、二階堂計、藤井正秀、 藤田ゆみ、宮田利泰、山方鈴子、吉武敦子

1997年度

田川市教育委員会 教育長	月森清三郎
教育次長	福間 悟
文化課長	新具 重信
文化課長補佐	久原 秋男
石炭資料館館長	佐々木哲哉
〃 係長	北川由美子
〃 主任	森本 弘行
〃 主事	田代 健二 (調査担当)
〃 事務補助	古原みちよ
〃 解説員	小野 裕弘
調査補助員	中川 恭子
発掘作業員	井上欣也、岩城昭二、岡田裕子、小野宮子、甲斐直子、木村孝、 越路美穂子、河元美津子、只野睦子、長尾和寿、中藤哲生、 中倉きみ江、中村正己、中村陽典、西敬子、西村英子、 長谷川清隆、兵頭晃、三苦孝一

このほか、調査・整理・報告に当たって、下記の方々からご協力、ご指導、ご助言いただいた。記して謝意を表したい。

岩熊真実、上田健太郎、大森円、笠原勝彦（故人）、金宰賢、倉野正明、古後憲浩、
舌間悟、志満紀郎、嶋田光一、杉本岳史、田中良之、田村悟、中野直毅、長嶺正秀
長谷川清之、藤田等、本田光子、水ノ江和同、村島彰俊、桃坂豊、横田賢次郎、横田義章
吉原瀧雄

(敬称略 50音順)

第3節 発掘調査の経過

1996年度は、5月21日より経塚3号墳から発掘調査を開始した。まず、3号墳・横穴墓群の地形測量を行い、同時に、墳丘中央部を原点とし、丘陵稜線と直角及び平行方向にトレチを設定し、主体部検出と墳丘断面観察を行った。調査開始直後に第2・第3主体を検出した。第1主体は、平面観察では検出できなかったが、第2主体壁面と西側トレチ壁面で粘土櫛の断面を検出し、調査を行った。

7月11日から横穴墓群の調査を開始した。3号墳の調査が予定より長引いたため、並行して調査を行った。3号墳実測作業の際、直方市教育委員会の田村悟・村島彰俊両氏に一部を手伝っていただいた。1-1号・6a号・6b号横穴墓から出土した人骨について、九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座教授田中良之氏に性別・年齢等の判定を依頼した。8月9日に経塚3号墳の現地調査を終了、9月11日に横穴墓群の現地調査を終了した。

1997年度は、5月1日より調査前地形測量開始、5月9日より表土を除去し、横穴墓検出作業

を開始した。前年度調査区との間に空閑地が検出されたので、97年度調査部分は第2支群として区別し、横穴墓の番号は1号からとした。調査中、7月の大霖の際に、排土の一部が調査地下方の住宅地に流入しているとの住民からの通報があり、発掘作業員と文化課職員とで土嚢で応急的に砂防堤を築き、土砂の流出を防止したことなどもあったが、その他は概ね順調に進行した。

2-5号・7a号・9号横穴墓から出土した人骨について、前年度と同じく田中良之氏に判定を依頼した。

11月18日現地調査終了。その後1998年1月～2月に補足実測を行った。

また、3号墳粘土櫛の赤色顔料について、別府大学文化財学部助教授本田光子氏に判定を依頼した。

第4節 経塚横穴墓群・古墳群周辺の地理的・歴史的環境 (古墳時代を中心として)

経塚横穴墓群・古墳群の所在する田川地方は、福岡県北部のほぼ中心部、西の福岡平野と東の京都平野との中間地点に位置しており、古くから内陸交通の要地として重視されてきた地域である。



第1図 田川市位置図〔「田川市史」上巻 1974 より〕

地形的には、田川地方は周囲を山地で囲まれた盆地であり、北西部の彦山川沿いの沖積地を除けば、近年になって道路が整備される以前は、金辺峠（北東）・仲哀峠（東）・からすお鳥尾峠（西）・猪膝峠（南）の各峠によって他地方と隔てられてきた。水系単位にみれば、田川盆地を流れる大部分の川は遠賀川水系に属しており、赤村を発する今川のみが京都平野へ注いでいる。田川地方は、古代律令制期には豊前国に編入されて

いるが、水系等の自然地理的なまとまりからいえば筑前に編入する方が妥当なように思われ、この不自然な筑前・豊前国境線策定の要因については、北部九州で大きな勢力を持っていた宇佐八幡宮の影響等が推測されている（註1）。

田川地方で人類が生活を営むようになった最も古い痕跡としては、田川市大字楠に所在する上の原台地で旧石器時代のナイフ形石器が採集されている（註2）。旧石器時代の遺物出土地は現在のところこの一例だけであるが、今後発見例の増加が期待される。縄文時代の遺跡で発掘調査が行われた例としては、赤村合田遺跡（註3）がある。合田遺跡では、縄文時代前期の集積炉、後期の竪穴住居等が検出され、この時代から集落が営まれていたことが明らかとなった。その他の資料としては、添田町ズイベガ原遺跡で前期の曾畠式土器・轟式土器が採集されているほか、前述の上の原台地でも縄文時代早期の押型文土器破片や石器類が採集されている（註4）。赤池町の彦山川河床遺跡からは、縄文時代後期・晚期の土器片等が採集され、同町上野遺跡からは縄文時代のものと思われる石器類が採集されているほか、方城町犬星遺跡、田川市先法月遺跡などで縄文時代の遺物が採集されている（註5）。縄文時代の石器には姫島産黒曜石や腰岳産黒曜石がかなりの割合で使用され、当時すでに広範囲な交流があったことがわかる。

弥生時代には、盆地内の河川をのぞむ台地上の多くに、集落や貯蔵穴群など生活の痕跡がみられる。今までのところ、弥生時代前期初頭に遡る資料としては、糸田町城の畑で板付I式の壺形土器が採集されているが、この時期の資料は少なく、次の前期後半から遺跡数が増える。

主要な集落遺跡としては、上の原台地に続く下伊田丘陵上に所在している下伊田遺跡群（註6）や、中元寺川流域の弓削田原遺跡群、添田町の金ノ原遺跡、方城町伊方の伊方小学校遺跡・宝珠遺跡（註7）、川崎町真崎遺跡（註8）などが知られている。

下伊田遺跡は、弥生時代研究の初期に弥生時代前期後半の土器形式として設定された下伊田式土器の標識遺跡として著名である。下伊田遺跡では、磨製石包丁や磨製石斧類とともに、いわゆる打製石斧がかなり出土しており、弥生時代の畑作農耕を考える資料となるだろう。また、赤村合田遺跡では、弥生時代前期の松菊里型竪穴住居が検出されている。

田川地方の中で現在の糸田町にあたる地域は、比較的弥生時代青銅器の出土量が多く、糸田町宮山遺跡から9本、古賀ノ峯遺跡から6本の銅戈が出土し、このほかに糸田町内からは、正確な出土地は不明であるが、10本の銅矛が出土したと伝えられている（註9）。そのほか、田川市上の原（3本）、同夫婦塚（3本）、大任町柿原（1本）から銅劍が出土している（註10）。

弥生時代の墓制としては、石棺墓（前記の銅劍を出土した上の原石棺墓や方城町迫石棺墓群、同町宝珠遺跡など）、土壙墓・石蓋土壙墓（田川市長谷池遺跡群、赤村合田遺跡、方城町伊方小学校遺跡など）が一般的で、小児用甕棺もしばしばみられる。成人用の大型甕棺は、方城町宝珠遺跡、糸田町糸田原ほか田川市弓削田、方城町草場、同中原、同後谷、大任町道善などで出土している（註11）が、九州北西部の甕棺墓文化圏のような大型甕棺の群集墓地は発見されていない。弥生時代においては、墓制からみるかぎり東海岸文化圏（豊の国）により近い様相がうかがえる。

田川市東町の夫婦塚遺跡（註12）は、中心主体が特異な形状の箱式石棺で、その周りに5基

の小型箱式石棺があり、それらを取り巻くように列石がめぐっている。この遺跡の正確な時期は明らかでないが、箱式石棺内からは銅剣が出土したと伝えられており、定型化した古墳（前方後円墳）出現以前の弥生時代墳丘墓と考えられている。田川地方においても、定型化した古墳の出現以前に、一般の共同墓地とは区別された特定の墳墓に埋葬される首長層が出現していたと考えて良いであろう。

古墳時代前期の遺跡としては、今回報告する経塚3号墳のほか、田川市位登の位登古墳（全長60m前後の前方後円墳）、同 糠の長谷池6号墳（註13）、同 川宮の法光寺裏古墳群、同 夏吉の若八幡古墳群（丘陵尾根上に小形の古墳が列上に所在）、方城町迫古墳（註14）、香春町宮原遺跡（註15）、川崎町公文原遺跡（註16）などがある。位登古墳は主体部箱式石棺で、内部から内行花文鏡、碧玉製管玉、太刀などが出土したと伝えられている（註17）。宮原遺跡では、石棺墓から後漢代の内行花文鏡など4面の銅鏡が出土したことが知られており、古墳時代初頭頃に位置づけられている。

田川市セスドノ古墳（註18）は、墳丘径約37mの大型円墳で、周壕、周堤がめぐり、周壕内からは円筒埴輪が出土している。内部主体は特異な形状の初期横穴式石室で、盜掘を受けていなかったため、多量の副葬品が埋納時の状態で出土している。埴輪や石室形態からみて、5世紀末頃の首長墓古墳と考えられる。セスドノ古墳と谷を挟んで隣り合う尾根上に所在している猫迫1号墳は、墳丘径30m前後の大型円墳であり、出土埴輪等からみてセスドノ古墳の前代の首長墓の可能性が考えられている。また、香春町長畑1号墳（註19）は、発見時にすでに大部分が大破していたが、石室内から金製垂飾付耳飾りが出土しており、石室残存部の形状からセスドノ古墳と近い時期のものと思われる。セスドノ古墳からは国内における須恵器生産開始以前の舶載品と考えられる陶製小壺や垂飾付耳飾りが出土しており、永畑1号墳の耳飾りとも併せて、当時の朝鮮半島諸国との活発な交流がうかがえる。

古墳時代の集落遺跡については、赤村合田遺跡、川崎町眞加塚遺跡（註20）、同 永井遺跡（註21）などで検出・調査されている。

遠賀川流域の古墳時代後期の特徴は、後期群集墳のほとんどが横穴墓で構成されていることである。遠賀川流域一帯で約190カ所の横穴墓群が知られており、田川市内だけでも今回報告する経塚横穴墓群を含め21カ所を確認している（註22）。特に、田川市内から大任町にかけての彦山川をのぞむ位置にある丘陵部の大部分には横穴墓群が構築されており、沖積地に多数の集落が存在していたことが推測される。

これまでの調査例では、田川地方の横穴墓群でもっとも遡るのは大任町狐塚横穴墓群（註23）で、出土須恵器からみて小田富士雄氏の須恵器編年で、ⅢA期（6世紀中葉頃）から形成されている。田川市内では、中元寺川流域の狐ヶ迫横穴墓群（註24）、彦山川流域の伊田狐塚横穴墓群（註25）がⅢB期（6世紀後半）から築造されている。中津市上ノ原横穴墓群（註26）行橋市竹並横穴墓群（註27）では、5世紀代に遡る横穴墓群が発見されており、やや遅れて豊前地方沿岸部から田川地方へ伝えられたものと考えられる。律令制期には、筑前国に編入される嘉穂地方・直鞍地方も横穴墓群の密集地帯であり、この時期には、遠賀川中・上流域において、



第2図 調査地周辺遺跡分布図 (S = 1/50,000) [国土地理院「田川」「行橋より】

墓制の上で文化的に大きな違いは認められない。横穴墓群は、7世紀代まで築造が続けられ、一部は8世紀にも使用されているが、大部分は7世紀代で使用を終えるようである。

近年、墳丘を伴う横穴墓の調査例が増えているが、田川地方においても大任町狐塚横穴墓群（註28）、同 稲荷山横穴墓群（註29）、田川市長谷池横穴墓群（註30）で検出されている。狐塚横穴墓群で最古式・最大規模のI-1b横穴墓は前方後円墳である1号墳の主体部と推測されており、注目される。

田川市大字夏吉には、36基の横穴式石室墳からなる夏吉古墳群が所在している。この古墳群は、横穴墓群の存続時期とほぼ同じく、6世紀前半～中葉頃から形成され、7世紀代まで築造が続けられているようである（註31）。田川地方の横穴式石室墳は、夏吉古墳群以外は数基程度の小規模な群で散在しており、田川地方においては、夏吉古墳群は異質な存在である。この古墳群には、石棚を持つ1号墳や田川地方最大の横穴式石室を持つ21号墳など、首長墓と考えられる古墳を含んでおり、首長とその近縁者が特定の墓域を占拠して形成した古墳群と考えるのが妥当だろう。後の律令制期の郡司層につながる首長層がこの時期にはすでに出現していたものと考えて良いのではないだろうか。

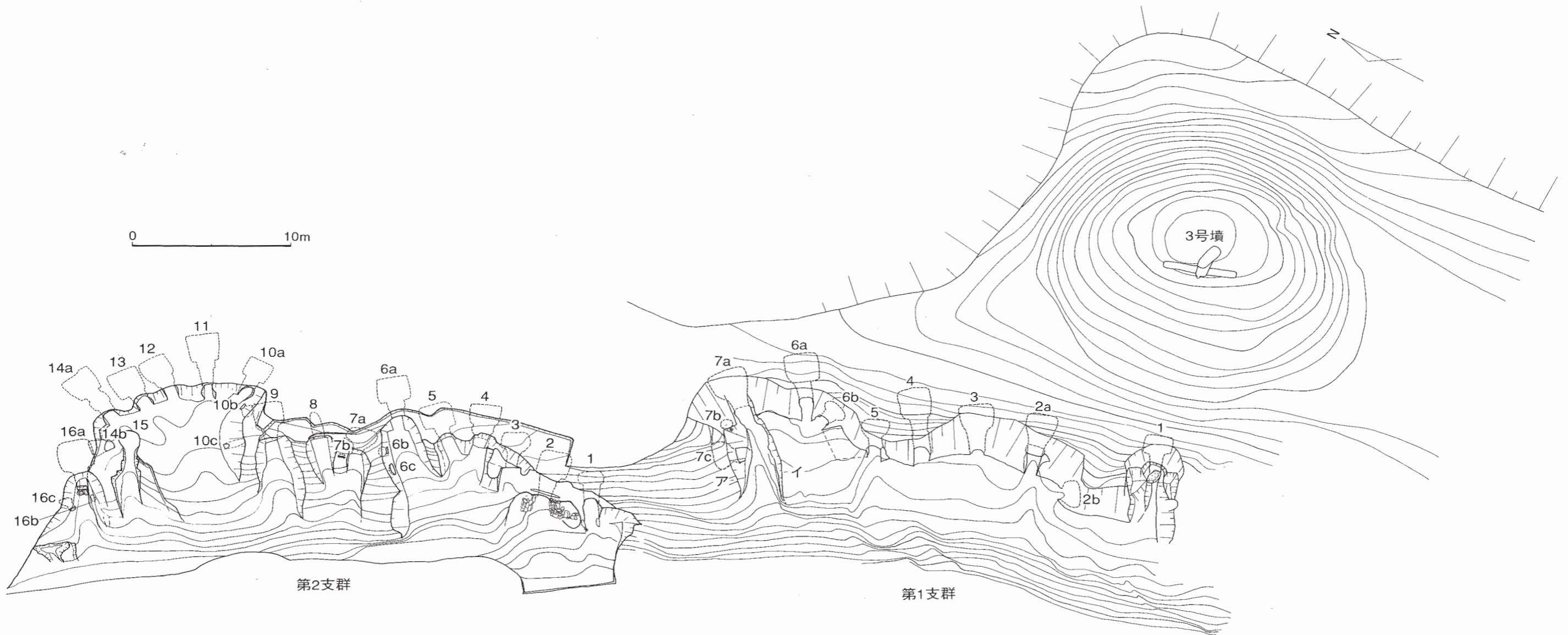
「日本書紀」525（安閑2）年の記事にみられる豊前の五屯倉のうち、我鹿屯倉は田川郡赤村に比定されており、このころから中央政府の直接的な支配の手がのびてきたものと思われ、8世紀以降の律令制期には、田川地方は前述したように豊前国に編入され、田川郡として現在に至る（註32）。和名抄によれば、田川郡は香春・雉怡・位登・城田の四郷よりなっていたとされている。律令制期の郡衙の所在地については諸説あり、まだ確定していない。

- A. 経塚横穴墓群・古墳群、1. 追古墳、2. 追横穴墓群、3. 追遺跡、4. 宝珠遺跡、5. 草場遺跡、6. 三本松古墳、7. 人見古墳群、8. 神崎遺跡、9. 飯土井古墳、10. 城山古墳群、11. 玉穂山古墳、12. 後谷遺跡、13. 伊方古墳、14. 長谷横穴墓群、15. 野添横穴墓群、16. 高崎古墳、17. 伊方遺跡、18. 犬星遺跡、19. 法華屋敷遺跡、20. 前村遺跡、21. 大穴遺跡、22. 清瀬横穴墓群、23. 夏吉古墳群、24. 夏吉1号墳、25. 夏吉21号墳、26. 若八幡古墳群・横穴墓群、27. クナタ山古墳、28. 一ノ島古墳、29. 香春岳城、30. 香春岳二ノ岳遺跡、31. マブ跡、32. 長畠遺跡、33. 宮原遺跡、34. 河内王墓（陵墓参考地）、35. 中津原横穴墓群（才立横穴墓）、36. 一本松古墳群、37. 蛍ヶ丘遺跡、38. 蛍ヶ丘横穴墓群、39. 桐ヶ丘遺跡、40. セスドノ古墳、41. 猫追1号墳、42. 猫追2号墳、43. 先法月遺跡、44. 九州商業高校校庭遺跡、45. 夫婦塚墳墓群、46. 香春隱神社古墳、47. 蔵ヶ原古墳群・横穴墓群、48. 下伊田遺跡群、49. 水鳥古墳、50. 棚木横穴墓群、51. 上吉田古墳群、52. 上吉田横穴墓群、53. 升ヶ原遺跡、54. 山伏塚、55. 上の原古墳、56. 上の原遺跡群、57. 小塚横穴墓群、58. 寺の上遺跡群、59. 寺の裏遺跡、60. 天神前遺跡、61. 天神山古墳群、62. 松ノ木田遺跡、63. 木殿遺跡、64. 門出遺跡、65. 下ノ田遺跡、66. 倉園遺跡、67. 長谷池遺跡群、68. 向陽台石棺墓群、69. 和田古墳群、70. 和田横穴墓群、71. 松山遺跡、72. 桃山遺跡、73. 宮山遺跡、74. 宮山古墳群、75. 田淵遺跡、76. 糸田城跡、77. 松ヶ迫1号墳、78. 松ヶ迫2号墳、79. 松ヶ迫遺跡、80. 出ヶ浦古墳、81. 古賀ノ峯遺跡、82. 原遺跡、83. 堤下古墳群、84. 上糸田遺跡、85. 高木公園古墳、86. 窪田古墳群、87. 岩下散布地、88. 番町散布地、89. 岩屋古墳、90. 見立大池東古墳、91. 見立古墳、92. 狐ヶ迫横穴墓群、93. 角銅原古墳群、94. 角銅原遺跡、95. 弓削田原A遺跡、96. 弓削田原B遺跡、97. 弓削田原C遺跡、98. 貴布禰神社古墳群、99. 見立遺跡、100. 法光寺裏4・5号墳、101. 法光寺裏横穴墓群・古墳群、102. 法光寺裏6号墳、103. 大藪横穴墓群・大藪古墳、104. 長浦横穴墓群、105. 成道寺石棺墓群A群、106. 成道寺公園内1号墳、107. 成道寺石棺墓群B群、108. 経筒出土地、109. 成道寺公園横穴墓群、110. 横木遺跡、111. 天台寺跡（上伊田廃寺）、112. 天台寺瓦窯跡、113. 伊田狐塚横穴墓群、114. 上伊田東横穴墓群、115. 蟲尾横穴墓群・蟲尾古墳、116. 小児甕棺出土地、117. 大下横穴墓群・伊加利1号墳、118. 伊加利2号墳、119. 伊加利3号墳、120. 城山第1地点、121. 城山第2地点、122. 岩龜八幡横穴墓群・伊加利4号墳、123. 伊加利5号墳・6号墳、124. 田中横穴墓群・古墳群、125. 六角堂横穴墓群、126. 伊加利9号墳、127. 岡山横穴墓群・岡山古墳、128. 柳瀬山横穴墓群、129. 明神山横穴墓群、130. 建徳寺古墳群、131. 城ノ越横穴墓群、132. 柿原横穴墓群、133. 道手横穴墓群、134. 狐塚横穴墓群・古墳群、135. 丸山古墳、136. 無田山横穴墓群、137. 稲荷山横穴墓群、138. 安永横穴墓群、139. 大行事横穴墓群I、140. 号四郎窯跡、141. 椎木谷城、142. 大三輪神社横穴墓群、143. 野上散布地、144. 上弓削田古墳群、145. 古賀古墳群、146. 下位登遺跡、147. 位登古墳、148. 位登横穴墓群、149. 岩鼻古墳、150. 田原遺跡、151. 公門原遺跡、152. 冥加塚遺跡、153. 猪位金古墳群、154. 石橋池西古墳群、155. 田原古墳群、156. 鎮西原遺跡、157. 猪位金2号墳、158. 金國城跡、159. 永井遺跡

律令制期には、太宰府と豊前国府を結ぶ古代官道の中継点として田川駅が設置されていたことが延喜式に見える。また、7世紀末～8世紀前半頃に、朝鮮半島系の文様を施した軒瓦を使用する古代寺院が、この古代官道に沿って点々と建立されたことが知られている。田川地方でも田川市上伊田の天台寺跡（上伊田廃寺）がこの時期に創建されており、特に華麗な唐草文様を施した新羅系の軒瓦は天台寺瓦として著名である（註33）。

(註)

- 註 1 田川市史編纂委員会編 1974『田川市史 上巻』第一篇 田川市の自然地理 第一章 位置と面積
- 註 2 植木忠氏のご教示による
- 註 3 井上裕弘 他 1985『合田遺跡』赤村教育委員会
- 註 4 田川市史編纂委員会編 1974『田川市史 上巻』第二篇 先史時代 第一章 繩文式文化時代の田川
- 註 5 註4文献
- 註 6 上野智裕 1988『下伊田遺跡群』田川市教育委員会
- 註 7 水ノ江和同・新原正典 他 1997『伊方小学校遺跡（第2・3地点）・宝珠遺跡』方城町教育委員会
- 註 8 新原正典 1993『公門原遺跡・真崎遺跡』川崎町教育委員会
- 註 9 岩熊真実 1998『宮山遺跡』糸田町教育委員会
- 註 10 田川市史編纂委員会編 1974『田川市史 上巻』第二篇 先史時代 第2章 弥生式文化時代の田川
- 註 11 註9文献
- 註 12 田川市史編纂委員会編 1974『田川市史 上巻』第二篇 先史時代 第3章 古墳文化時代の田川
- 註 13 田代健二 1993『長谷池遺跡群』田川市教育委員会
- 註 14 浜田信也 1977『迫古墳』方城町教育委員会
- 註 15 原口信行 1954「箱式石棺出土の内行花文鏡」考古学雑誌第40巻第3号
- 註 16 註8文献
- 註 17 註11文献
- 註 18 佐田茂 1984『セスドノ古墳』田川市教育委員会
- 註 19 川延昭人・伊崎俊秋 他 1998『長畠遺跡・宮原遺跡・小倉古墳・才立横穴墓』香春町教育委員会
- 註 20 川延昭人・伊崎俊秋・飛野博文 1987『冥加塚遺跡』福岡県教育委員会
- 註 21 井上裕弘 1985『永井遺跡』川崎町教育委員会
- 註 22 長谷川清之 1990「遠賀川流域における横穴墓の研究」『児島隆人先生喜寿記念論文集 古文化論叢』
- 註 23 橋口達也 他 1976『狐塚古墳群』大任町教育委員会
　　〃 1978『狐塚古墳群II』〃
- 註 24 村上久和・吉留秀敏 他 1992『上ノ原横穴墓群』I・II 大分県教育委員会
- 註 25 長谷川清之 1981『狐ヶ迫横穴群』田川市教育委員会
- 註 26 柳田康雄 1983『夏吉古墳群・清瀬横穴群・伊田狐塚横穴群』田川市教育委員会
- 註 27 長嶺正秀 他 1977『竹並遺跡』竹並遺跡調査会
- 註 28 註23文献
- 註 29 緒方泉 他 1998『稻荷山横穴群』大任町教育委員会
- 註 30 田代健二 1993『長谷池遺跡群』田川市教育委員会
- 註 31 小方泰宏 1987「田川地域考古学研究(1)夏吉古墳群の歴史的位置」『郷土田川』第30号 田川郷土研究会
- 註 32 田川市史編纂委員会編 1974『田川市史 上巻』第三篇 古代・中世 第一章 古代国家と田川
- 註 33 森田勉 他 1990『天台寺跡（上伊田廃寺）』田川市教育委員会

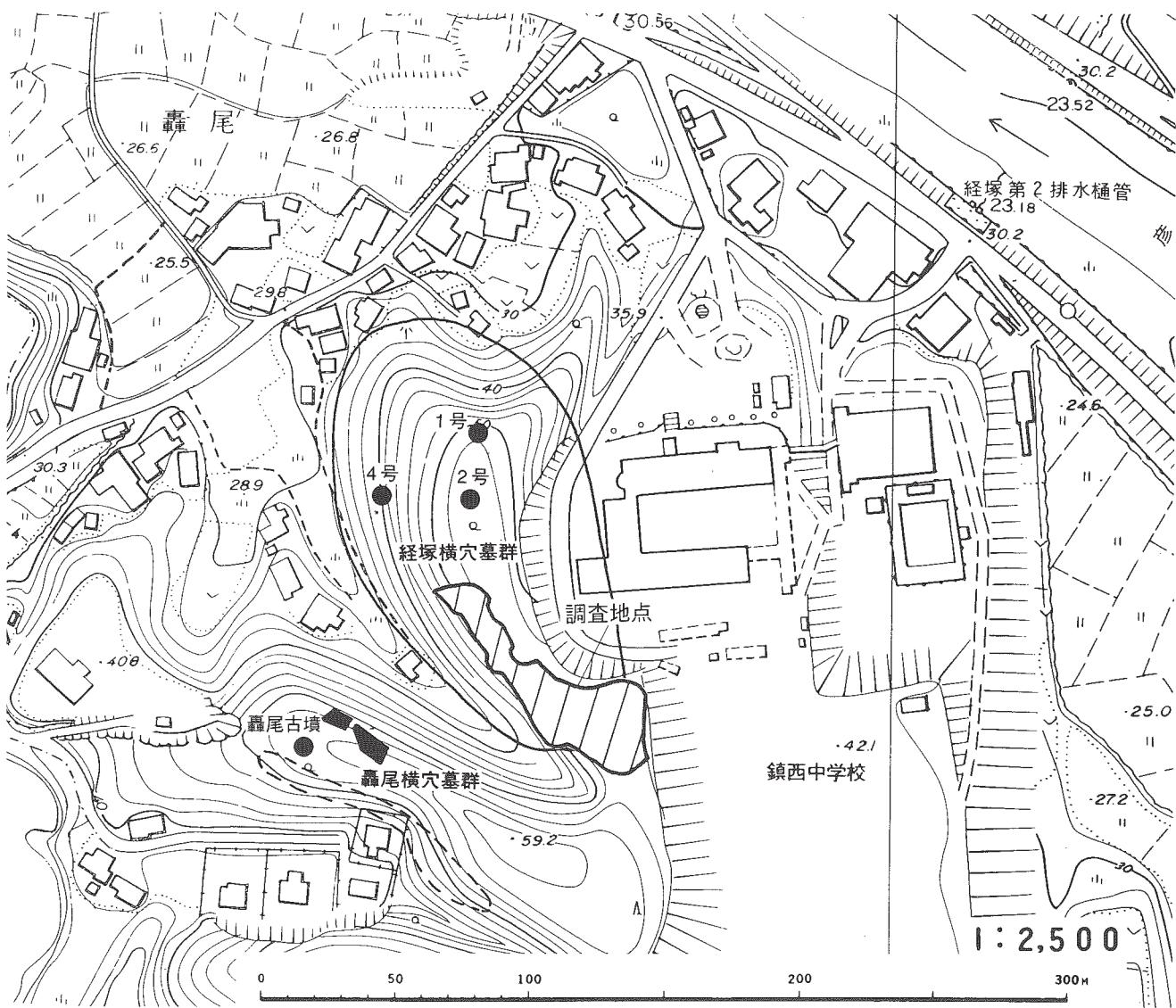


第3図 経塚横穴墓群・3号墳遺構配置図 (S = 1/300)

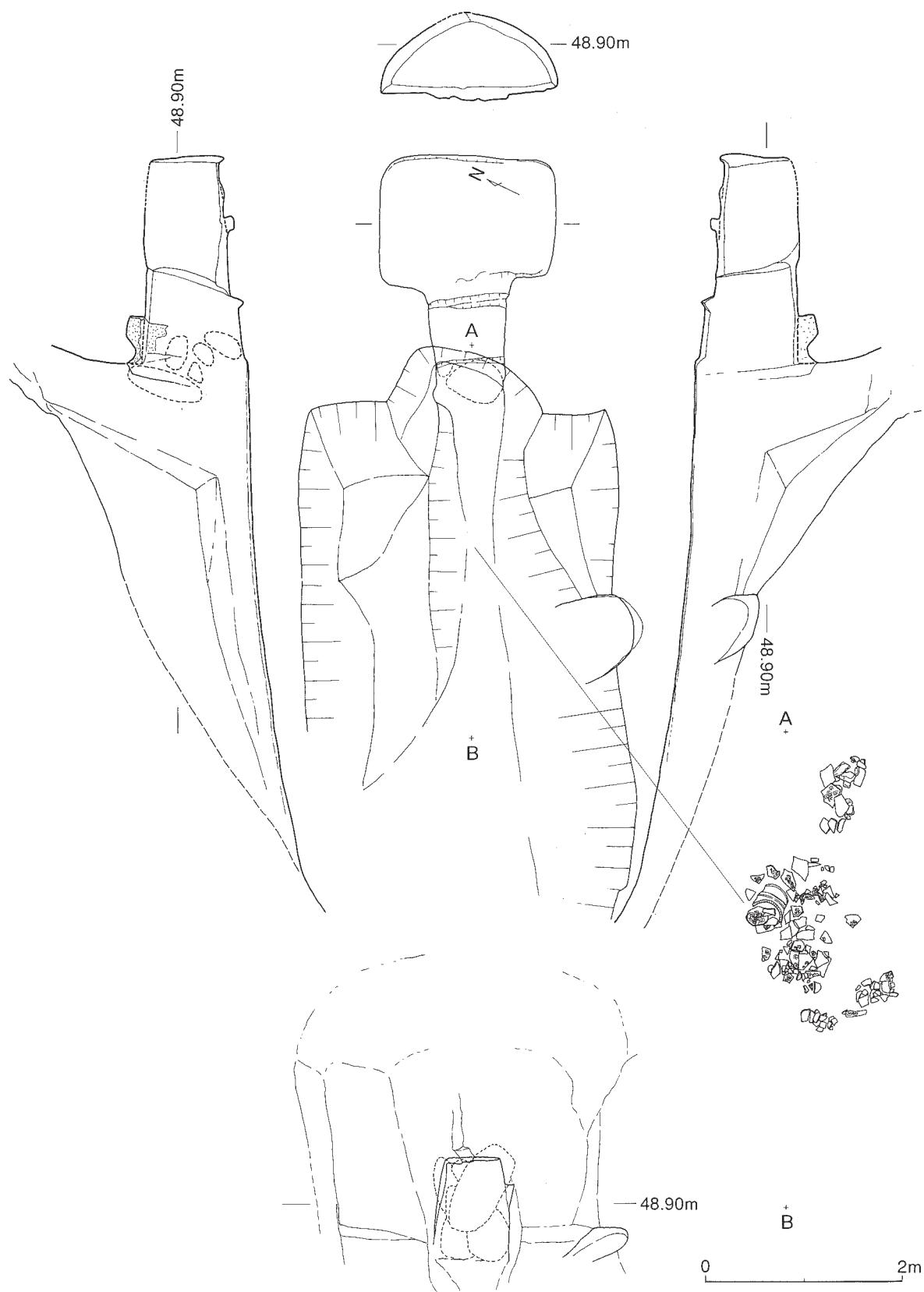
第2章 経塚横穴墓群（第1・第2支群）の調査

第1節 はじめに

経塚横穴墓群・古墳群は田川市東南部の彦山川を望む標高40m前後の低丘陵上にある。尾根上に4基の円墳があり、尾根を取り巻くような形で150基ほどの横穴墓が分布している。1996年にこのうちの3号墳と横穴墓群のもっとも南側の横穴墓10基（第1支群）を調査し、1997年に、第1支群の1部と第2支群の調査を行った。1997年に調査した遺構は、横穴墓16基と小横穴9基である。各横穴墓の計測値等は第1表を参照していただきたい。以下、横穴墓群の概要について述べたい。なお、横穴墓の表記は、第1支群1号横穴墓を1-1と略記する。



第4図 周辺地形図 (1/2,500) [轟尾横穴墓群 1989 より]



第5図 1-1横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

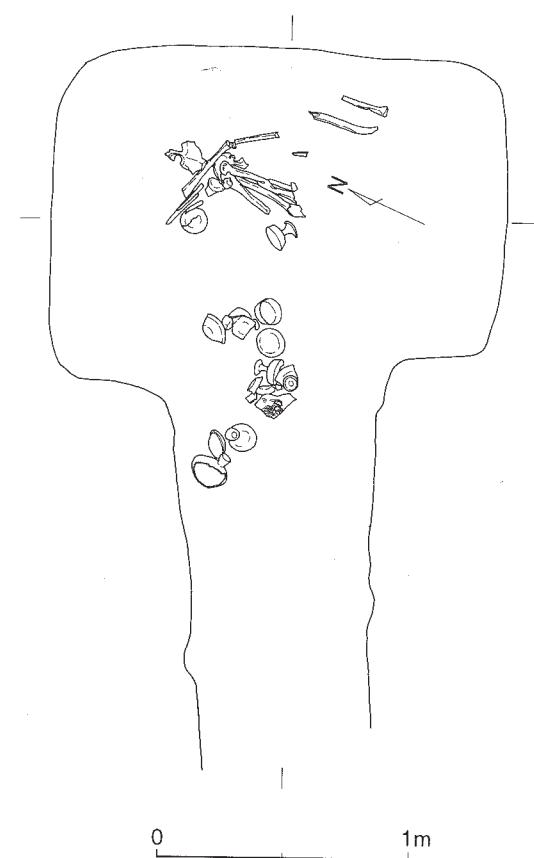
横穴墓の構築されている丘陵は第三紀層砂岩で形成されており、第2支群が位置している部分は岩質が比較的堅緻なため崩落は少なく、遺存状況は良好だったが、第1支群の1-3・1-7aは完全に天井が崩落していた。

横穴墓内部からの遺物の出土は少なかったが、1-1と小横穴以外の横穴墓はすべて盜掘を受けており、当初から副葬品が少なかったかどうかは判定困難な状況であった。

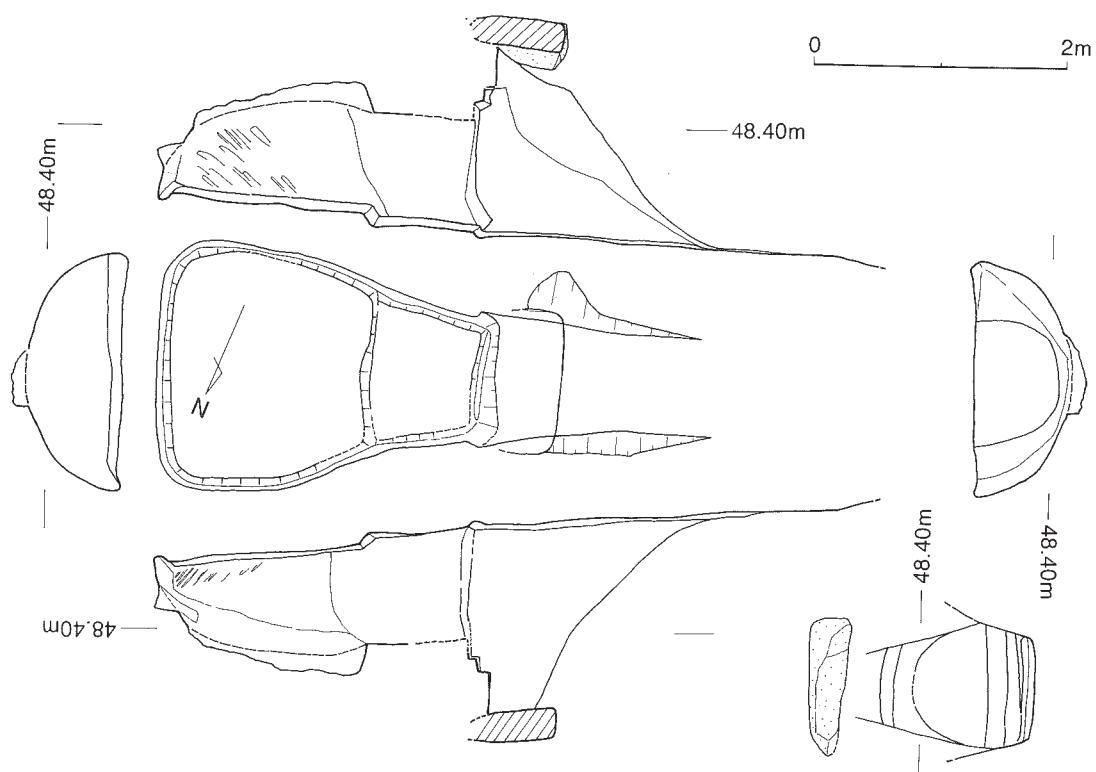
第2節 遺構

1-1 横穴墓

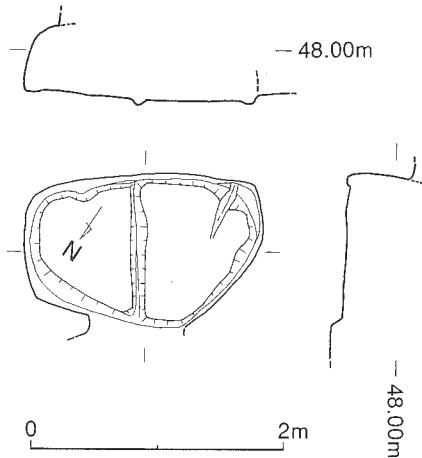
調査区の南端に位置しており、横穴墓群全体の中でももっとも南に位置していると考えられる。1-2~5と比べ、1mほど高い位置に構築されている。小横穴以外の横穴墓の中で、唯一盜掘を受けておらず、内部から、副葬品と人骨が出土した。副葬品は、須恵器と装飾品類で、羨道から玄室前



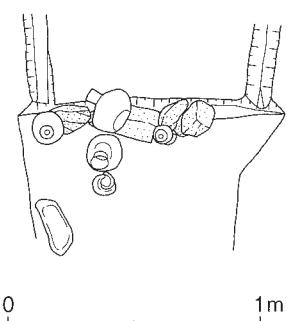
第6図 1-1 横穴墓人骨・副葬品出土状況 (S = 1/30)



第7図 1-2a 横穴墓実測図 (S = 1/60)



第8図 1-2b 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



第9図 1-3 横穴墓遺物
出土状況 ($S = 1/30$)

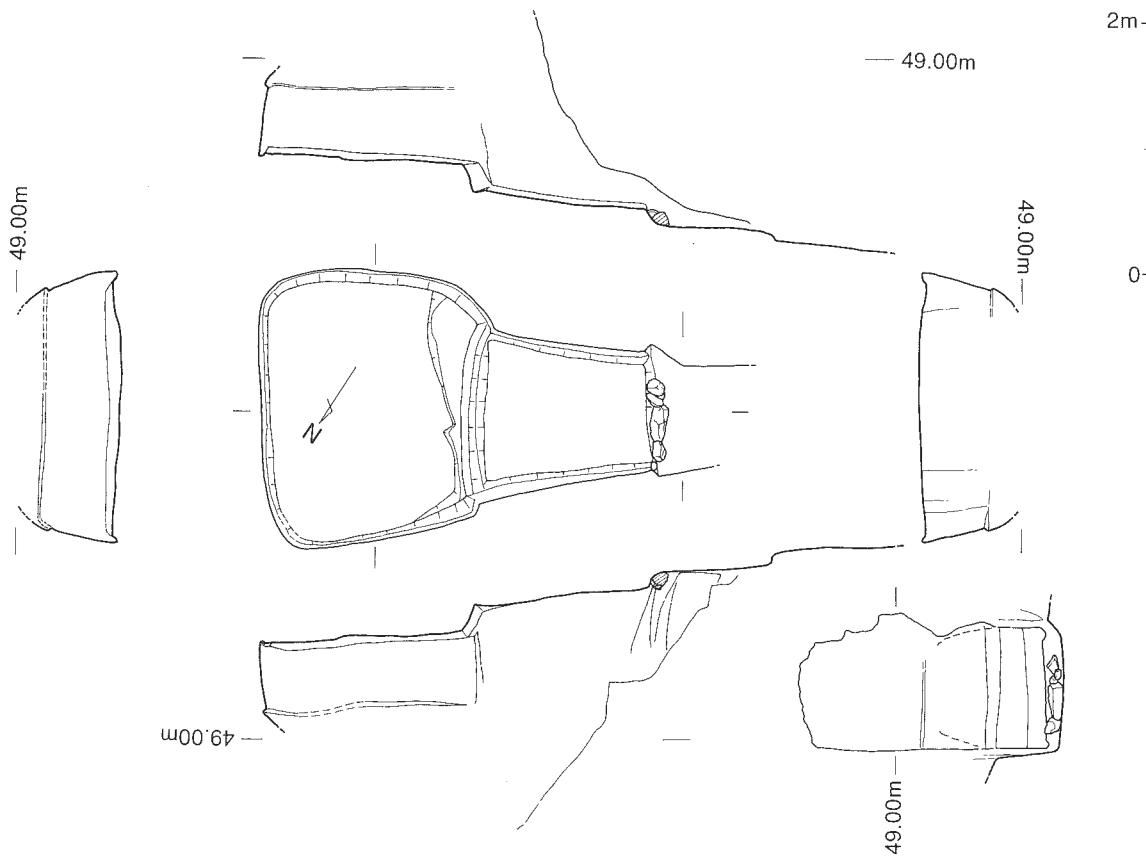
半部分に置かれていた。閉塞は40~50cm前後の大型のやや扁平な礫を組み合わせて行っており、礫の間は土で目張りをしていた。羨道と墓室の間には溝がある。前庭の左右に棚状に一段高い部分がある。墓道から須恵器の大甕が割れた状態で出土した。また、墓道の南側壁に小横穴の床部分と思われる窪みがある。構築途中で放棄したものか、あるいは墓道の拡張により破壊された痕跡と思われる。

1-2a 横穴墓

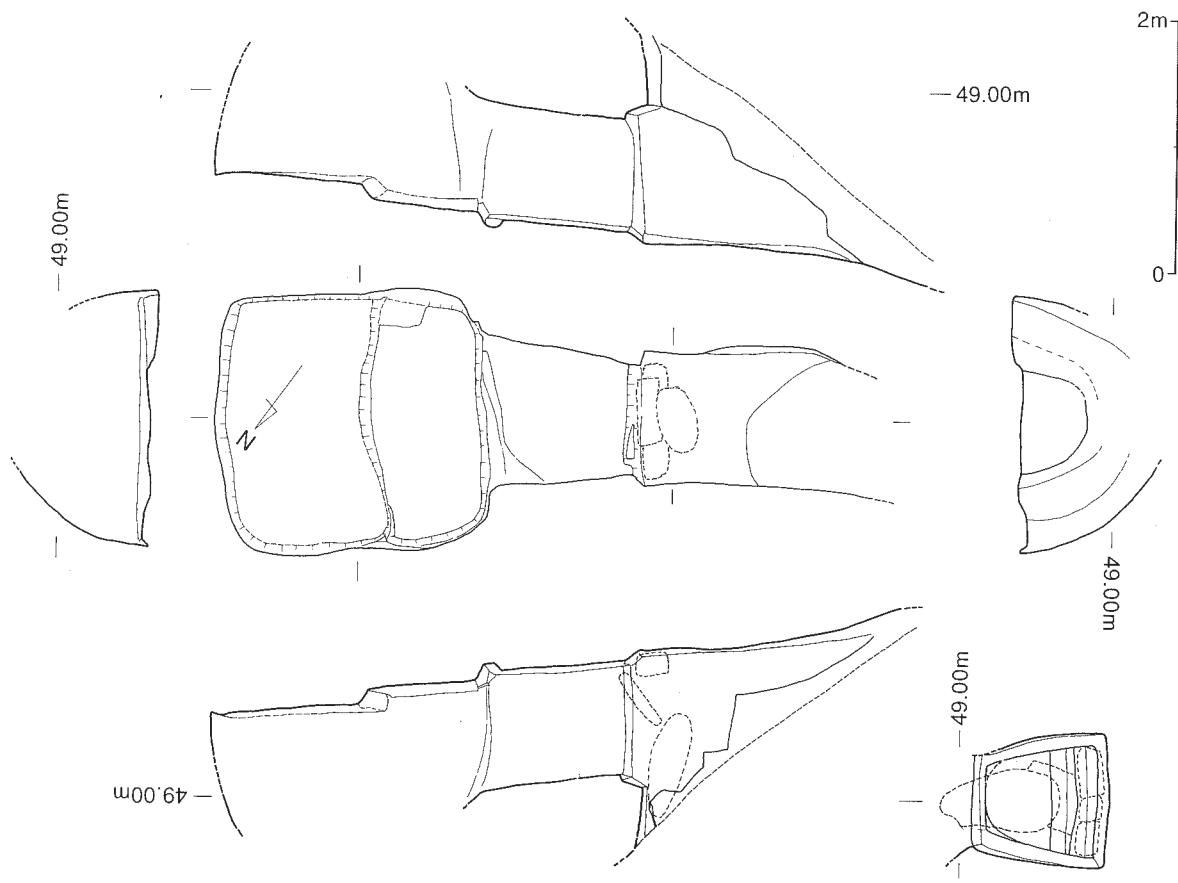
羨門部に庇石が残っており、前庭部分の埋土中から須恵器高杯、大甕破片などが出土したが、内部から遺物は出土していない。

1-2b 横穴墓

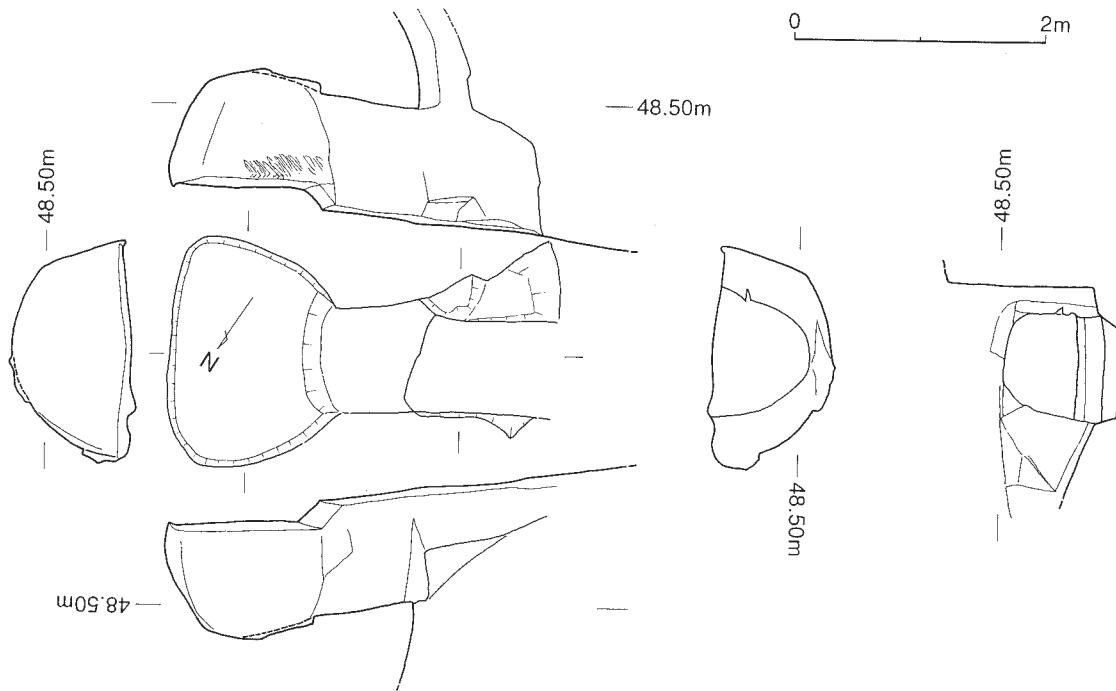
重機進入路掘削の際に天井が削平されたため、天井形態は不明である。平面形はいわゆる巾着形である。遺物は出土していない。



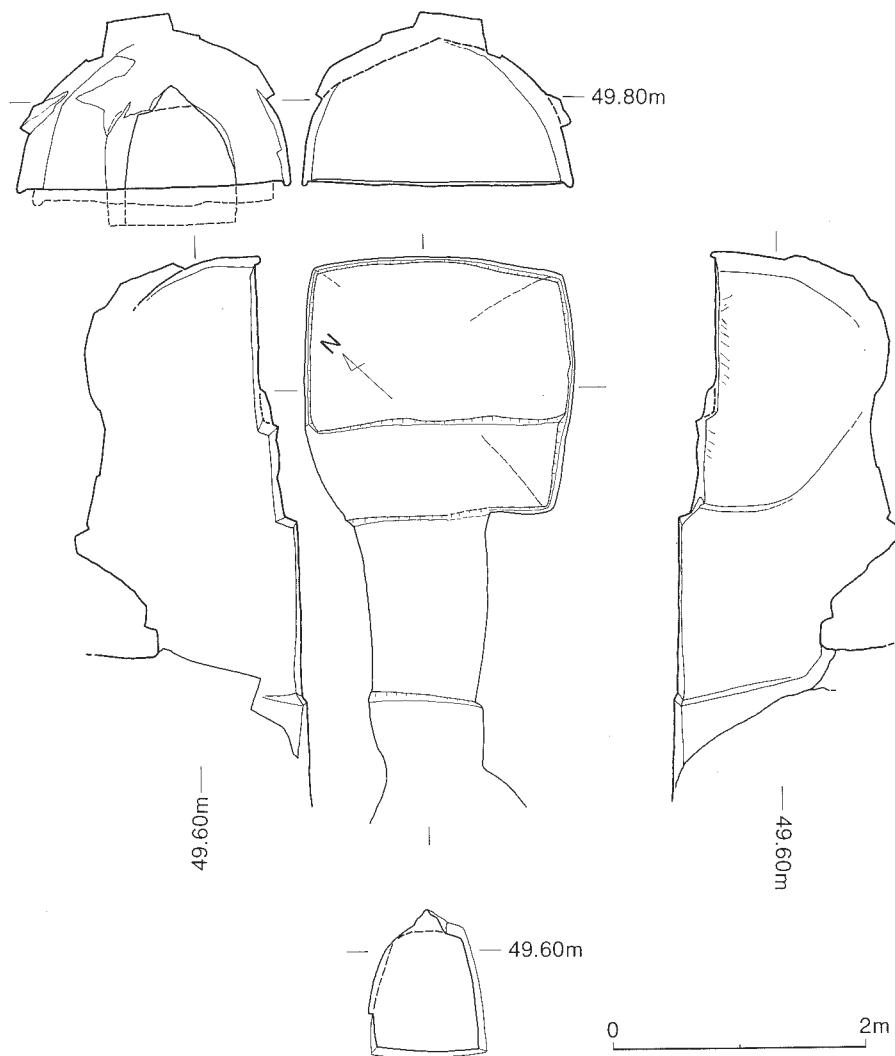
第10図 1-3 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



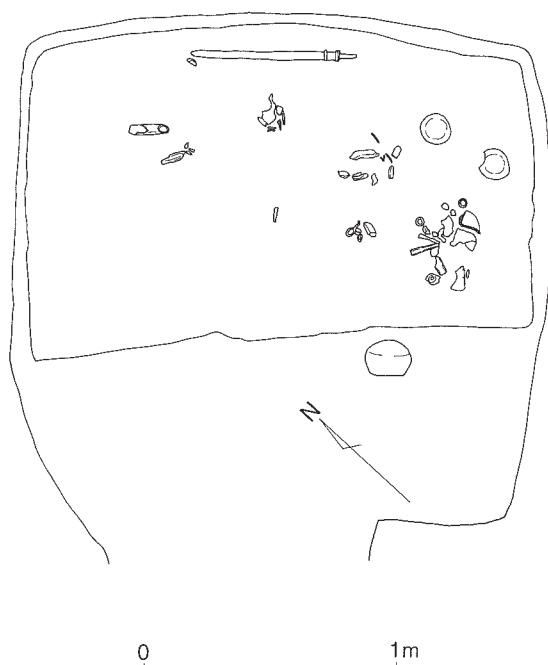
第11図 1-4 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



第12図 1-5 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



第13図 1-6a横穴墓実測図 (S = 1/60)



第14図 1-6a横穴墓人骨・副葬品出土状況 (S = 1/30)

1-3 横穴墓

天井部分のほとんどが崩落していたため形態は不明であるが、壁面に軒線があり、寄棟または方形であったと推測できる。羨道部から須恵器などの副葬品が出土した。

1-4 横穴墓

1-3とほぼ同レベルに構築されている。天井の大部分が崩落していたため天井形態は不明である。閉塞は、15cm内外の角礫の基礎の上に板石を立てて行っている。玄室床面は奥側が一段高くなっている、屍床として造り出したものと思われる。羨道から須恵器・

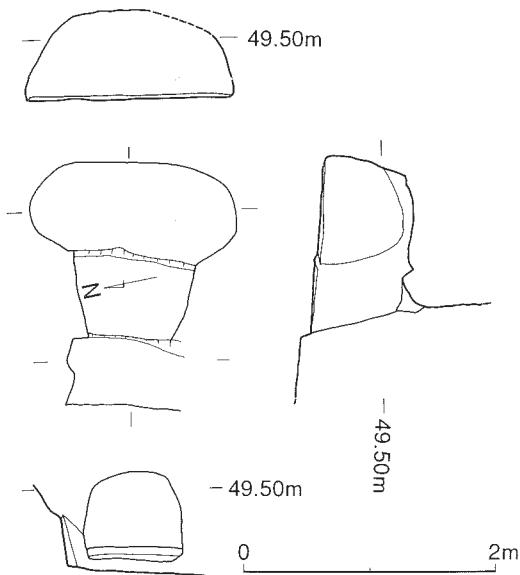
土師器が、玄室から装飾品類・鉄鏃などが出土した。

1-5 横穴墓

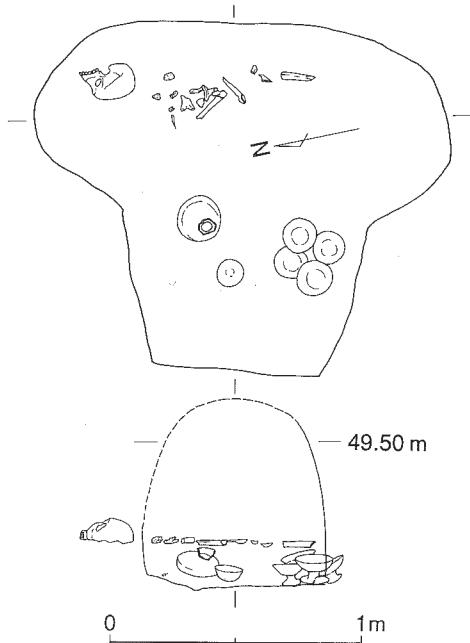
崩落はほとんどなく、内部はほぼ完全な状態で遺っていた。遺物は出土していない。

1-6a 横穴墓

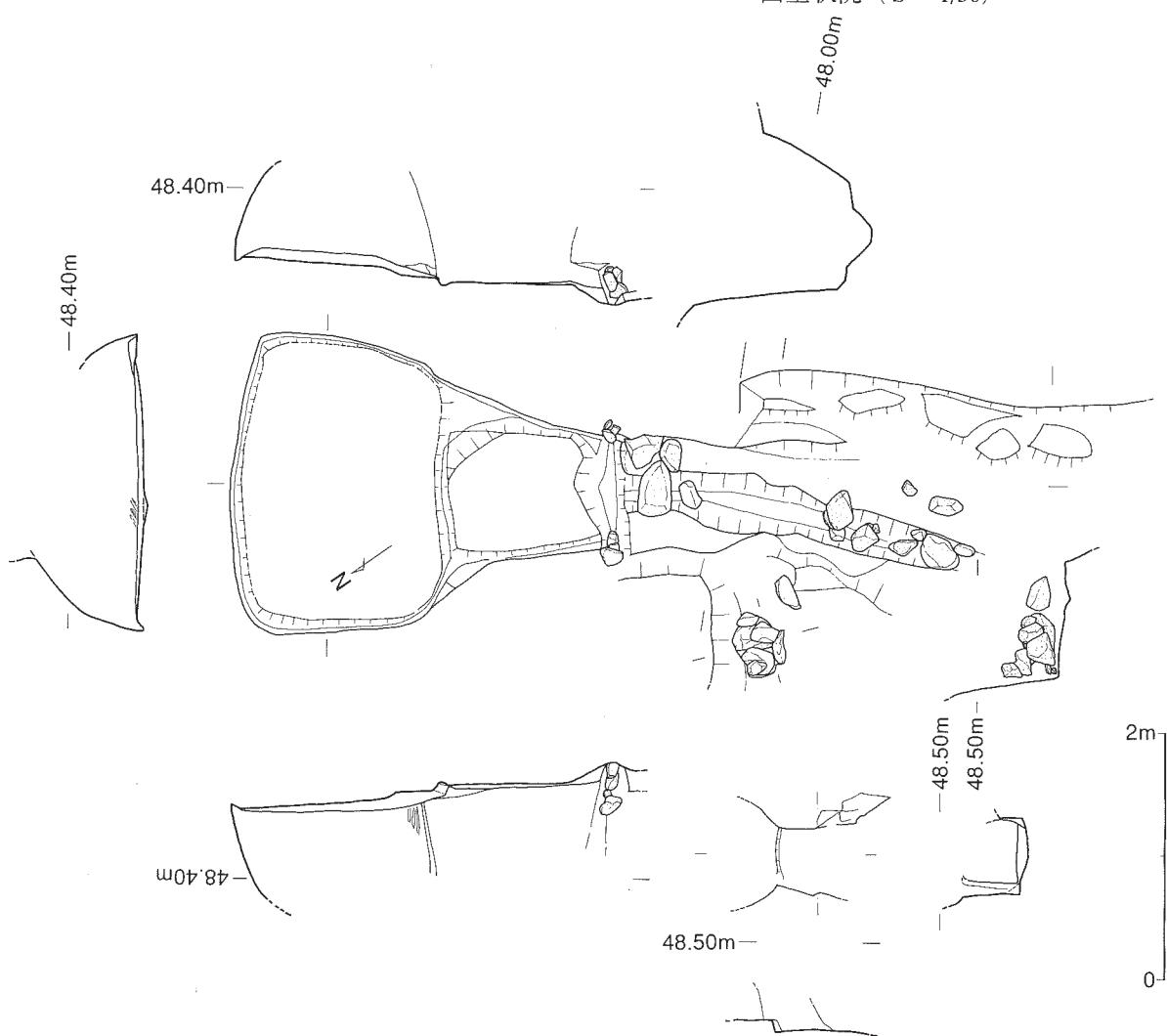
天井は一部が崩落していたが、残存部分からみて寄棟形と推測される。玄室床面の奥側に1段高く屍床を造り出している。玄室奥壁近くから鉄剣が出土したほか、玄室前側から提瓶が、屍床部から人骨とともに須恵器杯や装飾品類が出土した。鉄剣の



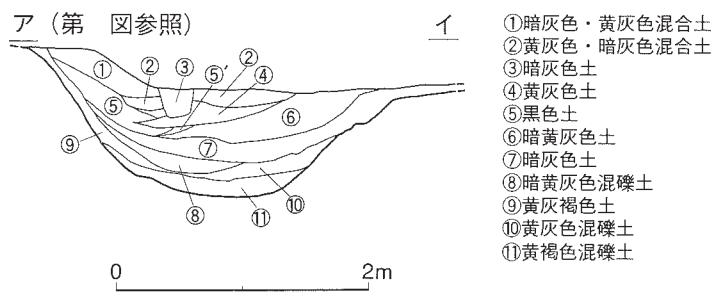
第15図 1-6b 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



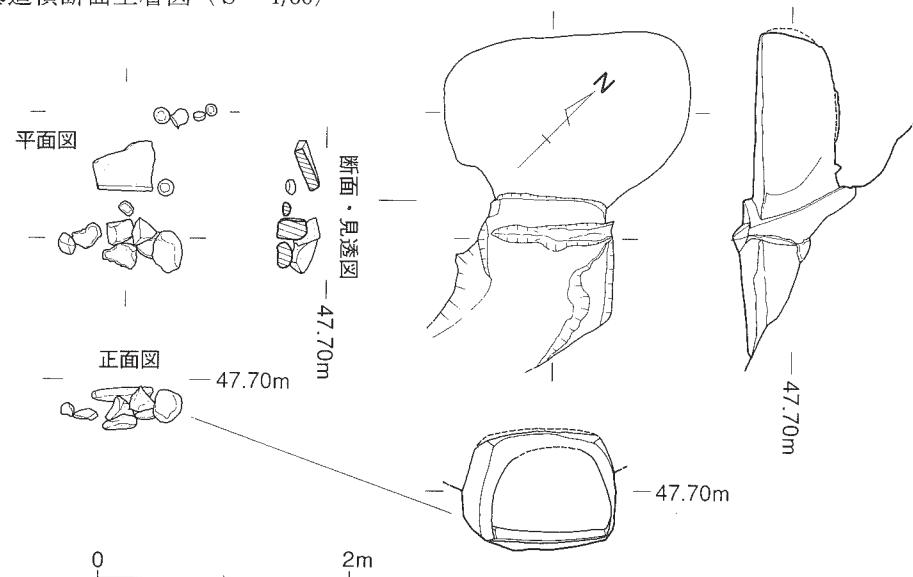
第16図 1-6b 横穴墓人骨・副葬品
出土状況 ($S = 1/30$)



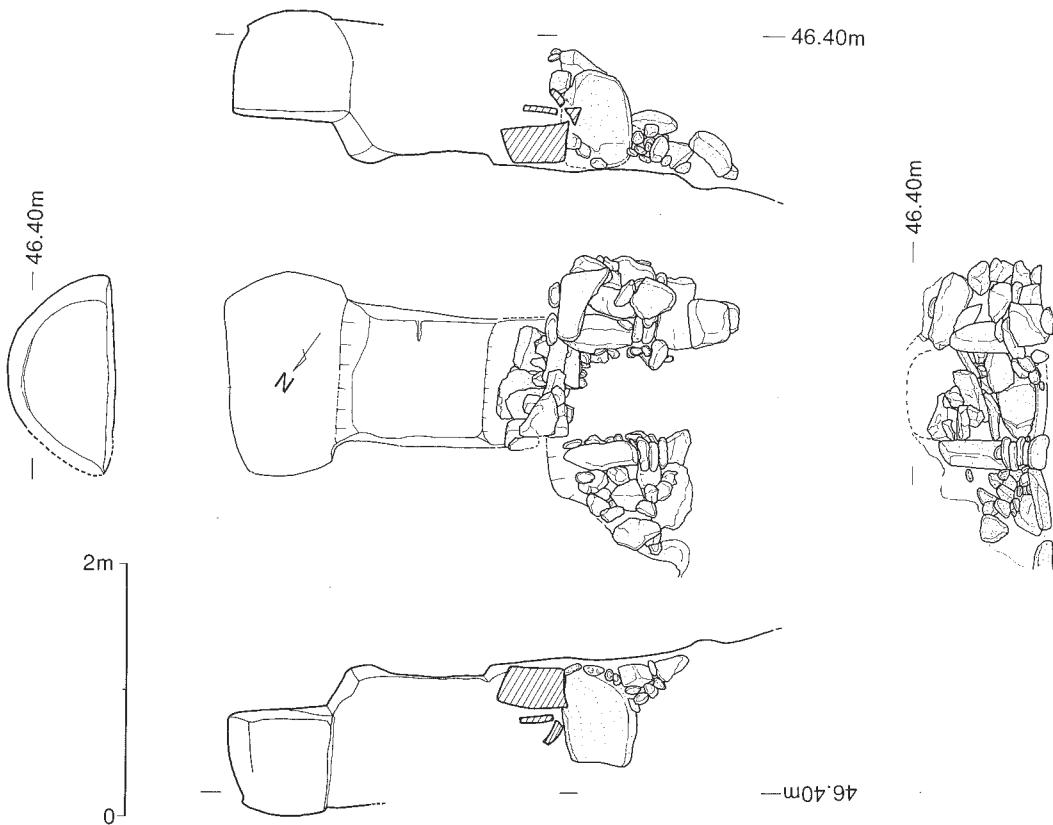
第17図 1-7a 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



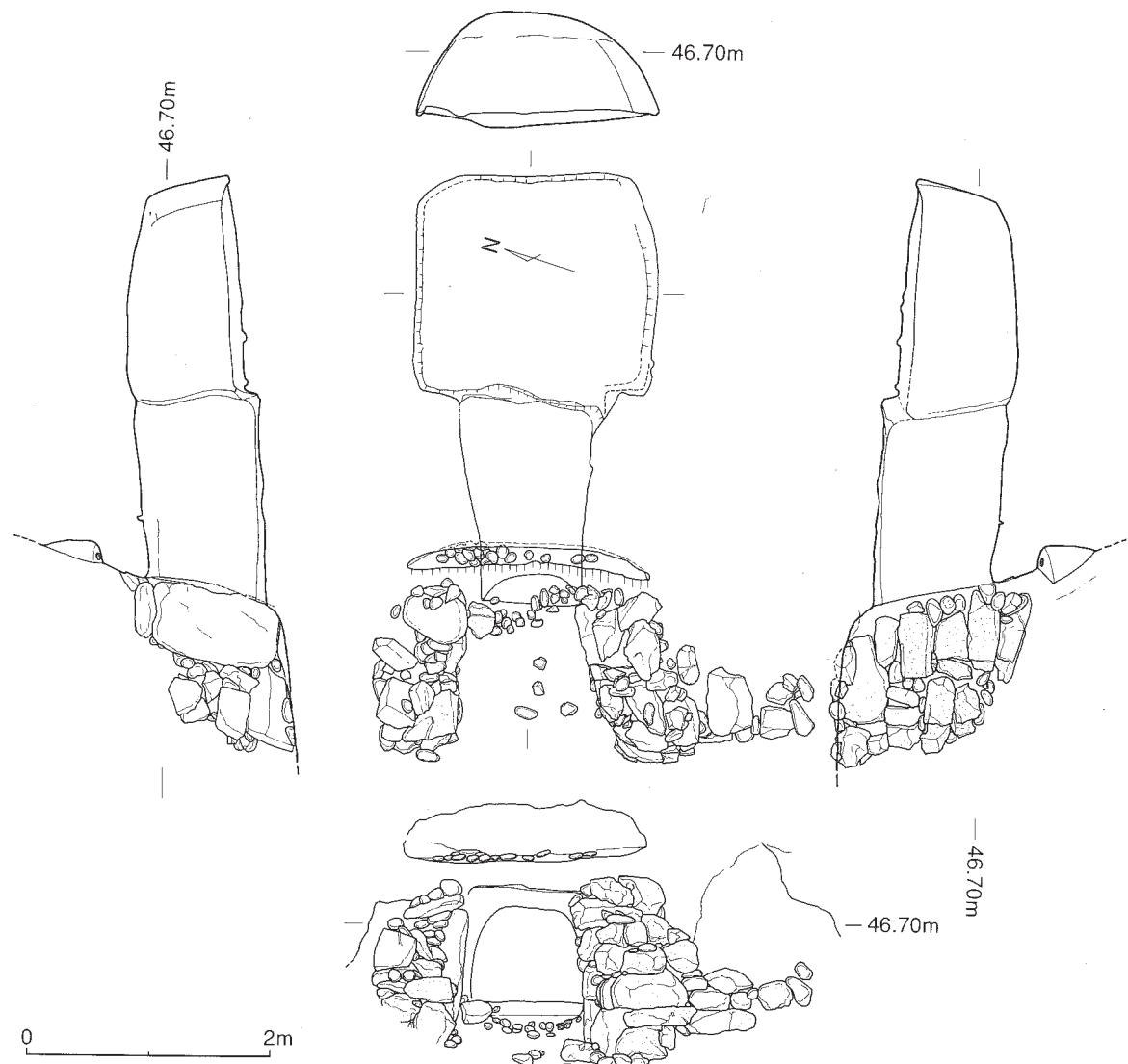
第18図 1-7 横穴墓墓道横断面土層図 (S = 1/60)



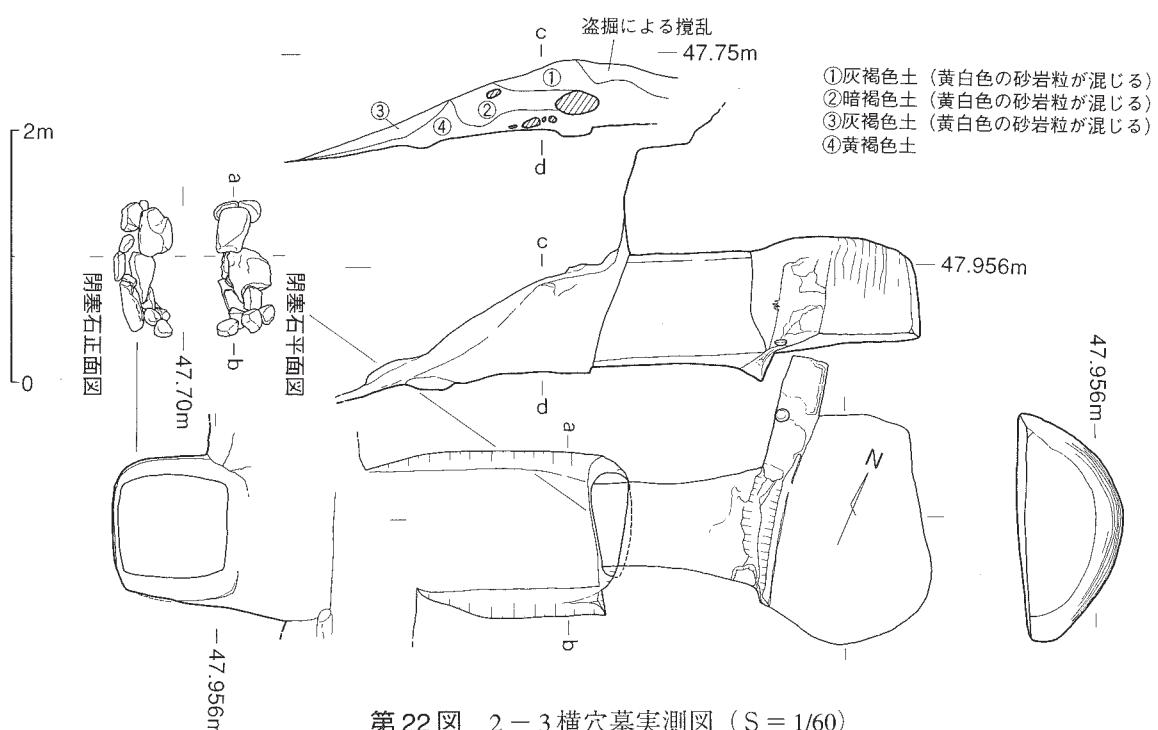
第19図 1-7c 横穴墓実測図 (S = 1/60)



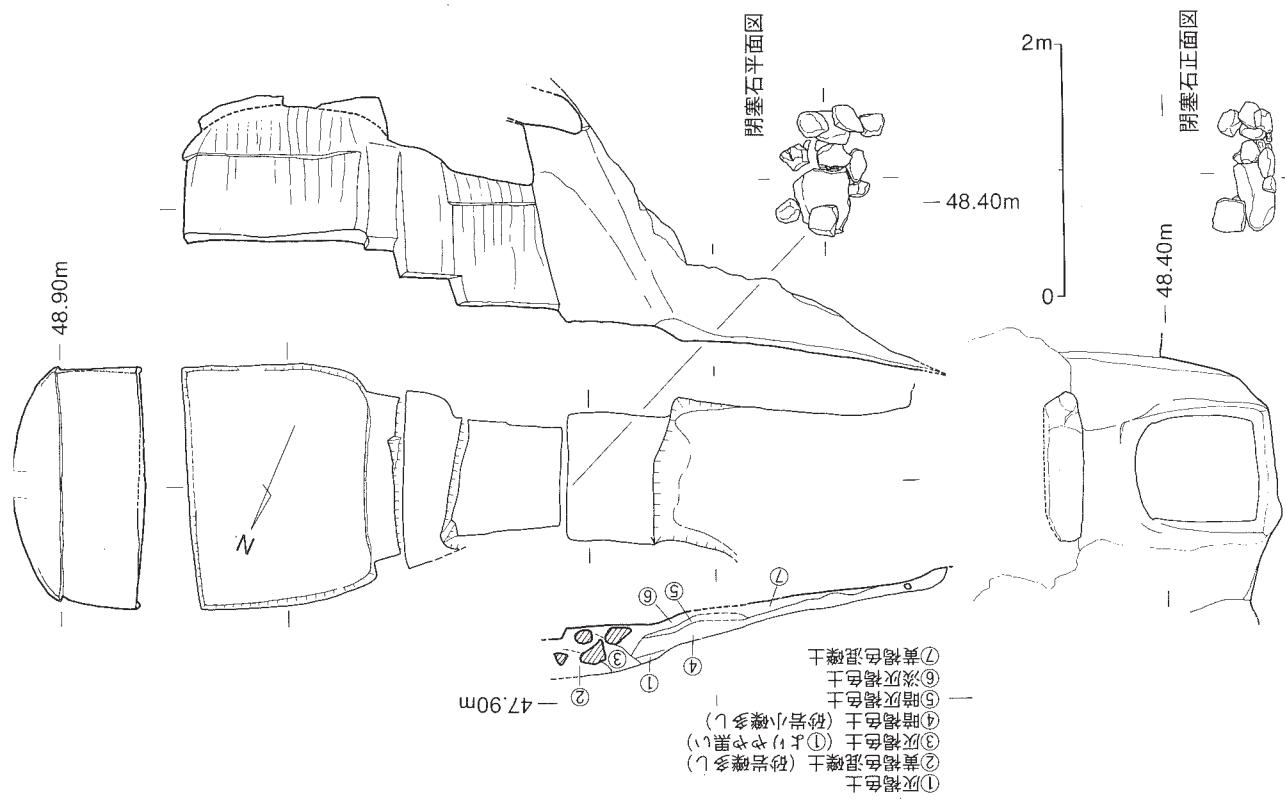
第20図 2-1 横穴墓実測図 (S = 1/60)



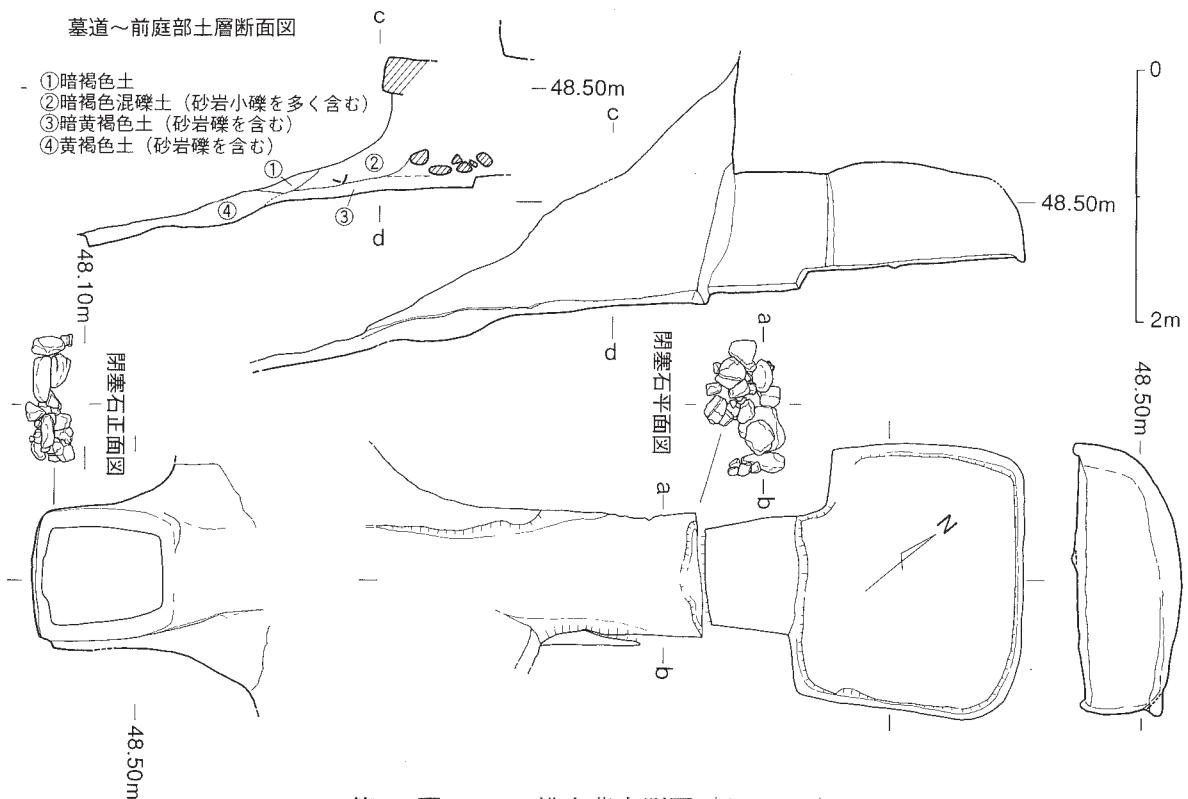
第21図 2-2 横穴墓実測図 (S = 1/60)



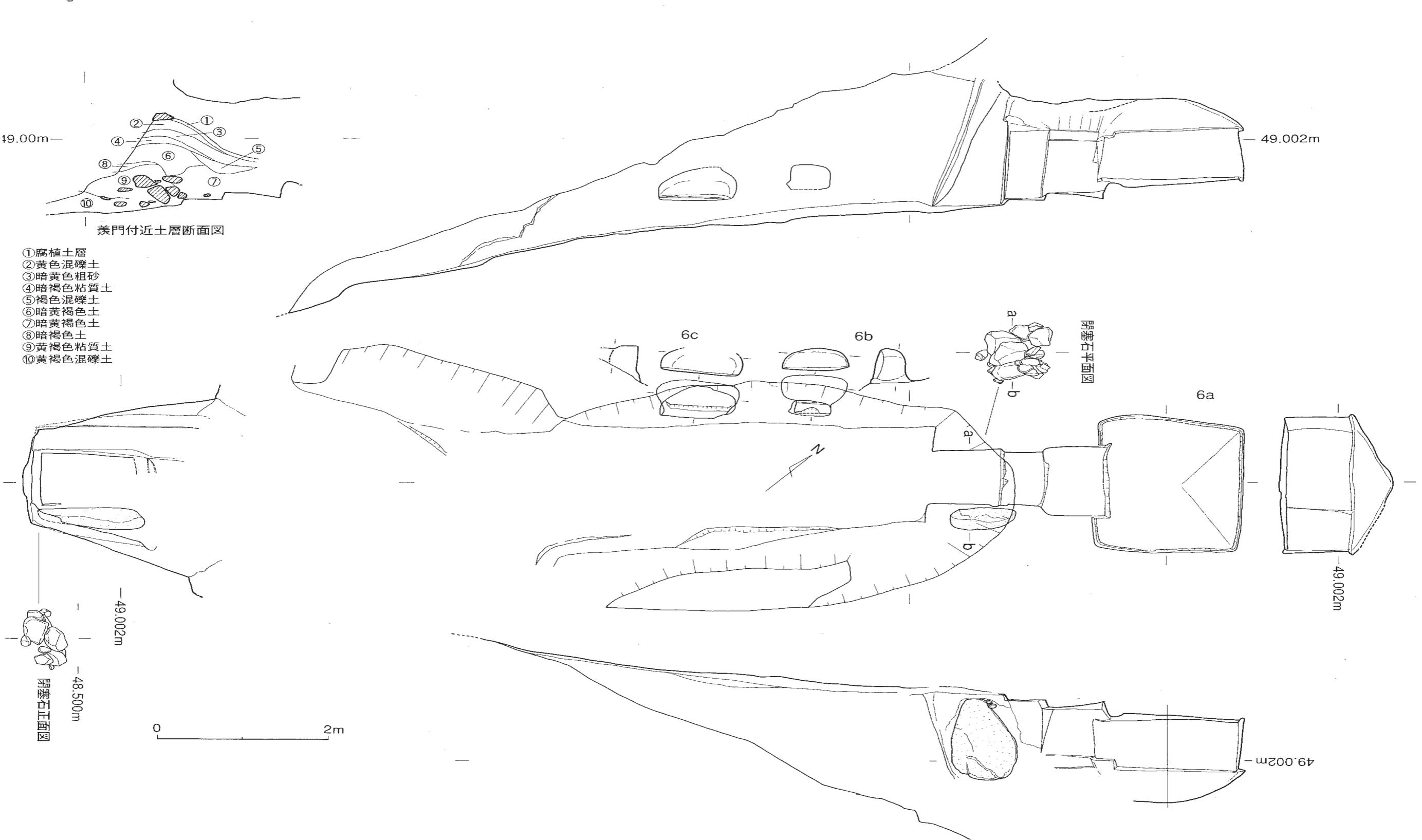
第22図 2-3 横穴墓実測図 (S = 1/60)



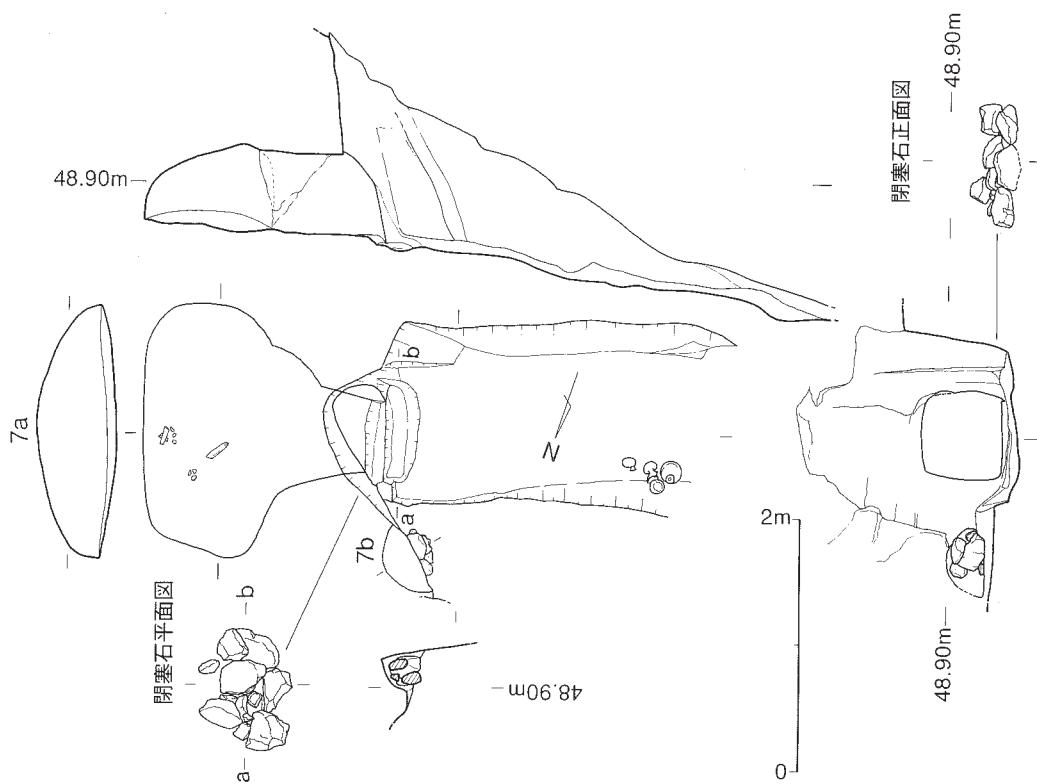
第23図 2-4横穴墓実測図 (S = 1/60)



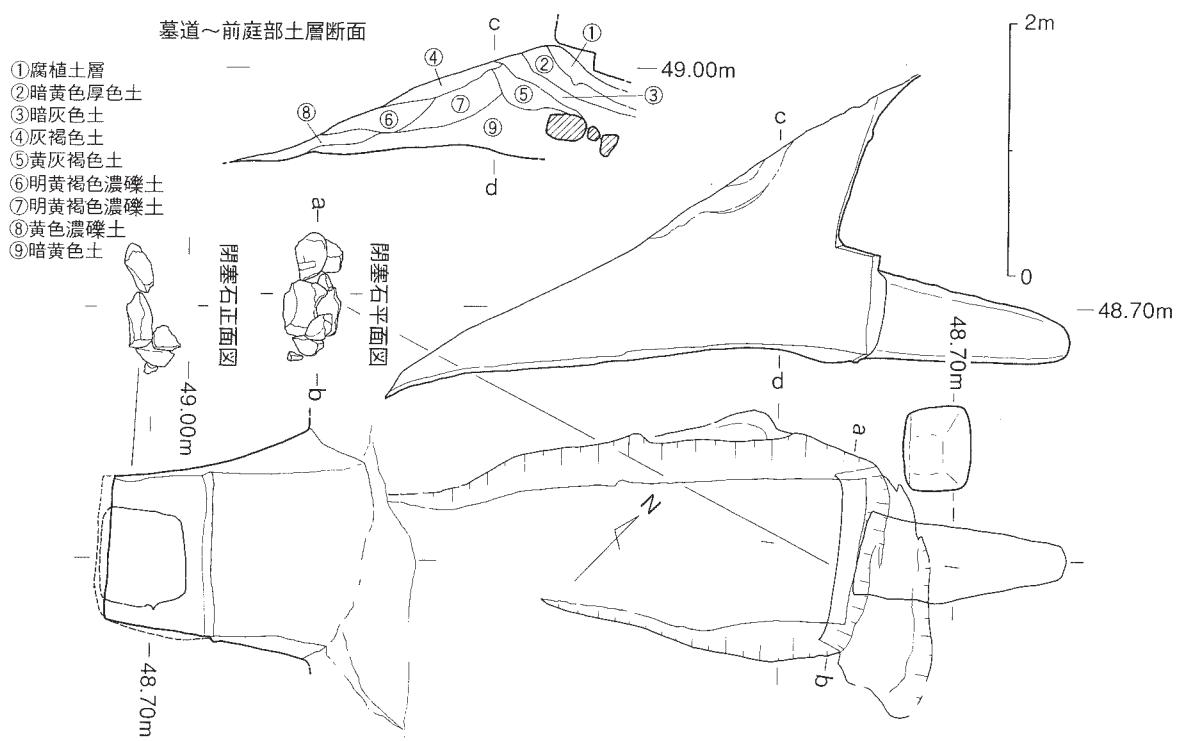
第24図 2-5横穴墓実測図 (S = 1/60)



第25図 2-6 (a, b, c) 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



第26図 2-7 (a, b) 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



第27図 2-8 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

金具類の多くは玄室中央付近から出土している。6a号は、調査以前から開口していたが、調査時には玄室内は落盤で埋まっており、盗掘で攪乱された形跡はみられなかった。金具類が鉄刀から離れた原因は、最近の盗掘によるものではなく、当初玄室中央付近の遺体近くに置かれていた大刀が、追葬などの際に奥壁近くに移動されたためと思われる。須恵器はいずれも伏せた状態で出土している。

1－6b 横穴墓

小型の横穴墓であるが、玄室に成人人骨が遺存していた。遺体は北側に頭を向けて安置されおり、羨道部に土師器高杯と杯が副葬されていた。

1－7a 横穴墓

天井部は完全に崩落しており、壁面のみが遺っていた。前庭部から墓道の一部に主軸方向の溝があり、排水溝と思われる。遺物は須恵器のみで、羨道部から杯が1点出土したほかはすべて墓道からの出土である。

1－7b 横穴墓

1－7aの前庭部壁面にある小横穴で、羨門は10cm内外の礫で閉塞していた。調査中に前庭部壁面が崩落し、内部の調査はできなかった。

1－7c 横穴墓

墓道先端部近くに構築された小型の横穴墓で、10～15cmの礫と板石を組み合わせて閉塞していたが、板石は奥側にたおれていた。玄室内に土師器甕と椀が副葬されていた。

2－1 横穴墓

羨道天井部分は調査時にはすでになく、盗掘により破壊されたものと思われる。羨道状石組みは、横穴羨道部に接する部分に大形の板石を立て、その前面及び控え部分に小形の円礫・角礫を積んでいる。天井石は、調査時には見られなかつたが、盗掘の際に除去されたことも考えられる。遺物は出土していない。

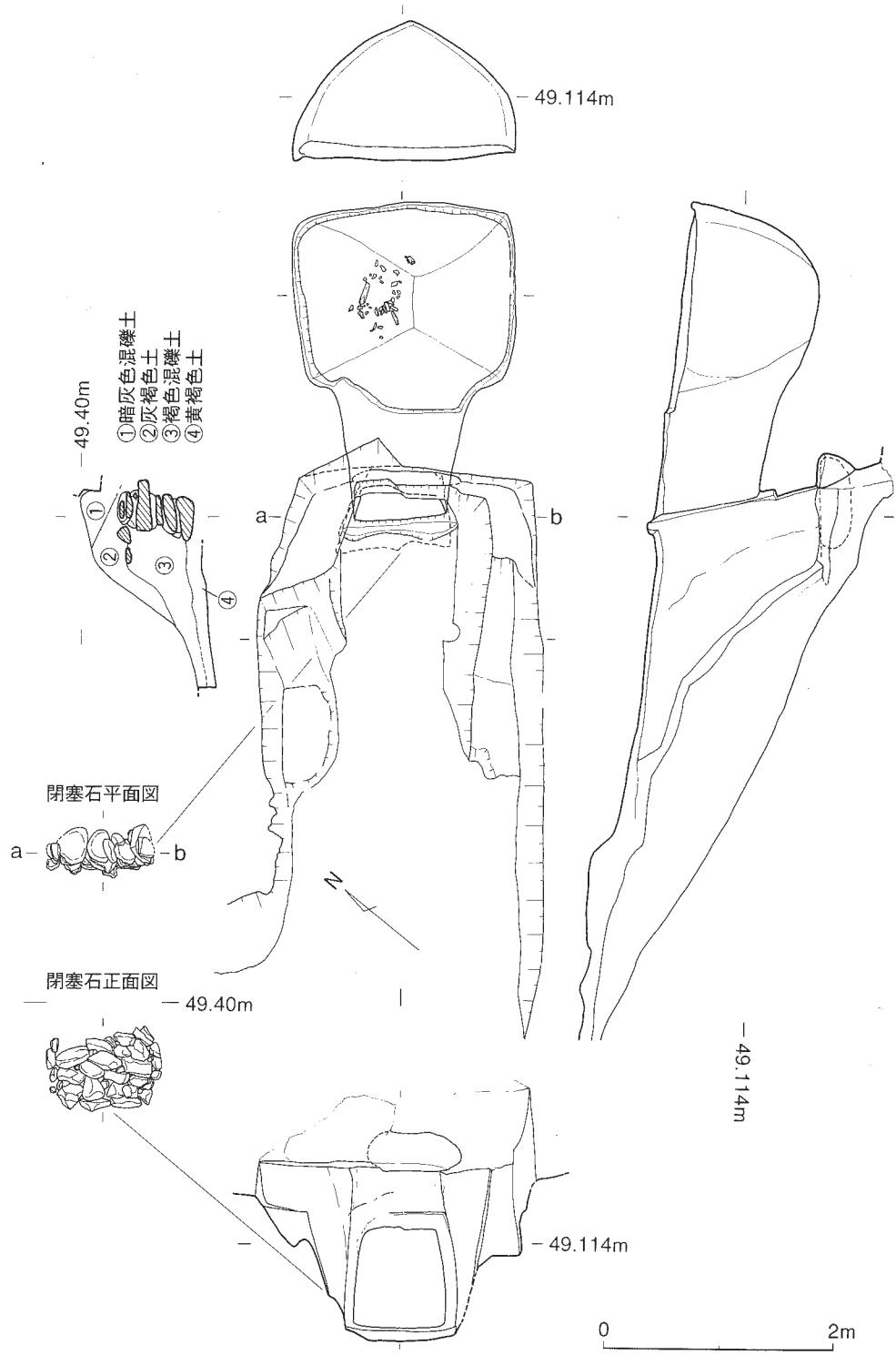
2－2 横穴墓

羨道状石組の北側は、2－1と同様に大形の板石を立て、その前面及び控え部分にやや小形の石を積んで構築しているが、南側部分は基礎部分にやや大形の礫を使用しているほかは、30cm前後の砂岩礫を使用しており、横穴式石室の羨道を思わせる。図には示していないが、天井石と思われる大形の石材が折れた状態で内部に落ち込んでいた。羨門の上に彫り込みがあり、天井石を架けていたものと思われる。横穴羨門部分に小形の円礫が散布しているほかは閉塞石らしきものは見あたらなかつた。

前庭部から須恵器が若干出土したほか、玄室内から耳環が出土している。

2－3 横穴墓

天井部分には、屋根の表現と思われる筋状の装飾が施されている。右袖部分の壁面に穴があり、中から須恵器杯が出土した。この穴には掘削痕がなく、岩盤の層理にそって割れたものと思われ、意図的なものとは考えにくい。遺物は、先述した須恵器杯と、羨道部から出土した高台付の須恵器杯のみである。



第28図 2-9 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

2-4 横穴墓

2-3とは、小さい障壁で区画されている。複室構造の横穴墓で、羨道・前室・玄室のそれぞれの間で大きな段差があり、羨門部からは玄室の天井はほとんど見えない。羨門部には庇石を持つ。羨道・玄室の天井部及び壁面の上半部分に縦方向の筋状の装飾が施されている。また、天井部中心部に主軸方向の浅い溝状の窪みが施されており、屋根の棟の表現と思われる。羨門部分に閉塞石の基礎部分のみが遺っていた。羨道部及び墓道から須恵器杯が出土しているほか、

墓道の2-5横穴墓との共有部分から耳環が出土している。

2-5 横穴墓

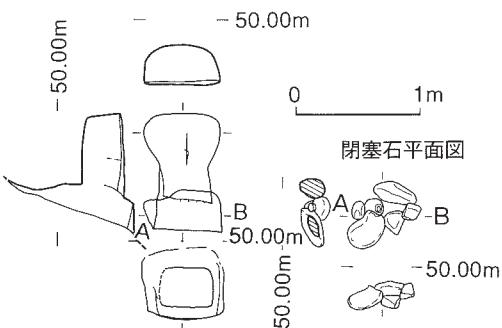
2-4とほぼ同レベルで隣接して構築されており、墓道を共有している。2-6との間は大きな障壁で区画されている。右袖部は、やや奥壁側に寄っている。羨門部分に閉塞石の基礎部分のみが遺っていた。羨門部に浅い溝状の窪みがある。

2-6a 横穴墓

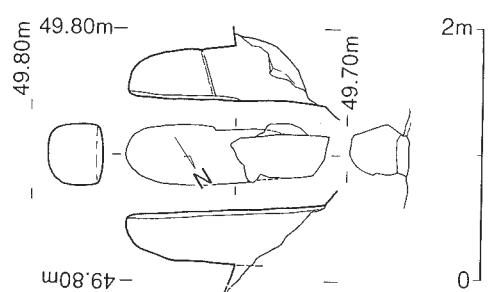
2-4・5とは小さな障壁で区切られ、2-7号とは大きな障壁で区切られている。羨門部の



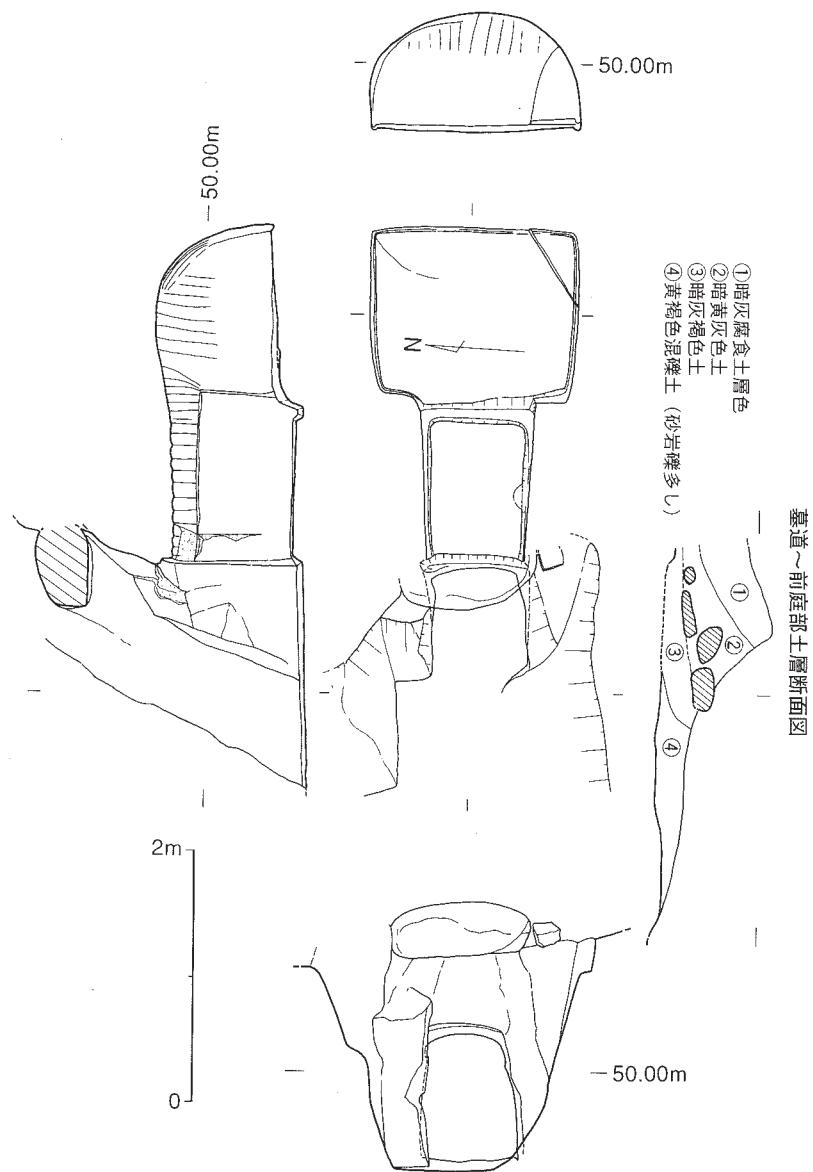
第29図 2-9横穴墓前庭部遺物出土状況 ($S = 1/30$)



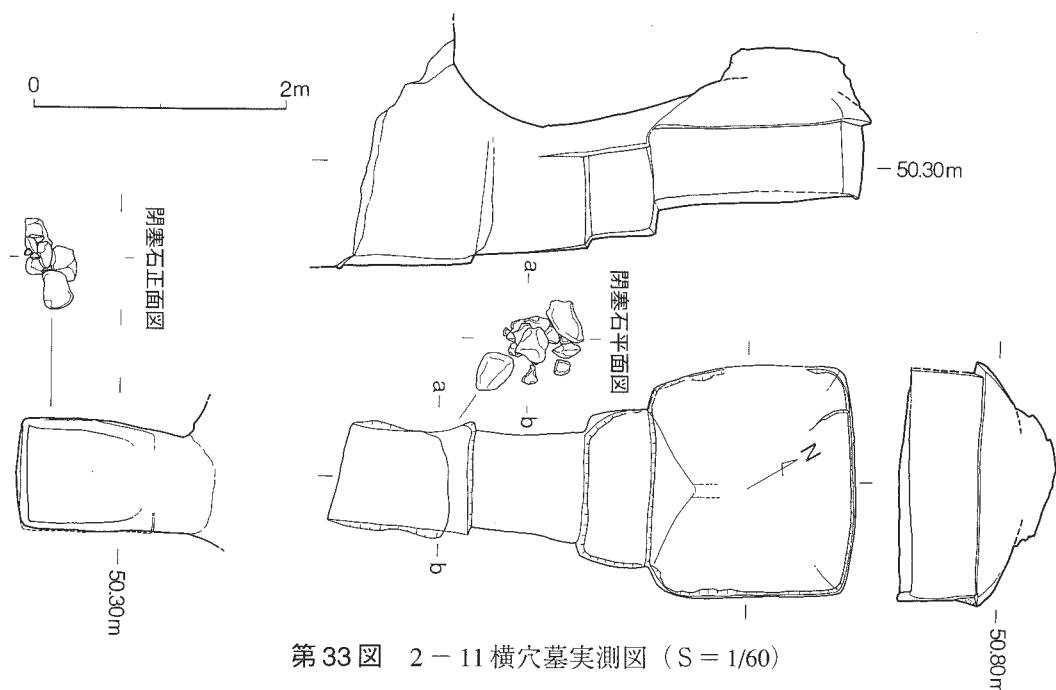
第30図 2-10b横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



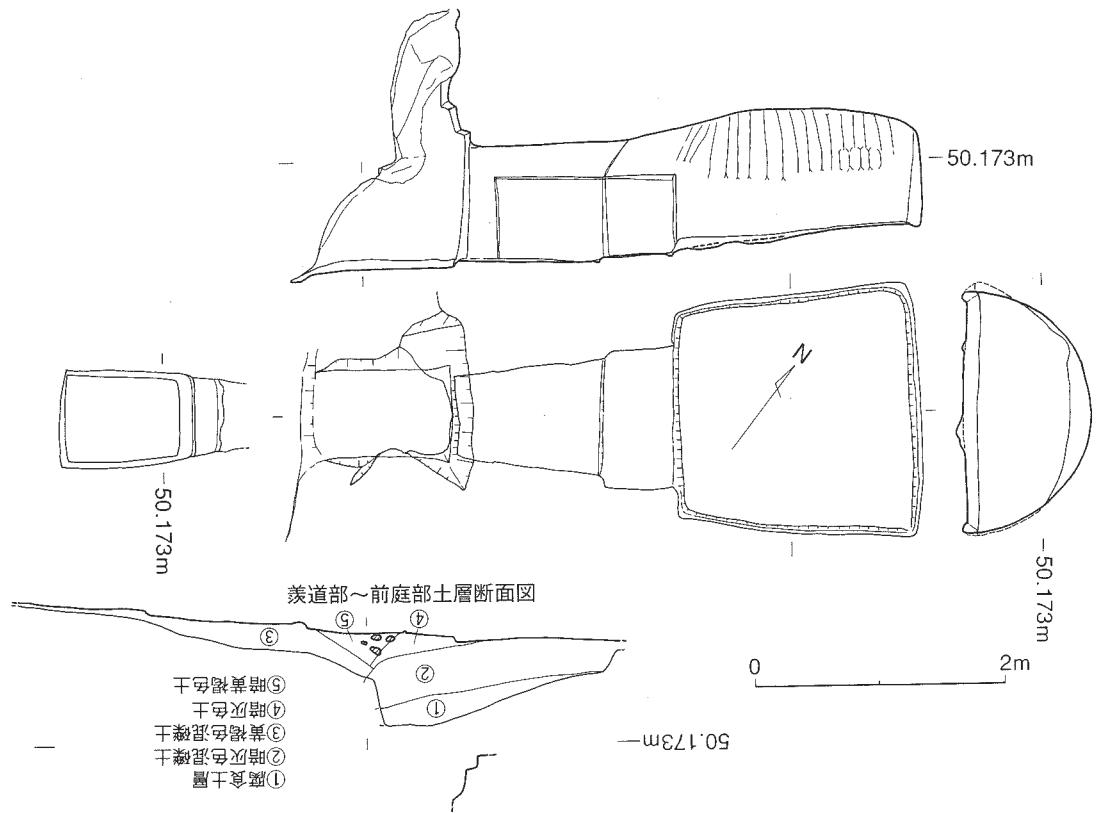
第31図 2-10c横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



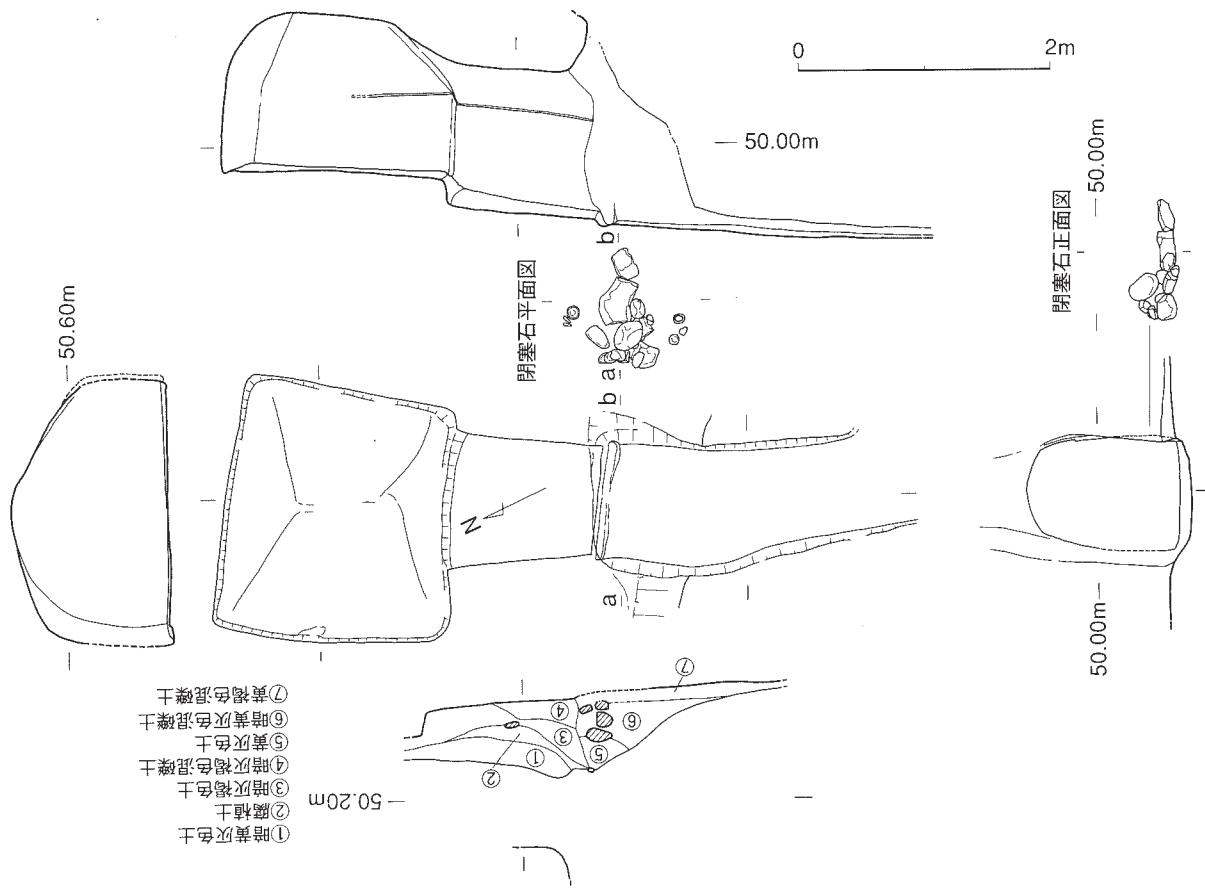
第32図 2-10a横穴墓実測図 (S = 1/60)



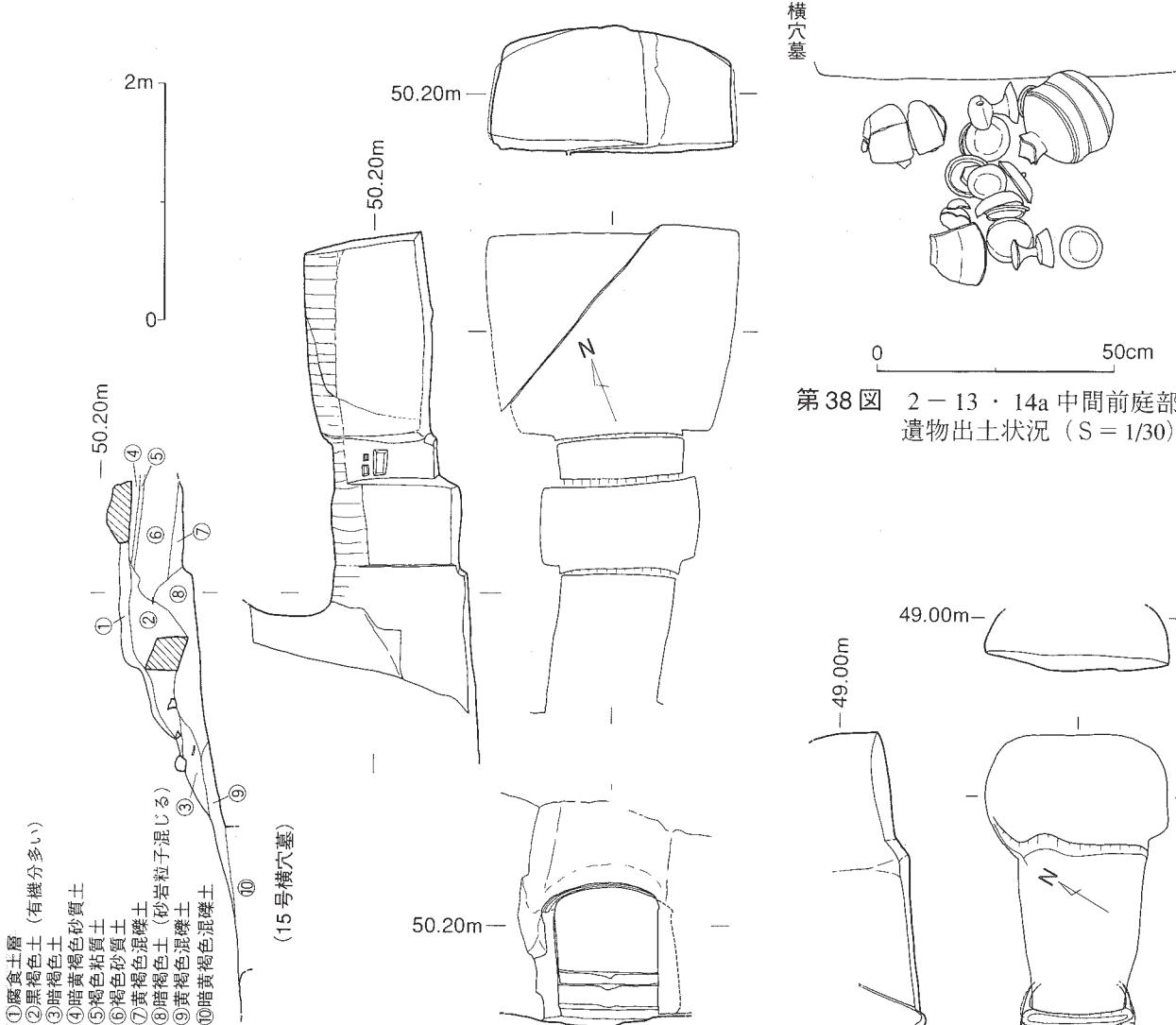
第33図 2-11横穴墓実測図 (S = 1/60)



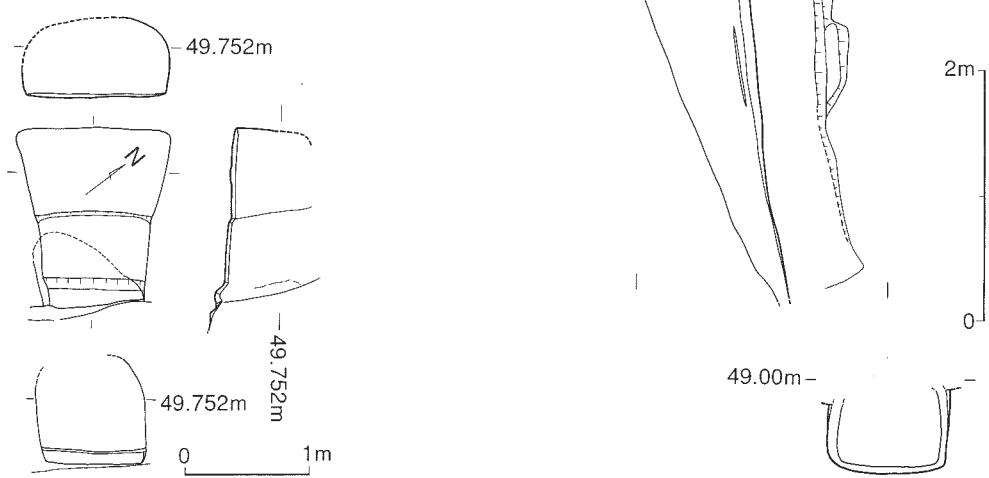
第34図 2-12横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



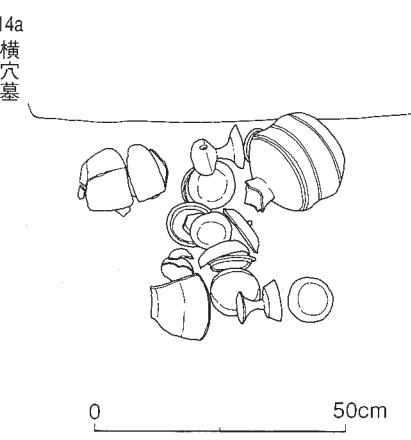
第35図 2-13横穴墓実測図 ($S = 1/60$)



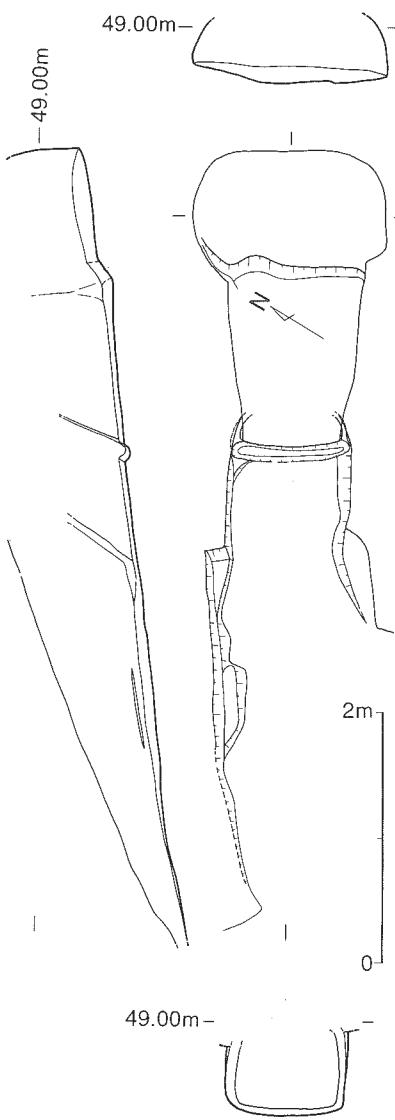
第36図 2-14a横穴墓実測図 (S = 1/60)



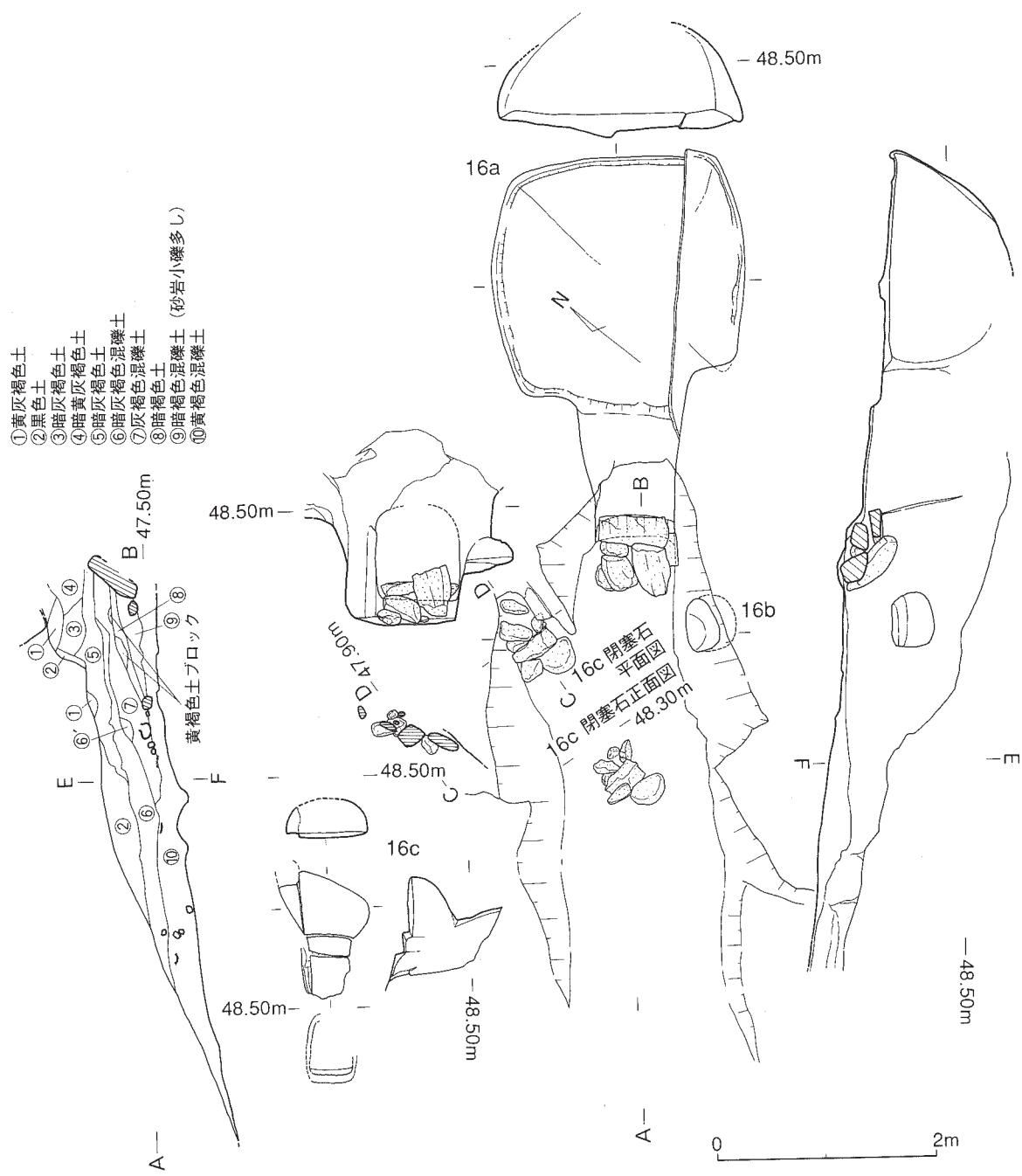
第37図 2-14b横穴墓実測図 (S = 1/60)



第38図 2-13・14a 中間前庭部
遺物出土状況 (S = 1/30)



第39図 2-15横穴墓実測図
(S = 1/60)



第40図 2-16 (a,b,c) 横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

南東側壁面に窪みがあり、この部分に砂岩の板石を立てている。おそらく、横穴掘削時に崩落して窪みができたため板石で充填したものだろう。墓室部分の前半は天井部が崩落しているが、奥側の残存部をみると、天井形態は寄棟形である。羨道の玄室側は前室状になり、玄室に若干食い込む形になっている。墓道から須恵器・鉄鏃が出土したが、墓室内部からの遺物の出土はない。

2-6b 横穴墓

内部から須恵器高杯と土師器杯が伏せた状態で出土した。閉塞石はなかった。

2-6c 横穴墓

天井の前半部分は崩落しており、閉塞石もなかった。遺物は出土していない。

2-7a 横穴墓

羨道・玄室間の段差はない。羨門部に浅い溝がある。玄室内には人骨が遺存していたほか、須恵器杯・耳環が出土した。ほかに、前庭～墓道から土器類が出土している。

2-7b 横穴墓

2-7a の脇にあり、内部は10cm内外の礫が充填されていた。遺物は出土していない。

2-8 横穴墓

筒型の特異な形状であるが、閉塞石の基部が遺っており、実際に使用されている。前庭～墓道から須恵器高杯・杯が出土している。

2-9 横穴墓

閉塞石には円礫が用いられている。前庭の両脇に1-1と同様の棚状部分があり、北側の棚状部分に置かれた状態で遺物が出土したほか、前庭中央からも遺物が出土している。また、前庭部からは鉄釘と思われる鉄器片が出土している。

2-10 横穴墓

壁面の羨道部分には軒線があるが、玄室部分にはない。玄室・羨道の天井部には筋状の装飾が施されている。羨道・前庭から須恵器が、玄室内から耳環が出土している。

2-11 横穴墓

羨道の玄室との接続部分が若干幅広く前室状になっている。天井は中央部が崩落しているが、残存部分からみて寄棟形であると思われる。玄室～前室状部分～羨道の一部に軒線が施されている。羨道・前庭から須恵器が出土している。

2-12 横穴墓

この横穴墓にも前室状部分がある。前室・羨道の壁面には軒線を削りだしているが、玄室部分にはない。玄室天井には筋状の装飾が施されている。羨門前面から丸玉が出土したほか、11号との間の前庭から須恵器が出土している。

2-13 横穴墓

玄室は不整方形で、羨道は奥壁に向かって右寄りに付いている。玄室前半～羨道に軒線がみられる。羨門部には溝状の窪みがある。羨道・前庭から須恵器・鉄器・耳環が出土した。

2-14a 横穴墓

複室構造で明確な玄門を造り出している。玄門の北側面に小孔が穿たれているが、横穴墓に伴うかどうかは明確でない。天井と壁面は明確に区画されており、天井部分には筋状の装飾が施されている。玄室の北側は断層による10cm程のずれがみられる。13号との間の前庭から須恵器が一括出土したほか、羨道から台付の杯が出土した。

2-14b 横穴墓

14a 前庭壁面に構築された小形の横穴墓で、閉塞石はみられなかった。遺物は出土していない。

2-15 横穴墓

2-16a とほぼ並行して構築されているが、墓道・前庭は共有していない。2-14の墓道により天井部分を削平されている。

第1表 経塚横穴墓群横穴墓一覧表

番号	玄室平面形	玄室形態	袖	玄室壁溝	漢道壁溝	玄室敷石	軒の表現	前室	屍床	内部装飾	菱飾文様	筋状装飾	凹形段	玄・羨間段	玄・羨段高	玄・羨間溝	十字形溝	
1-1	横長方形	切妻	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.08	有	無	
1-2a	台形	ドーム	両袖	有	有	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.1	無	無	
1-2b	楕円形	不明	両袖	有		無	不明	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.2	無	有	
1-3	台形	不明	両袖	有	有	無	有	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.22	有	無	
1-4	隅丸方形	不明	両袖	有	無	無	無	無	奥壁沿に1	無	無	無	無	玄室が高い	0.08	有	無	
1-5	台形	ドーム	両袖	有	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.18	無	無	
1-6a	不整方形	寄棟	左袖	有	無	無	無	無	奥壁沿に1	無	無	無	無	玄室が高い	0.08	無	無	
1-6b	楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.03	有	無	
1-7a	横台形	ドーム	右袖	有	有	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.08	有	無	
1-7b	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1-7c	楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.07	無	無	
2-1	胴張横長方形	アーチ	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.26	無	無
2-2	方形	ドーム	両袖	有	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.14	無	無
2-3	楕円形	アーチ	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	有	無	玄室が高い	0.12	有	無	
2-4	台形	ドーム	両袖	有	無	無	有	有	無	無	無	有	無	玄室が高い	0.5	無	無	
2-5	方形	ドーム	両袖	有	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.14	無	無	
2-6a	方形	寄棟	両袖	有	無	無	有	前室状部分有り	無	無	無	無	有	玄室が高い	0.22	無	無	
2-6b	楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.03	無	無	
2-6c	楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.04	無	無	
2-7a	楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	
2-7b	半円形	ドーム	袖無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	有	無	
2-8	筒形	筒形	袖無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	
2-9	台形	寄棟	両袖	有	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.04	無	無
2-10a	台形	ドーム	両袖	有	無	無	無	無	無	無	無	有	無	玄室が高い	0.14	有	無	
2-10b	楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	
2-10c	縦長楕円形	筒形	左袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	
2-11	縦台形	アーチ	両袖	有	無	無	無	前室状部分有り	無	無	無	有	無	玄室が高い	0.1	無	無	
2-12	方形	寄棟	両袖	有	無	無	有	前室状部分有り	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.2	無	無	
2-13	不整方形	寄棟	両袖	有	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.2	無	無	
2-14a	台形	アーチ	両袖	無	無	無	有	有	無	無	無	有	無	玄室が高い	0.24	無	無	
2-14b	台形	アーチ	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.03	無	無	
2-15	楕円形	不明	両袖	玄門近く に一部 有り	無	無	不明	無	無	無	無	無	残存部 には 無し	玄室が高い	0.12	無	無	
2-16a	胴張方形	方形	両袖		有	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.09	無	無	
2-16b	楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.06	無	無	
2-16c	不整楕円形	ドーム	両袖	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	玄室が高い	0.07	無	無	

羨門形状	羨門節縁	閉塞型式	庇石	羨道石組	羨門溝	羨・前庭段	羨・前庭段高	全長	玄室長	奥壁幅	最大幅	前壁幅	玄室高	玄門幅	羨門幅	羨道長	羨道高	盜掘	備考	
匚字	無	板石	無	無	無	羨道高い	0.04	2.1	1.5	1.76	1.8	1.7	0.9	0.9	0.7	0.6	1.04	無		
半円形	無	不明	有	無	無	羨道高い	0.05	2.48	1.68	1.99		1.42	0.8	1.42	0.99	0.8	0.9	有		
不明	不明	不明	無	無	無	—			1.22	1.88		1.22		0.78				不明		
不明	不明	不明	無	無	無	羨道高い	0.13	3.14	1.7	2.2		1.85		1.41	0.93	1.44		有		
	有	板石	不明	無	無	羨道高い	0.08	3.35	2.2	2.02		1.73		1.25	0.88	1.15		有	天井部崩落	
台形	無	無	無	無	無	無		2	1.23	1.86		0.86	0.92	0.86	0.9	0.77	0.89	有		
匚字	有	無	無	無	無	羨道高い	0.04	3.47	2.04	2.02	2.2	1.68	1.17	1.08	0.82	1.43	1.11	有		
匚字	無	無	無	無	無	羨道高い	0.09	1.42	0.78		1.7		0.76	0.99	0.66	0.64	0.7	無		
不明	不明	無	有	無	有	羨道高い	0.11	3.09	1.74	2.5		2.08		1.45	0.92	1.35		不明	天井部崩落	
—	不明	—	—	—	—			0.32			0.62		0.28					—		
馬蹄形	有	板石	無	無	有	羨道高い	0.04	1.6	1.3	1.98	2	1.65	0.65	0.9	0.95	0.3	0.75	無		
不明	不明	塊石積	元は有った	有	無	羨道高い	0.06	2.05	0.95	1.34	1.6	1.39	0.85	0.96	0.96	1.1		有		
匚字	有	無	無	有	無	羨道高い	0.04	3.55	1.87	1.88	2.05	1.85	0.97	1.18	0.85	1.68	0.95	有		
胴張継長方形	有	基部は塊石	無	無	無	羨道高い	0.04	2.33	1.27	1.49	1.85		0.87	1	0.7	1.06	0.87	有		
匚字	有	基部は塊石	有	無	無	羨道高い	0.08	3.01	1.41	1.92		1.56	1.09	1.37	0.81	1.6	0.97	有		
台形	有	基部は塊石	無	無	有	羨道高い	0.07	2.57	1.89	1.9		1.98	0.82	0.99	0.76	0.68	0.96	有		
台形	有	基部は塊石	無	無	無	羨道高い	0.1	2.8	1.72	1.92	2.08	1.72	1.24	1.12	0.76	1.08		有		
台形	無	無	無	無	無	無		0.58	0.44		0.76		0.39	0.42	0.44	0.14	0.42	無		
不明	無	無	無	無	無	無		0.57	0.46		0.96		0.86	0.62	0.11		無			
隅丸台形	無	基部は塊石	無	無	有	羨道高い	0.07	1.88	1		2.05		0.63	1.2	0.6	0.88	0.62	有		
半円形	無	塊石積	有	無	無	無														
隅丸長方形	有	基部は塊石	無	無	有	無		0.57	0.46				0.7	0.86	0.62			有		
台形	有	塊石積	有	無	有	無		1.88	1	1.9		1.73	0.63	1.2	0.6	0.88	0.62	有		
匚字	有	無	有	無	無	羨道高い	0.06	2.7	1.49	1.65		1.48	0.96	0.95	0.76	1.21	0.94	有		
台形	無	塊石積	無	無	無				0.92	0.42		0.6		0.33	0.39	0.41	0.5	0.33	無	
馬蹄形	無	無	無	無	無				1.57	0.89				0.4	0.43	0.32	0.68	0.42		
台形	有	基部は塊石	無	無	無	羨道高い	0.05	3.74	2	2.03		1.65	1.02	1.14	0.67	1.74	0.91	有	玄/羨段高 は推定	
匚字	有	基部は塊石	無	無	無	羨道高い	0.07	3.1	1.64	1.85		1.6	1	1.25	0.77	1.46	0.98	有		
匚字	無	基部は塊石	無	無	有	羨道高い	0.04	3.02	1.8	2		1.85	1.25	1.15	0.9	1.22	1.14	有		
匚字	無	無	無	無	有	羨道高い	0.04	3.99	1.74	2.12		1.65	1.06	1.13	0.94	2.25	1.15	有		
匚字	無	無	無	無	無				1.4	0.7	1.2		0.9		0.9	0.8	0.7	有		
不明	無	無	無	無	有	無			2.4	1.03					1.1	0.76	1.37		無	
不明	無	板石+塊石	有	無	無	羨道高い	0.15	3.44	2.1	1.92	2.35	1.9	1.14	1.14	0.75	1.34		有		
馬蹄形	無	無	無	無				0.3						0.26		0.37	0.3		無	
匚字	無	塊石積	無	無				0.78	0.6					0.36	0.41	0.36	0.18		無	

2-16a 横穴墓

2-10～15よりやや低い位置に構築されている。天井の大部分は崩落しているが、残存部分に屋根線があり、寄棟形と思われる。玄室に断層によるずれがある。内部からの遺物の出土はないが、墓道から須恵器・鉄鏃・耳環が出土した。

2-16b 横穴墓

墓道南側壁面に構築された小横穴である。閉塞石はなく、遺物も出土していない。

2-16c 横穴墓

墓道北側壁面に構築された小横穴で、15～20cm程の角礫で閉塞されていた。墓室の西壁面近くに断層がある。玄室から須恵器杯が出土した。

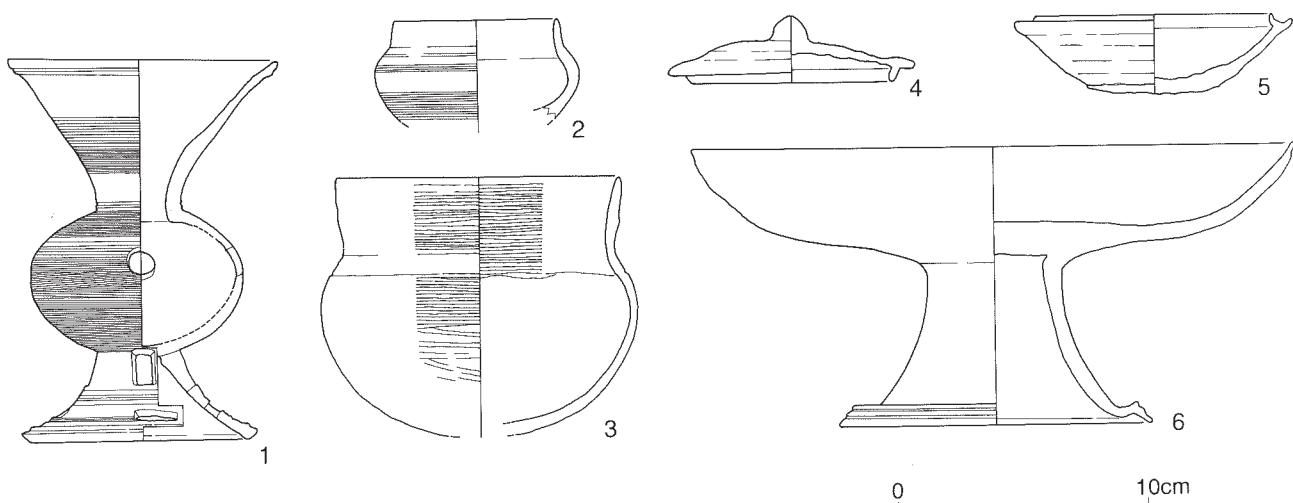
第3節 遺 物

1. 土器

出土遺物のほとんどは土器類で、図化した214点のうち196点は須恵器である。器種別の内訳は、杯（蓋・身）98点、高杯26点、平瓶21点、壺（小壺含む）21点、醜11点、提瓶6点、甕・大甕7点、高杯蓋4点、横醜1点、壺（？）蓋1点である。土師器は、図示したのが18点で、内訳は杯（椀）9点、高杯4点、塙3点、甕1点である。個々の土器については、第2表を参照していただきたい。以下、調査時及び遺物整理中に気がついた点を述べてみたい。

須恵器の大部分は墓道または前庭部からの出土である。ほとんどの横穴墓が盗掘を受けており、墓室内の遺物は持ち去られたものも多いとは考えられるが、墓前での須恵器の使用量が多かったことも確かだろう。また、1-7cでは副葬土器はすべて土師器で、1-6bでも平瓶1点以外はすべて土師器であり、1-1からの出土土器がすべて須恵器であるとの対照的である。

出土土器類の中で、2-9 横穴墓前庭棚状部出土品（第49図3～17、第50図）及び2-13・



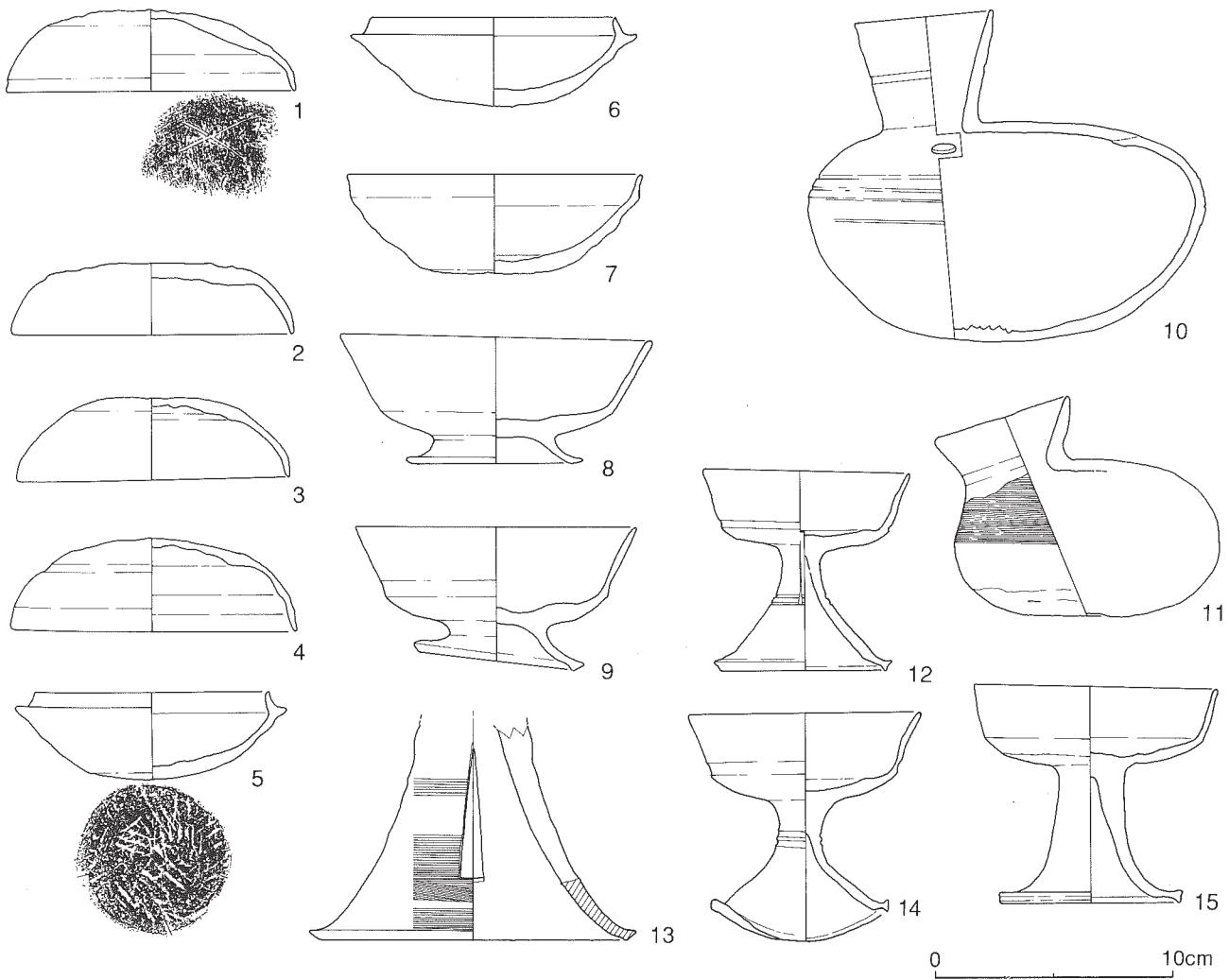
第41図 第1支群検出中出土土器 (S = 1/3)

14 横穴墓中間前庭出土品（第52図7～24）は、墓前祭祀後の一括廃棄遺物であり、同時期性が高い。2～9 墓道中央部出土品も棚状部分から転落したものと思われ、同時期の遺物である可能性が高い。1～7 墓道及び2～16 墓道からは多数の遺物が出土しているが、ほとんどは埋土中からの出土であり、時期幅がある。

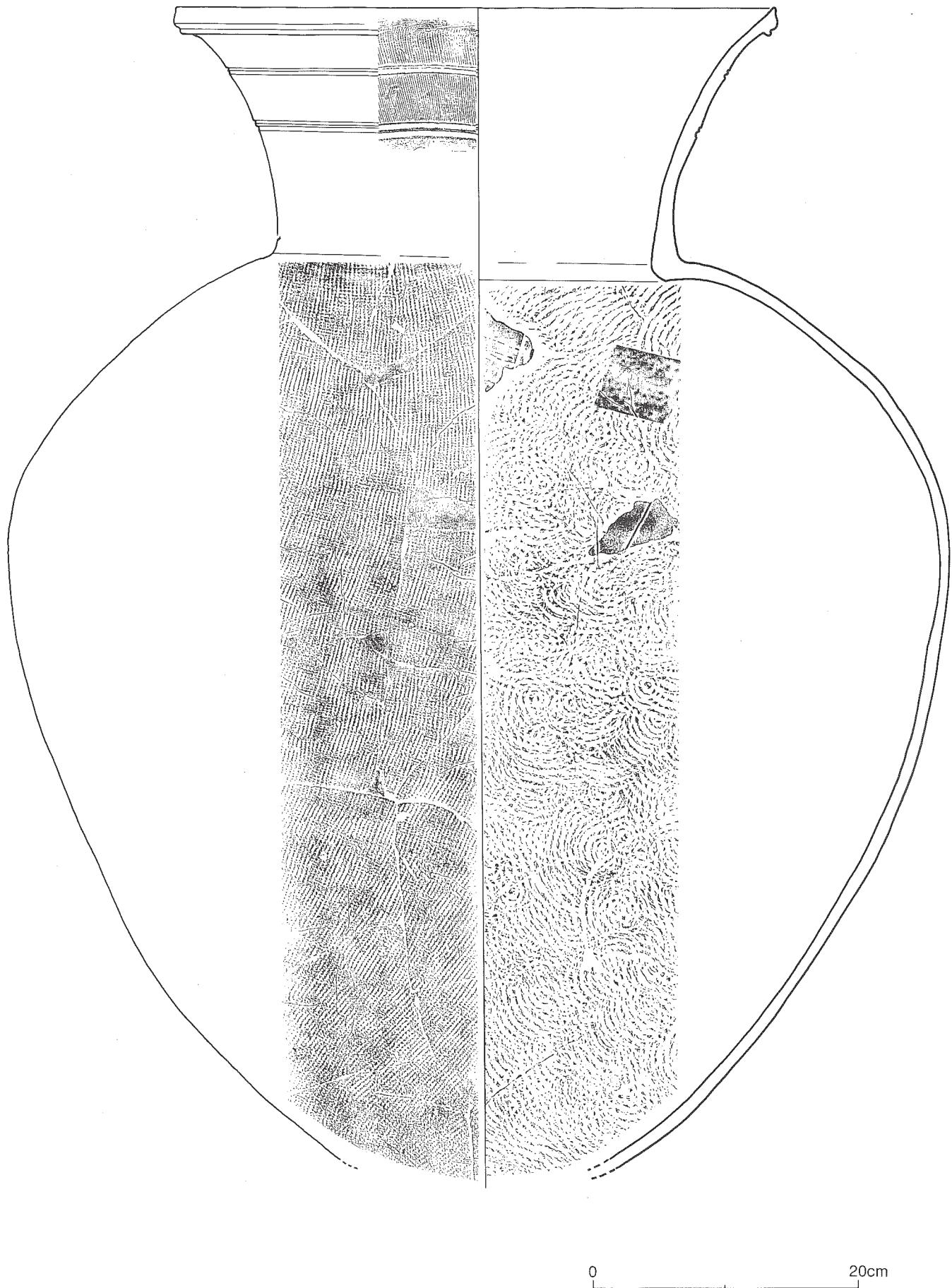
杯身外底面・杯蓋天井部外面の調整には、回転ヘラケズリ、静止ヘラケズリ、回転ヘラ切り後粗いナデ、回転ヘラ切り未調整の4種類がみられる。2～8 墓道出土杯身（第49図2）2～16 墓道出土杯身（53図12）は、口径、立上り部の幅からみて今回出土した杯身の中では最も古式に位置づけられるが、両者とも外底面は回転ヘラケズリ調整である。小形の口径11cm前後のものは、回転ヘラ切り未調整か、あるいはヘラ切り後軽くナデる程度のものがほとんどであり、調整作業の簡略化がうかがえる。また、42図5の外底面には平行タタキと思われる圧痕がある。

ヘラ記号は、杯の場合すべて内面に施されている。また、1～4 横穴墓からはヘラ記号のある杯が集中して出土している。

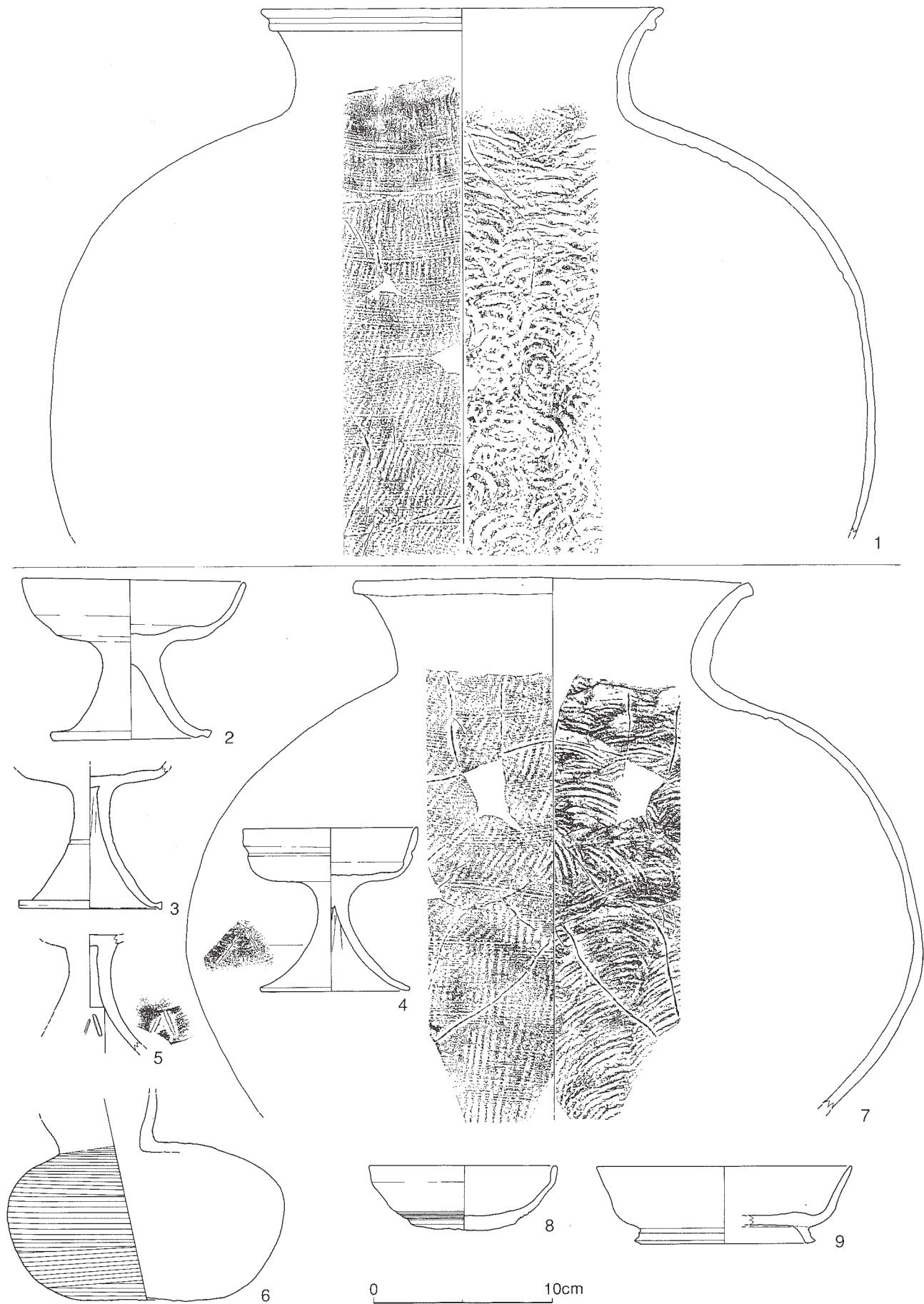
2～13・14 中間前庭出土のつまみのない扁平な蓋（第52図11～13）は同図16～19の身と



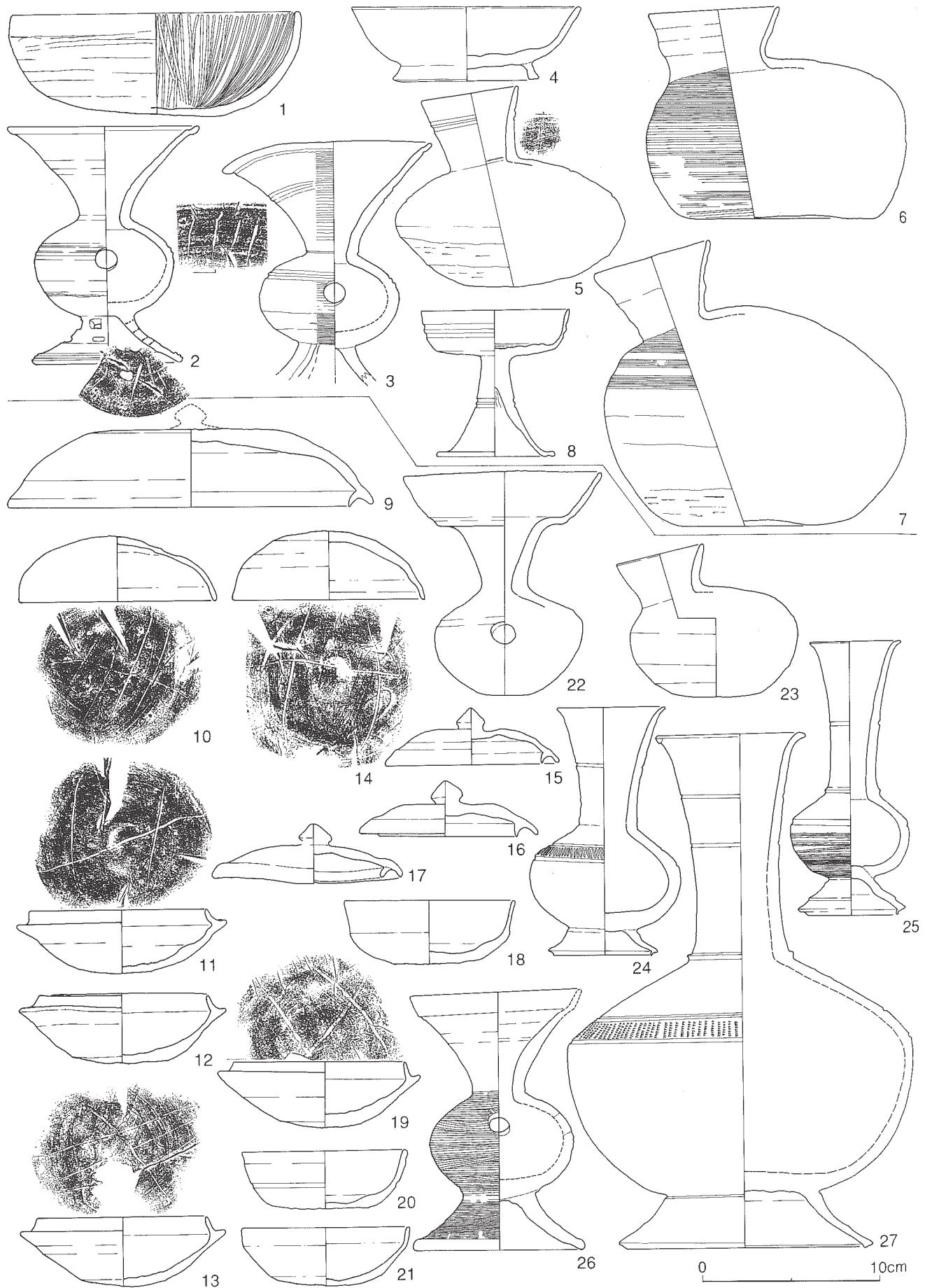
第42図 第1支群検出中及び1～1横穴墓出土土器① (S = 1/3)



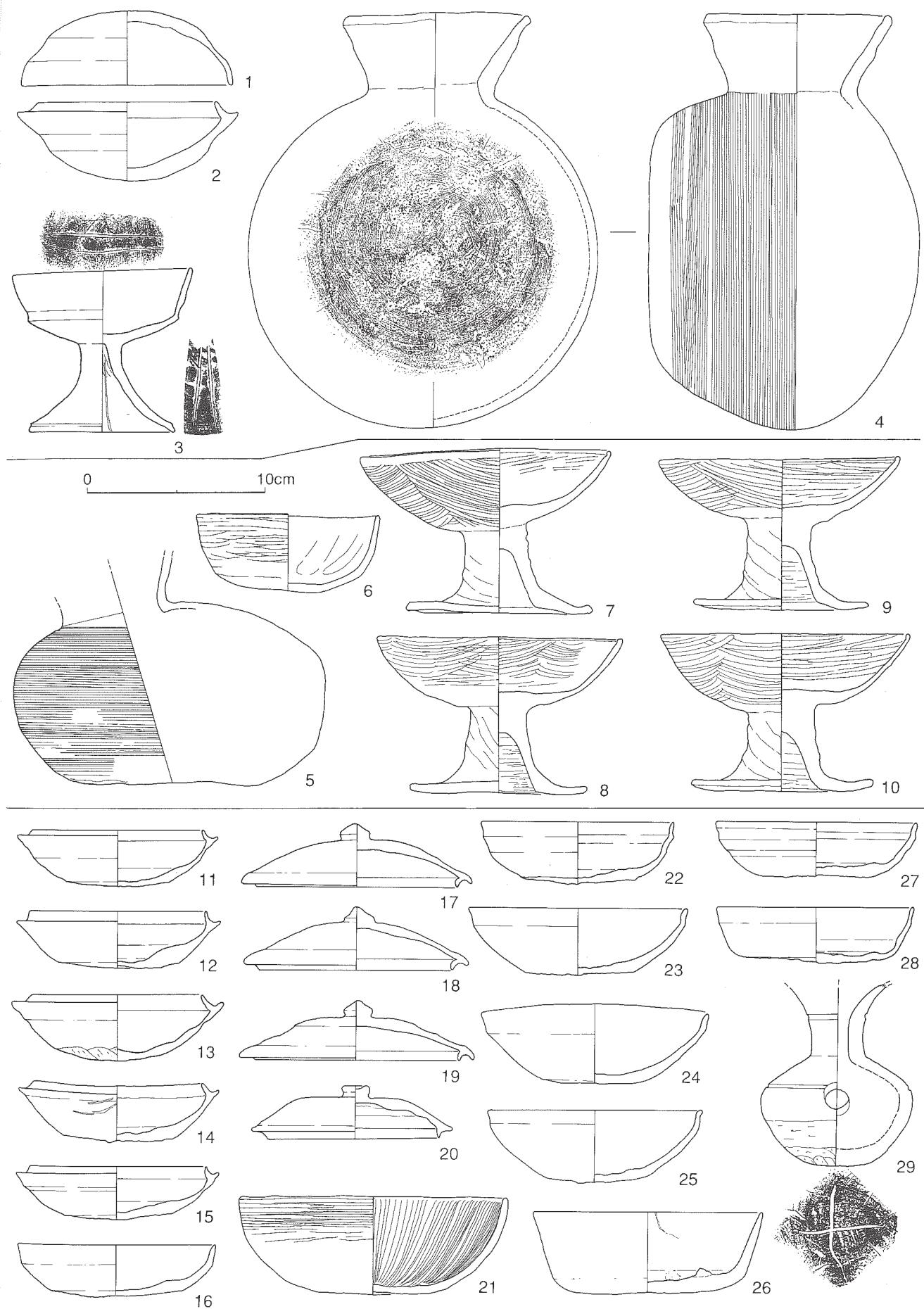
第43図 1-1横穴墓出土土器② (S = 1/4)



第44図 1-1横穴墓及び1-2横穴墓出土土器 ($S = 1/3$)



第45図 1-3・4 横穴墓出土土器 ($S = 1/3$)



第46図 1-6a・6b・7 墓道出土土器 (S = 1/3)

セットになるものと思われる。直方市水町横穴墓群B-6号横穴墓（註1）などで類例がみられるが、田川地方出土須恵器の中では、類似したものが糸田町松ヶ迫2号墳（註2）から出土している程度で、あまりみられない器形である。出土状況から見て、7~9のつまみの付いた蓋と同時期であり、搬入品的な性格の遺物と考えられる。

その他特記すべきものとしては、検出作業中の出土でどの横穴墓に伴うものか特定できないが、2-10~15の前庭から「夫」字を刻んだ須恵器提瓶破片が出土している（第54図）。また、特異な器形のものとして、第49図11~14の脚に段のある有蓋高杯や第52図23の胴部のくびれた壺、第53図8の扁球形の胴部に強く外反する口縁の付く広口壺などに注目する必要があろう。

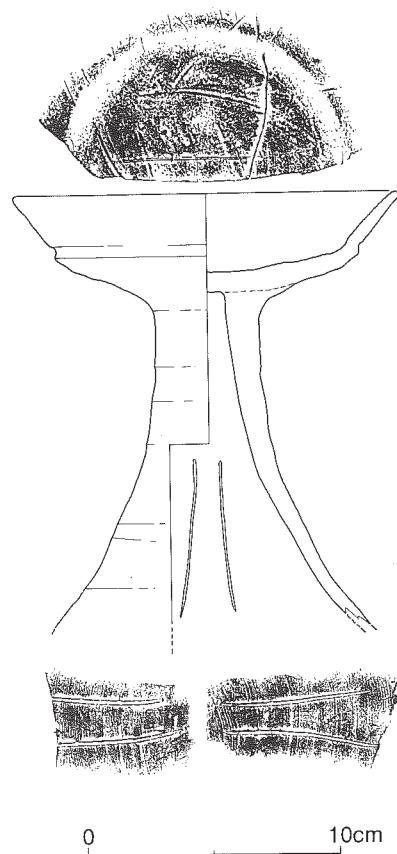
2. 鉄・銅製品

第59図は1-6a出土鉄刀で、全長655mm、刃部最大幅31mmを計る。柄の鐔に接する部分に、銅線による装飾金具と思われるものがみられる。第58図は鉄刀の金具類である。5は鉄刀の鞘部分に付いた状態で出土したが、その他は鉄刀とはかなり離れた位置から出土した。1は柄頭と思われる。2は1の内部に残存していた木質部分で、木製の目釘が遺っていた。3・5は佩用金具で、鉄芯金胴張である。3には銀箔の装飾紐と思われるものが付けられている。4は、大きさからみて柄部の金具で、銅製である。

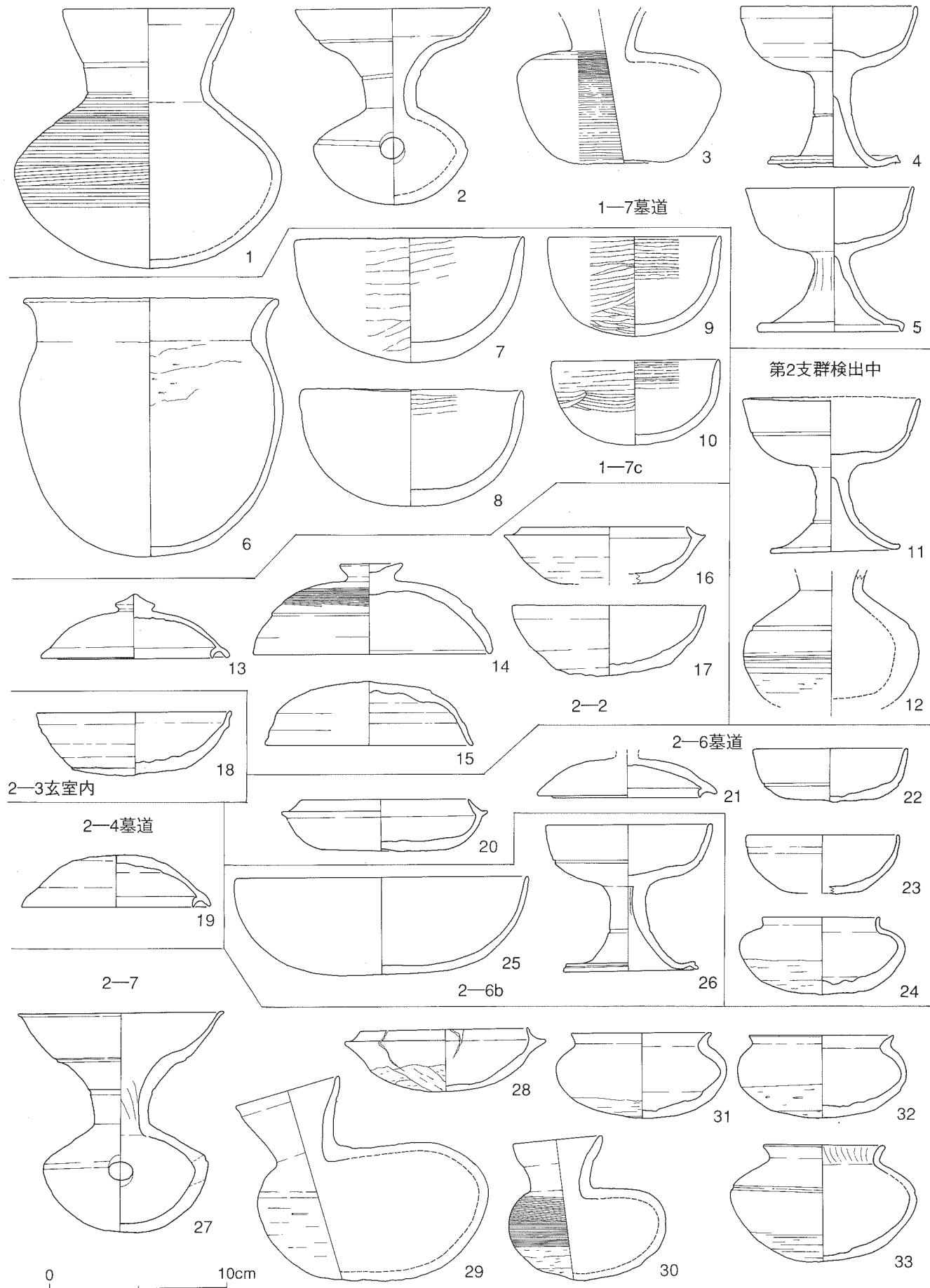
第57図1は2-6埋土中出土で、茎部に1対の突起があり、小形の鑿の茎部と思われる。2~5は鉄鎌と思われる。3・4は2-13羨道部出土で、鑿形鎌と思われる。2は1-4玄室内出土で、図の上端部を刃としているようである。5は2-16墓道出土で、鎌と思われるが、茎部が平坦なので他の器種の可能性もある。6は2-9前庭部出土で、釘と思われる。7は2-4出土で、刀子である。

3. 装飾品類

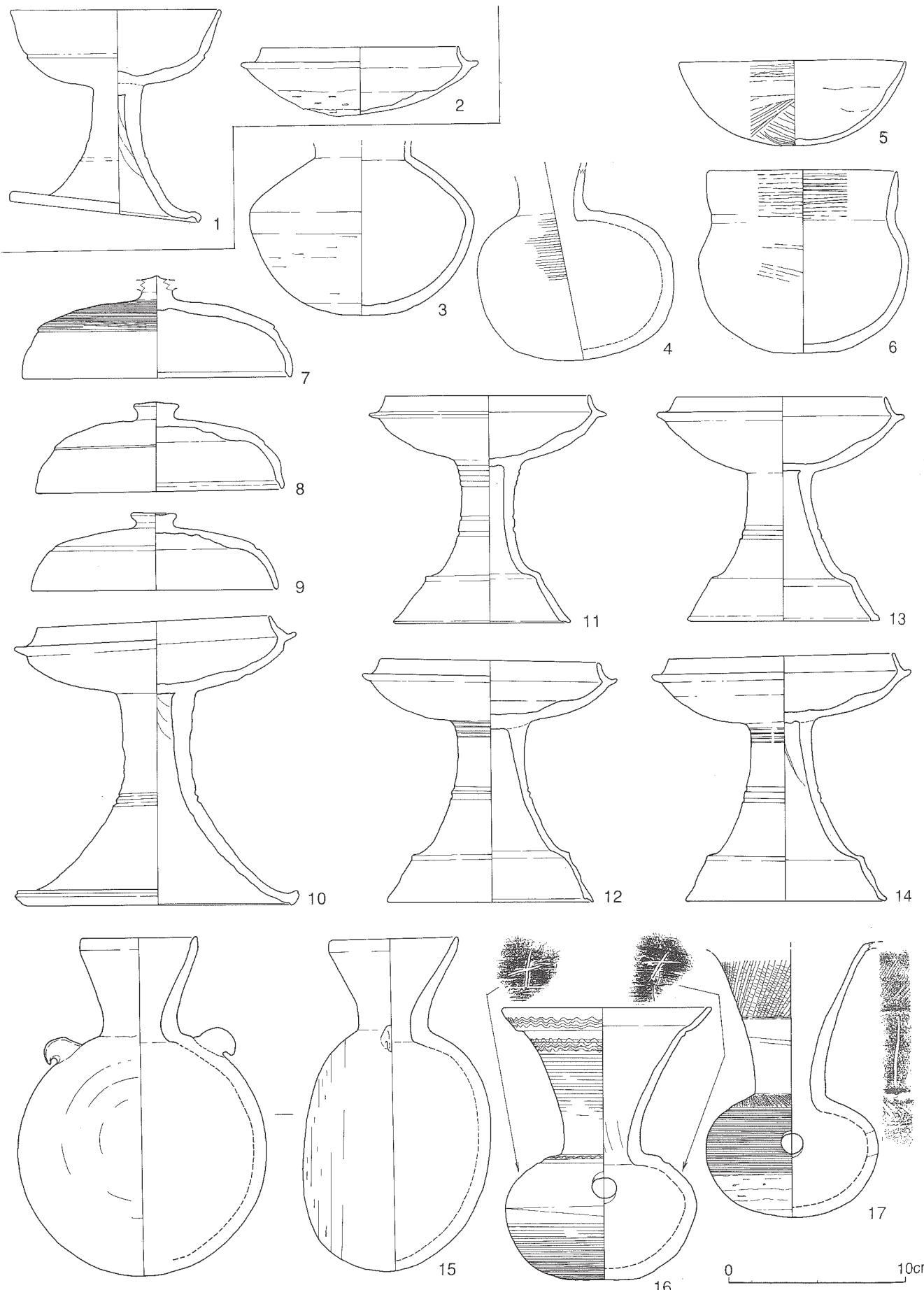
装飾品類では、耳環が最も多く、19点が出土した。大型品と小形品ではかなり大きさに差がある。その他、切子玉2点、管玉4点、勾玉2点、ガラス丸玉4点、石製(小)丸玉2点が出土した。耳環のいくつかと33の丸玉は玄室外から出土した。計測値等については、第3・4表を参照していただきたい。



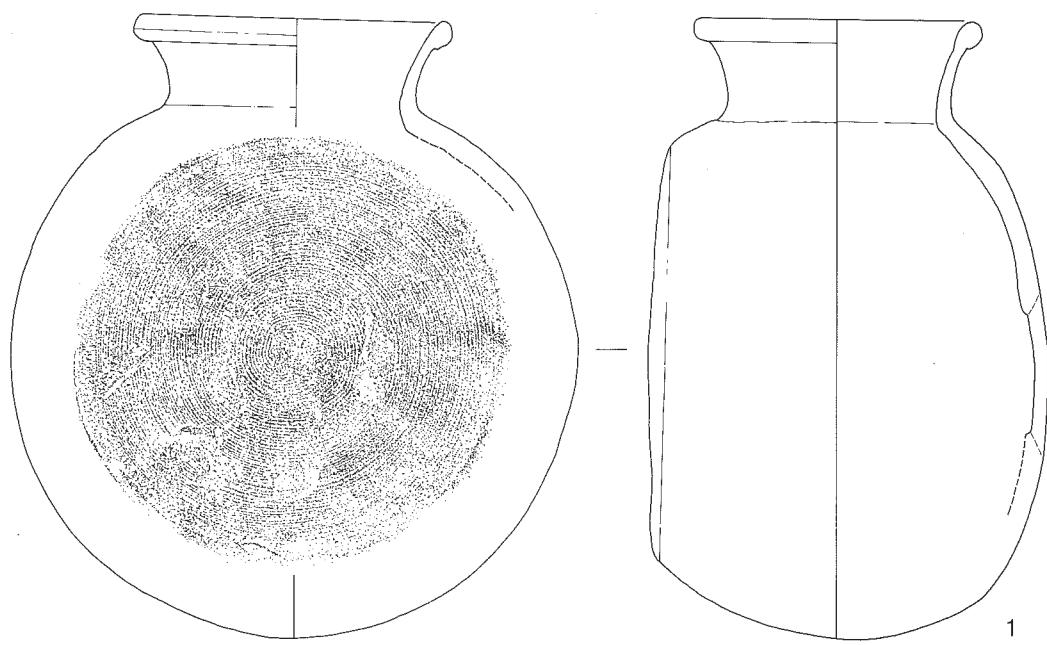
第47図 1-7横穴墓墓道
出土土器 (S = 1/3)



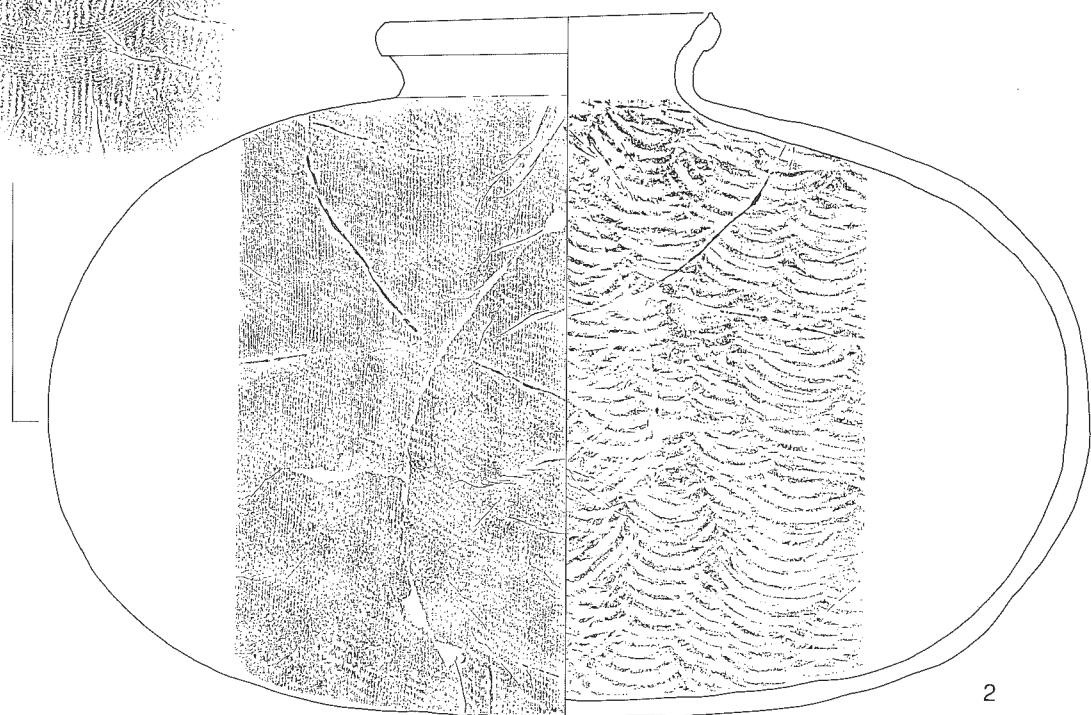
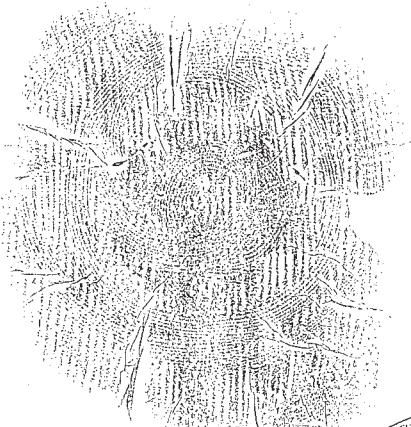
第48図 1—7～2—7 横穴墓出土土器 (S = 1/3)



第49図 2-8・9横穴墓出土土器 ($S = 1/3$)



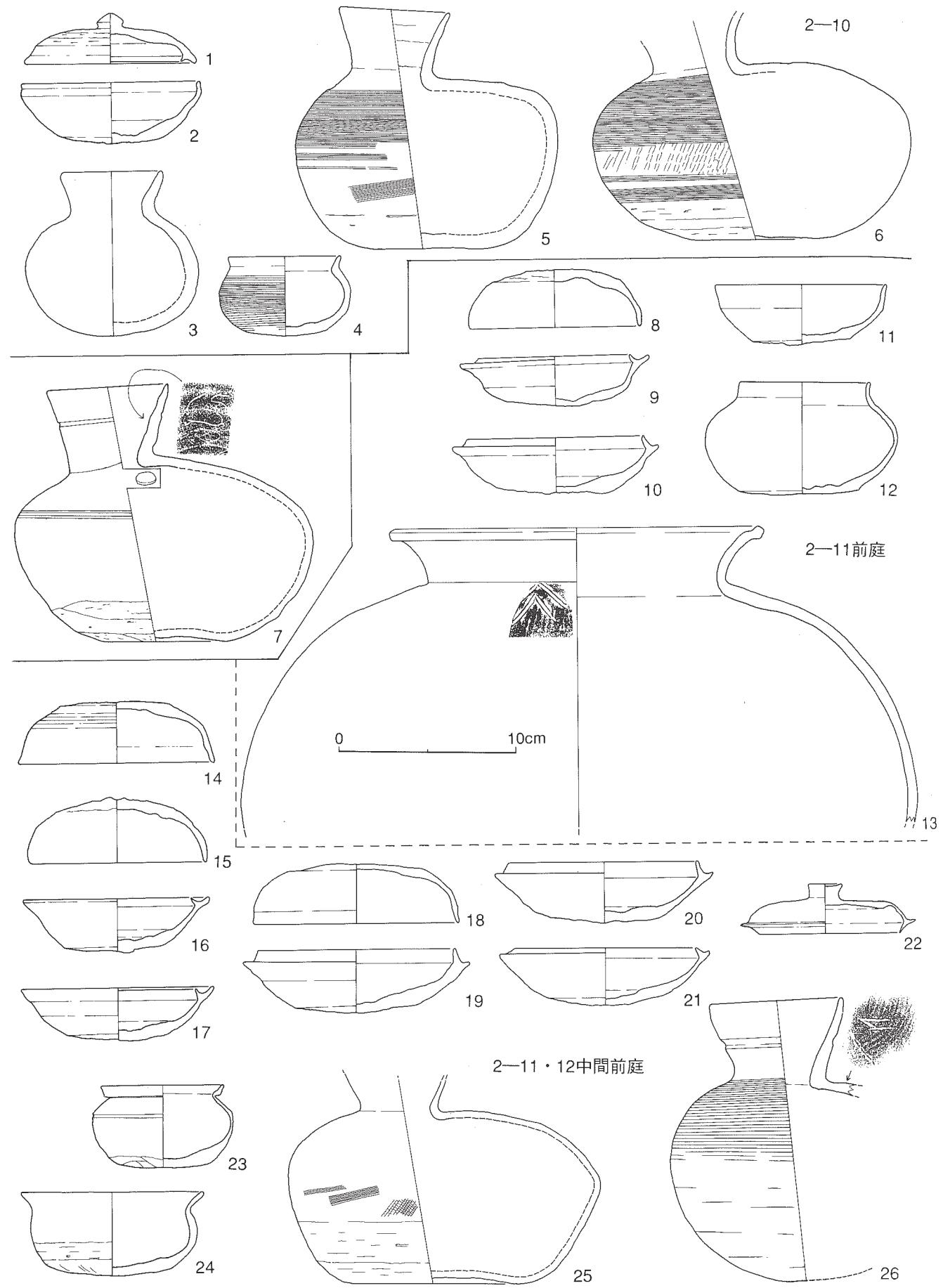
1



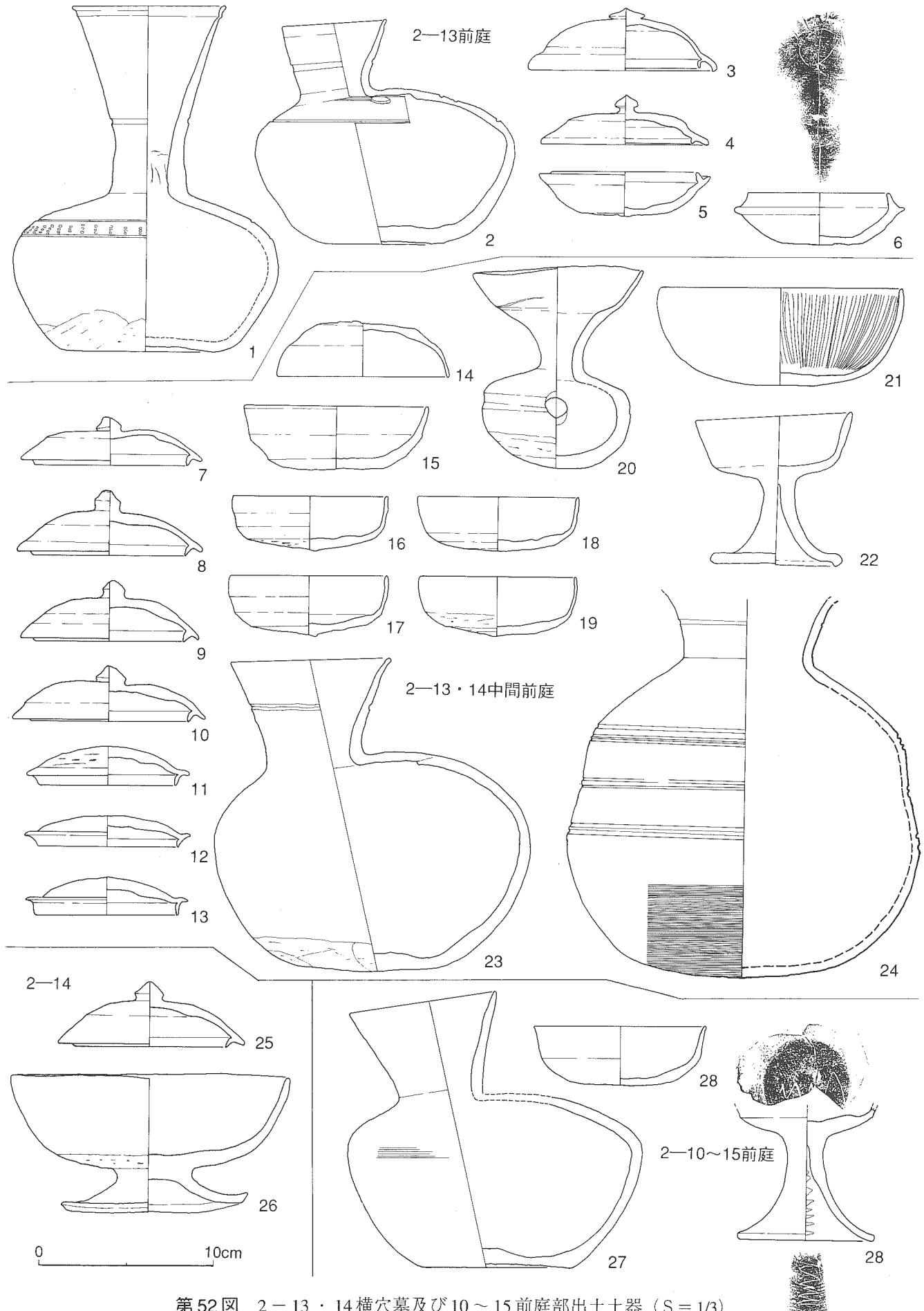
2

0 10cm

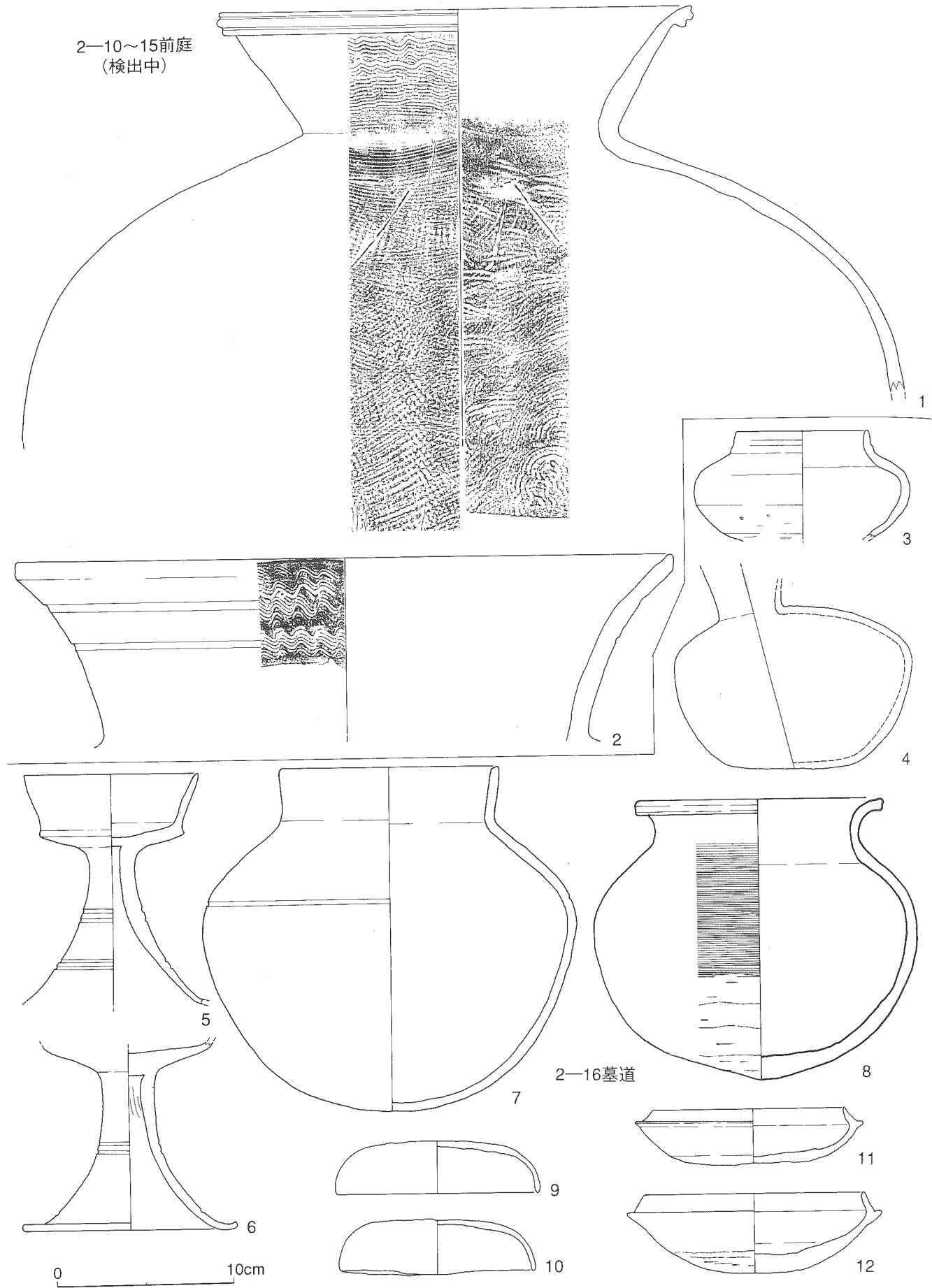
第50図 2-9 横穴墓出土土器② (S = 1/3)



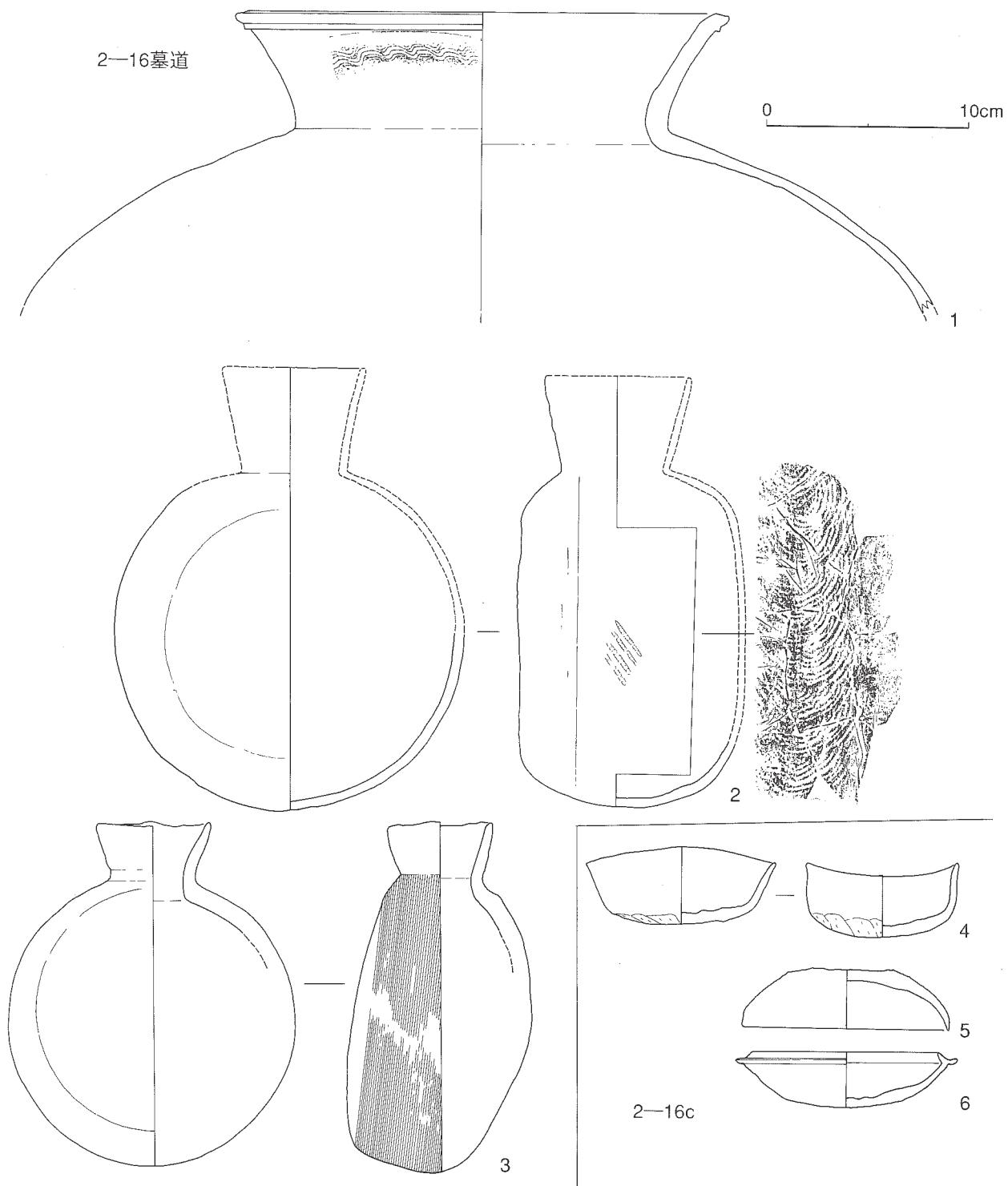
第51図 2-10・11横穴墓及び2-11・12前庭部出土土器 ($S = 1/3$)



第52図 2-13・14横穴墓及び10~15前庭部出土土器 (S=1/3)



第53図 2-10~15横穴墓前庭及び16横穴墓出土土器 ($S = 1/3$)

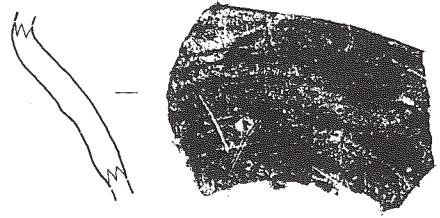


第54図 2-16 横穴墓出土土器 (1/3)

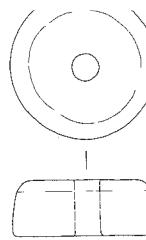
第4節 小 結

1. 横穴墓群の小群構造について

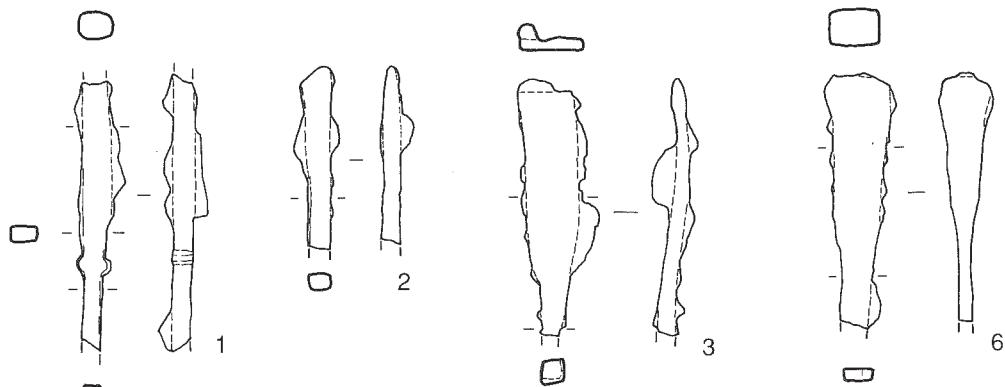
第1支群と第2支群の間は8mほどの空閑地で明確に区画されており、さらに、墓道・前庭部の共有関係、地山を掘り残して形作られた障壁の存在及び墓室のレベルの違いから見て、第1



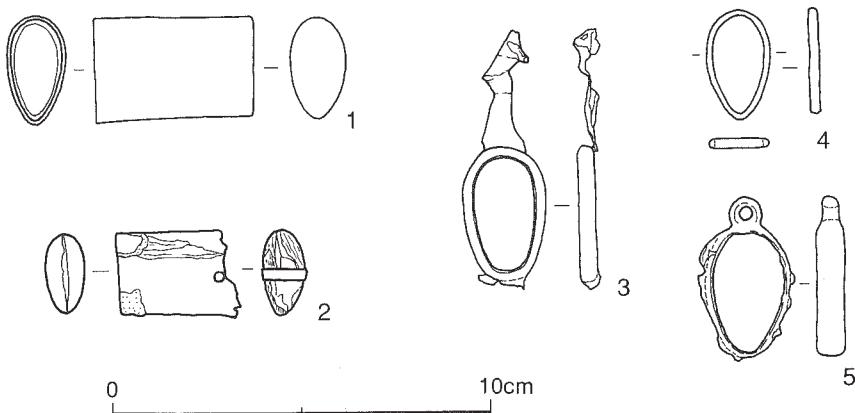
第55図 2-10~15 横穴墓前庭部出土須恵器
堤瓶破片（「夫」字ヘラ書有り S = 1/2）



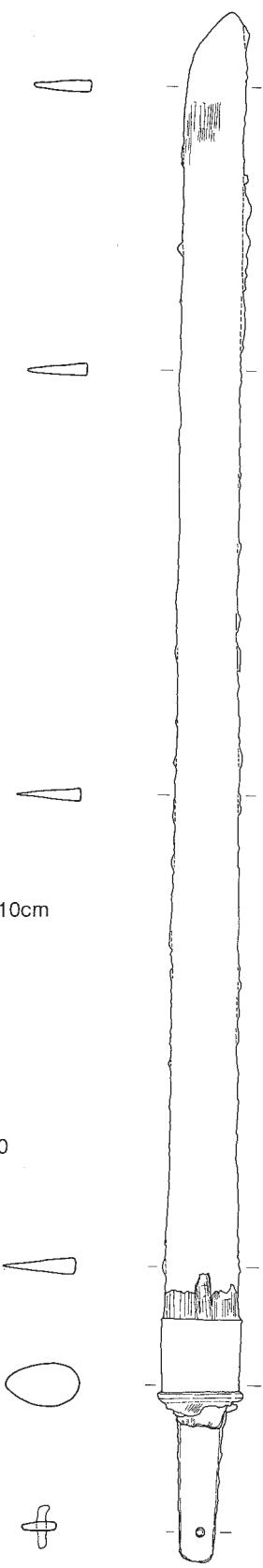
第56図 1-1 横穴墓墓道底面出土
石製紡錘車実測図 (S = 1/2)



第57図 経塚横穴墓群出土鉄器 (S = 1/2)



第58図 1-6a 出土鉄刀刀装具 (S = 1/2)



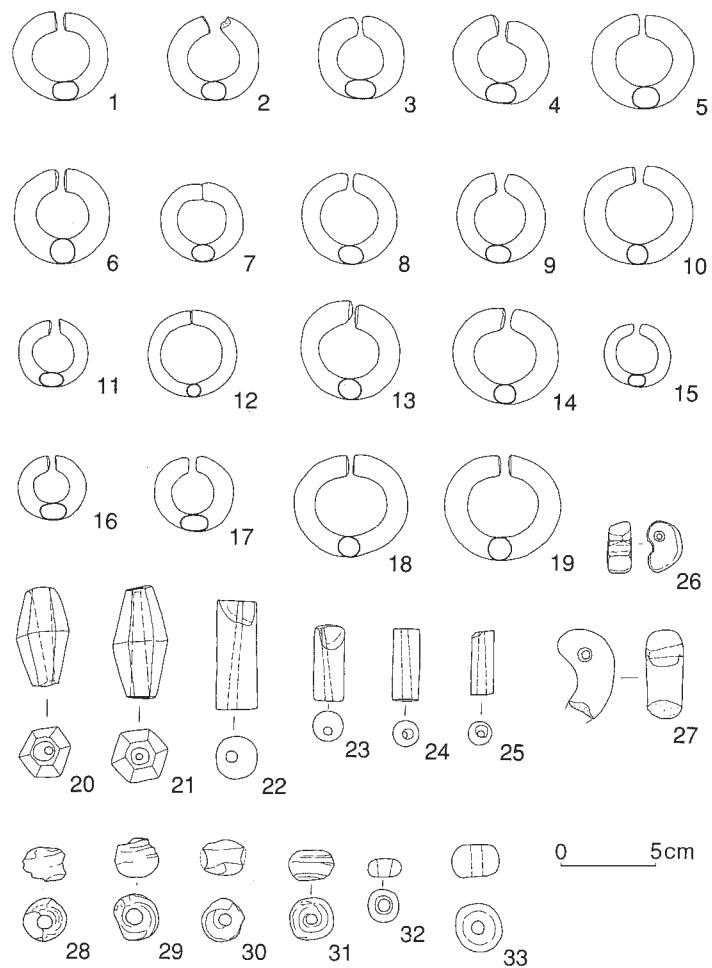
第59図 第1支群7a横穴墓出土鉄刀
(S=1/3)

支群は1-1 (A群) 1-2a~5 (B群) 1-6a~7c (C群) の3小群、第2支群は2-1~2 (A群) 2-3~6 (B群) 2-7a~9 (C群) 2-10a号~14号 (D群) 2-15・16 (E群) の6小群に区分できる。2-A群とB群との間には大きな障壁はないが、レベルの差によって区画されているので別の小群と考えた。2-8と2-9の間は障壁で明確に区画されているが、ほぼ同じレベルに近接して並んでいるので同一小群と考えた。

2-15は14aの墓道掘削の際に玄室・羨道の天井を壊されており、15→14aという先後関係を把握できる。また、2-F群は北側の調査区外の支群へ続くものと思われる。

2. 横穴墓群の時期について

横穴墓群出土の須恵器杯をみると、2-8墓道出土の



第60図 経塚横穴墓群出土装飾品類 (S=1/2)

杯身（第49図2）及び2-16墓道出土の杯身（第53図12）が口径、立上り部の幅等からみてもっとも古式であり、小田富士雄氏による須恵器編年のⅢB期に位置づけることができる。2-9墓道出土の土器群は、杯を含んでいないが、廳や耳付の提瓶の形状からみれば、これらもⅢB期頃に位置づけることができるだろう。第1支群では明確にⅢB期までさかのぼる蓋杯は出土していない。もっとも新しい時期のものとしては、1-1出土杯身（第42図8・9）1-2出土杯身（第44図9）や2-3出土杯身（第45図-4）がVI期に位置づけられる。これらは、追葬または追善供養的な祭祀の際の遺物と思われるが、第1・第2支群ともVI期まで使用されていたと考えてよいだろう。

参考文献 舟山良一 1996「I 北部九州」『須恵器集成図録』第五卷 西日本編 雄山閣出版

第2表 耳環一覧表

番号	支群	出土場所	外径(mm)	内径(mm)	縦幅(mm)	横幅(mm)	重量(g)	材質
第59図1	1	1号横穴墓玄室内	25.2	14.1	5.3	7.4	10.5	銅製
第59図2	1	1号横穴墓	24.4	13.5	7.4	5.3	7	銅地金銅張
第59図3	1	2号横穴墓前部上層	22.6	11.3	5.2	7.7	8	銅地金銅張
第59図4	1	3号横穴墓玄室内	25	12.5	6.3	8.4	13	銅製
第59図5	1	4号横穴墓玄室内	27.1	14.5	6.1	7.6	13	銅地金銅張
第59図6	1	6a号横穴墓玄室内	25.7	13.5	6.1	6.8	2	木芯銅張
第59図7	1	6a号横穴墓玄室内No.5	21.4	12.7	4.6	6.3	6	銅製
第59図8	1	6a号横穴墓玄室内No.7	25.2	14.9	5.2	7.1	3	木芯銅張
第59図9	1	7a号横穴墓墓道	23.7	13	5.8	7.5	11	銅地金銅張
第59図10	2	2号横穴墓玄室内	28.5	17.2	5.2	5.7	12	銅製
第59図11	2	4号・5号横穴墓墓道	19	10.9	4	6.1	6	銅地金張
第59図12	2	7号横穴墓閉塞石前面	28.7	16	4.7	3.8	6	銅地金張
第59図13	2	7号横穴墓玄室内2	28.3	15.7	6.3	6.4	14	銅製
第59図14	2	7号横穴墓玄室内①	27.7	15.3	6.4	6.7	14	銅地金銅張
第59図15	2	13号横穴墓墓道埋土中	21.7	10.7	5.7	7.8	11	銅地金銅張
第59図16	2	10号横穴墓玄室内	17.7	11.1	3.1	4.7	3	銅地金銅張
第59図17	2	10号横穴墓玄室内	18.3	9.3	4.4	6.8	5	銅地銀張
第59図18	2	16号横穴墓墓道埋土中	30.7	18.6	6	6.1	14	銅地銀張
第59図19	2	16号横穴墓墓道No.12	30.3	18.4	5.8	6.2	13	銅地銀張

第3表 玉類一覧表

番号	支群	名称	員数	出土場所	径(mm)	幅・長(mm)	孔径(大)	孔径(小)	重量(g)	穿孔法	材質	その他特徴など
第59図20	1	切子玉	1	4号横穴玄室内出土	14	27	4.6	1.4	6	片側穿孔	水晶	
第59図21	1	切子玉	1	4号横穴玄室内出土	14	30	4.5	1.2	7	片側穿孔	水晶	
第59図22	1	管玉	1	1号横穴墓	11.3	28.5	2.5		4	片側穿孔	碧玉	
第59図23	1	管玉	1	1号横穴墓玄室内	8.5	20.1	1.9		2	片側穿孔	碧玉	
第59図24	1	管玉	1	4号横穴玄室内出土	7.5	19.3	2.4	1.8	2	片側穿孔	碧玉	
第59図25	1	管玉	1	4号横穴玄室内出土	6	17	2	1	1.5	片側穿孔	碧玉	
第59図26	1	勾玉	1	4号横穴玄室内出土	6.5	13.5	3	2.5	2	両側穿孔	滑石	
第59図27	1	勾玉	1	4号横穴玄室内出土	10		3.5	1.3	5	片側穿孔	水晶	下端部欠
第59図28	1	丸玉	1	4号横穴玄室内	11	9.5	2.9	2.5	3		ガラス	風化著しい
第59図29	1	丸玉	1	4号横穴玄室内	11.5	10.5	3.5	3	3		ガラス	若干風化している
第59図30	1	丸玉	1	4号横穴玄室内		9	3	2.5	2.5		ガラス	風化著しい
第59図31	1	丸玉	1	4号横穴玄室内	12	8	2.5	3	3		ガラス	
第59図32	1	小玉	1	6a号横穴墓	8.1	4.3	3.6	0.5	0.5	片側穿孔	凝灰岩(?)	
第59図33	2	丸玉	1	12号横穴墓前部	13.1	8.7	2.7	2	2	片側穿孔	凝灰岩(?)	

第4表 土器一覧表①

報告書掲載場所	支群	名 称	出土場所	口 径 (mm)	器 高 (mm)	胸部径 (mm)	脚台径 (mm)	色 調	胎 土	焼 成	その他の特徴
第41図 1	1	須恵器台付甕	検出中	108	151	85	94	灰赤褐色	1~2mm大及び微砂粒(白色)を若干含むが、全体として精良	やや焼成温度低い(瓦質に近い)	
第41図 2	1	須恵器小壺	検出中	65		82		内面:暗灰色、外面:淡灰色	1mm以下の砂粒・微砂粒を多量に含む(白色粒多し、黒色粒若干)	良好(須恵質)	
第41図 3	1	土師器壺	検出中	113	104	126		淡赤褐色	0.5mm内外の赤色粒及び黒色の微砂粒を多く含む	良好(土師質)	
第41図 4	1	須恵器杯蓋	検出中	80	27	99		外面:青灰色(外縁部の一部黄褐色)、内面:橙黄褐色(外縁部分は青灰色)	0.5~1mm程度の白色砂粒及び黒色の微砂粒を若干多く含む	やや焼成温度低い(須恵質に近い)	
第41図 5	1	須恵器杯身	検出中	94	31	106		淡灰色~灰色	黒色砂粒を若干含むが、全体として精良	良好(須恵質)	回転ヘラ切り未調整
第41図 6	1	須恵器高杯	清掃中出土	242	112		125	青灰色	1mm以下の白色砂粒及び微砂粒を多く含む	若干焼成温度低い(瓦質と須恵質の中間)	
第42図 1	1	須恵器杯蓋	1羨道	124	35			暗赤褐色	砂粒きわめて少なく精良	やや不良(瓦質に近い)	内面に「X」のヘラ記号あり 回転ヘラケズリ
第42図 2	1	須恵器杯蓋	1⑧	120	30			青灰色	微砂粒やや多い	良好(須恵質)	回転ヘラ切り未調整
第42図 3	1	須恵器杯蓋	1③	114	35			内面:褐色、外面:灰褐色	0.1~1mm大の白色砂若干含む	〃	回転ヘラケズリ
第42図 4	1	須恵器杯蓋	1⑫	121	40			明灰色	微砂粒を少し含むが全体として精良	〃	粗いナデ
第42図 5	1	須恵器杯身	1②	99	37	114		暗褐色	白色砂粒をやや多く含む	若干焼成温度低い	平行タタキ状圧痕
第42図 6	1	須恵器杯身	1⑩	102	38			暗灰褐色(立上部は暗褐色)	0.5~1mm内外の白色砂及び微砂粒(白色)をやや多く含む	良好(須恵質)	回転ヘラケズリ
第42図 7	1	須恵器杯	1	124	42			黄灰白色~灰色	1~3mm大の石英粒若干と微砂粒やや多い	やや不良(瓦質)	粗いナデ
第42図 8	1	須恵器杯	1⑥	132	54		74	黄褐色~灰色	黒色の微砂粒を若干含むが、全体として精良	良好(須恵質)	高台付
第42図 9	1	須恵器杯	1⑨	120	57		73	青灰色	0.5~1mm程の黒色・白色砂粒を少量含むが、全体として精良	〃	〃
第42図10	1	須恵器平瓶	1羨道①	59	138	164		淡灰色	白色の微砂粒をやや多く含むが、全体として精良	やや焼成温度低い(瓦質に近い)	
第42図11	1	須恵器平瓶	1④	60	92	113		灰色	0.5~1mm程度の砂粒をやや多く含む	良好(須恵質)	
第42図12	1	須恵器高杯	1羨道	88	85		75	暗灰色	微砂粒を若干含むが全体として精良	〃	
第42図13	1	須恵器高杯(脚)	1墓道埋土中黒色土			140		外面:黒色、内面:青灰色(黄灰色の自然釉が薄くかかっている)	白色の微砂粒多い	〃	
第42図14	1	須恵器高杯	1⑩	99	84		75	黒色	1~2mm程度の白色砂粒を若干含むが、全体に精良	〃	
第42図15	1	須恵器高杯	1⑦	102	92		77	暗灰色~灰色	微砂粒を若干含むが、全体的に精良	〃	
第43図	1	須恵器大甕	1墓道	453	880	710		青灰色	微砂粒を若干多く含むが全体として精良	〃	器高は推定
第44図 1	1	須恵器甕	1墓道	225		460		外面:暗赤灰色~黒色、内面:暗灰色	白色の粗砂・微砂を若干多く含む	〃	
第44図 2	1	須恵器高杯	2前庭~墓道②	124	90		90	淡灰色~灰白色(杯部内面)	1~3mm大の石英・長石粒及び微砂粒を若干含むが、全体として精良	〃	
第44図 3	1	須恵器高杯	2表採				80	青灰色	微砂粒を若干多く含む	〃	
第44図 4	1	須恵器高杯	2墓道上層	98	141		44	青色(緑灰色の自然釉がかかる)	微砂粒を含むが精良	〃	脚部外面に「ハ」のヘラ記号有り
第44図 5	1	須恵器高杯	2前庭					青灰色	微砂粒を若干含む	〃	脚部外面に「ハ」のヘラ記号有り
第44図 6	1	須恵器平瓶	2墓道上層			152		暗灰色	1mm以下の白色微砂粒を多く含む	〃	
第44図 7	1	須恵器甕	2前庭	223		410		褐色~暗灰色	白色の微砂粒を若干多く含む	〃	
第44図 8	1	須恵器杯	2前庭~墓道①	105	36			暗灰色(断面は明灰色)	黒色の微砂粒をやや多く含む	〃	回転ヘラ切り後ナデ
第44図 9	1	須恵器杯	2前庭	142	43		100	内面:黄灰白色、外面:淡灰色	0.5mm以下の微砂粒を若干含む	〃	
第45図 1	1	土師器碗	3羨道出土	164.5	57			橙色	微砂粒及び1mm大までの白色砂粒を含む	良好(土師質)	内面縦ヘラ磨き、外側粗い横ヘラ磨き
第45図 2	1	須恵器台付甕	3前庭出土	109	135	79	86	暗灰色~灰褐色(口縁部内面)	白色の微砂粒を若干含む	良好(須恵質)	胸部・脚部に「III」のヘラ記号
第45図 3	1	須恵器台付甕	3②	60		80		暗赤褐色~橙褐色	白色の微砂粒を多く含む	〃	
第45図 4	1	須恵器杯	3羨道	130	46		83	青灰色	微砂粒を若干含んでるが全体として精良	〃	高台付
第45図 5	1	須恵器平瓶	3③	56.5	113.5	132		灰色	微砂粒を若干含むが、全体として精良	〃	「+」ヘラ記号有り
第45図 6	1	須恵器平瓶	3前庭①	75	120	150		暗灰色~黄灰色	1~2mm大の白色粒及び微砂粒を若干多く含む	〃	
第45図 7	1	須恵器平瓶	3①	69	162	175		暗灰色	1~3mm大の砂粒若干含む	〃	
第45図 8	1	須恵器高杯	3前庭②	85	83		67	黒色~灰色(脚部内面に自然釉)	微砂粒を多く含む	〃	
第45図 9	1	須恵器杯蓋	4羨道	179	44	208		明灰色	微砂粒やや多い、その他0.5~1mmの大砂粒を若干含む	やや不良(瓦質に近い)	
第45図 10	1	須恵器杯蓋	4羨道+2墓道	114	37		120	淡青灰色	微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	回転ヘラケズリヘラ記号あり
第45図 11	1	須恵器杯身	4羨道出土	101	36			青灰色	0.1~1mm程度の白色砂粒をやや多く含む	〃	回転ヘラケズリヘラ記号あり
第45図 12	1	須恵器杯身	4羨道	95	40	108		青灰色	0.5mm程度の白色砂粒を含むが、全体に精良	〃	回転ヘラ切り未調整
第45図 13	1	須恵器杯身	4羨道出土	95	40	117		淡青灰色	微砂粒を若干含んでるが精良	〃	回転ヘラケズリヘラ記号あり
第45図 14	1	須恵器杯蓋	4羨道出土	109	39			青灰色(外面一部暗灰色)	微砂粒を多く含む	〃	回転ヘラケズリ内面にヘラ記号あり

第4表 土器一覧表②

報告書掲載場所	支群	名 称	出土場所	口 径 (mm)	器 高 (mm)	胴部径 (mm)	脚台径 (mm)	色 調	胎 土	焼 成	その他の特徴
第45図15	1	須恵器杯蓋	4玄室内出土	80	32.5	100		内面:明灰色、外面:黄灰色(自然釉)	精良(0.5~2mmほどの觸けた黒色粒あり)	良好(須恵質)	
第45図16	1	須恵器杯蓋	4	103.5	32			明灰色	黒色微砂粒多し	々	
第45図17	1	須恵器杯蓋	4玄室内出土	84	34	108		外面:黄灰色(自然釉)、内面:銀灰色(金属光沢あり)	微砂粒をやや多く含む	々	
第45図18	1	須恵器杯	4羨道	99	36			内面:淡灰色、外面:淡灰色と暗灰色の斑	白色・黒色の微砂粒多し	々	
第45図19	1	須恵器杯身	4玄室内②	98	37	116		青灰色	白色の微砂粒をやや多く含む	々	回転ヘラケズリヘラ記号あり
第45図20	1	須恵器杯	4羨道②	94	33			明灰色	微砂粒多いが、精良。黒い斑点状の砂粒多い。	々	回転ヘラ切り後ナデ
第45図21	1	須恵器杯	4羨道出土	96	33			内面:青灰色(黒色の不着物有り)、外面:青灰色に黄灰色の自然釉	微砂粒を若干含んでいるが精良	々	回転ヘラ切り後ナデ
第45図22	1	須恵器龜	4羨道	112.5	127	84		青灰色	白色の微砂粒を含む	々	
第45図23	1	須恵器平瓶	4玄室内①	53	88	95		青灰色	1~2mm大の砂粒少しおと微砂粒をやや多く含む	々	
第45図24	1	須恵器台付長頸壺	4羨道出土	61	141	86	62	黒灰色、一部灰色の自然釉	白色の微砂~1mm大の砂粒を含む	々	
第45図25	1	須恵器台付長頸壺	4羨道出土	52	156	68	61	暗青灰色~黒色(=自然釉)	砂粒の少ない精良な胎土	々	
第45図26	1	須恵器台付龜	4玄室内	97	146	81.5	97.5	暗赤色~暗灰色	白色砂粒をわずかに含んでいる	々	
第45図27	1	須恵器台付長頸壺	4羨道出土	85	293	197	143	胴部上半文様帯から上は灰色、下半部~脚部外面は黒色、脚部内面は明灰色	白色・黒色の微砂・0.5~1mm大の砂粒やや多し	上部は焼成良好で過半部はやや焼成温度低く軟質	
第46図1	1	須恵器杯蓋	6a ④	119	42			青灰色	黒色の微砂粒を若干含むが、全体に精良	良好(須恵質)	静止ヘラケズリNa3とセット
第46図2	1	須恵器杯身	6a ③	100	45	124		青灰色(黄土色の石灰分が付着している)	0.5mm内外の黒色砂を若干含むが、全体として精良	々	Na4とセット
第46図3	1	須恵器高杯	6a 落盤下	103	91		83	灰色	0.1~0.5mm内外の砂粒をやや多く含む	々	杯部底面及び脚部内面に「II」ヘラ記号有り
第46図4	1	須恵器提瓶	6a ⑩	126	234	198		青灰色(黄土色の石灰分が付着している)	白色の微砂粒を若干多く含む	々	
第46図5	1	須恵器平瓶	6b ①			177		灰色	白色砂粒(0.1~1mm程度を多く含む)	々	
第46図6	1	土師器杯	6b 羨道より土師器高杯と一括出土	105	46			赤橙色	0.5mm内外の砂粒(黒色多い)を若干含んでいる	良好(土師質)	杯部内外面ヘラミガキ
第46図7	1	土師器高杯	6b 羨道より一括出土	142	140		105	橙色	0.5mmほどの黒色・白色砂粒を若干含んでいる	々	杯部内外面ヘラミガキ
第46図8	1	土師器高杯	6b ⑥	140	88		101	淡赤褐色	0.5mm以下の黒色砂粒を少量含むが、全体として精良	々	杯部内外面ヘラミガキ
第46図9	1	土師器高杯	6b ④	137	85		99	淡赤褐色	0.5mm以下の黒色砂粒を少量含むが、全体として精良	々	杯部内外面ヘラミガキ
第46図10	1	土師器高杯	6b ③	142	89		103	淡赤褐色	0.5mm前後の黒色砂粒が若干見られるが、全体として非常に精良	々	杯部内外面ヘラミガキ
第46図11	1	須恵器杯身	7a 墓道	95	32	113		暗青灰色	1~2mm大の白色砂を少量含むが、全体としては精良な胎土	良好(須恵質)	回転ヘラ切り後粗いナデ
第46図12	1	須恵器杯身	7a 墓道⑯	99	32	115		外面:暗灰色、下面:黄灰色(自然釉)	0.5mm程の砂粒を若干含むが、非常に精良	々	々
第46図13	1	須恵器杯身	7a 墓道⑯	95	37	120		淡青灰色	黒色の微砂粒多い	々	静止ヘラケズリ
第46図14	1	須恵器杯身	7a 墓道⑯	95	33	114		暗灰色(下部は大部分灰をかぶって黄灰色)	0.5mm程の白色砂及び微砂粒を若干含むが全体として精良	々	回転ヘラ切り未調整
第46図15	1	須恵器杯身	7a 墓道⑯	99	30	115		上面:灰白色、下面:灰色	0.5mm以下の砂粒を若干含むが、全体に精良	々	々
第46図16	1	須恵器杯蓋	7a 墓道	111	30			明灰色	砂粒をほとんど含まない精良な胎土	々	々
第46図17	1	須恵器杯蓋	7a 墓道⑬	112	36	129		内面:明灰色、外面:暗灰色~明灰色	微砂粒を若干含むが全体に精良	やや不良(瓦質に近い)	
第46図18	1	須恵器杯蓋	7a 墓道④	108	36	126		明灰色	0.5mm内外の白色・黒色砂粒若干と微砂粒をやや多く含む	やや不良(瓦質)	
第46図19	1	須恵器杯蓋	7a 墓道⑧	111	34	133		黄灰白色(上面やや黒っぽい)	0.5mm以下の砂粒をやや多く含む	焼成温度低い(瓦質)	
第46図20	1	須恵器杯蓋	7a 墓道⑯	96.5	30	114		黒色に近い暗灰色	2~3mm大の粗砂(白色)を若干含む	良好(須恵質)	ツマミはボタン形
第46図21	1	土師器杯	7a 墓道⑨	153	55			淡赤褐色	微砂粒を若干含むが全体に精良	良好(土師質)	内面:縦方向のヘラミガキ、外面:横方向のヘラミガキ
第46図22	1	須恵器杯	7a 墓道⑯	110	35			紫灰色	砂粒少なく精良	良好(須恵質)	回転ヘラ切り未調整
第46図23	1	須恵器杯	7a 墓道②	123	38			淡灰色~灰色	砂粒少なく精良	やや不良(瓦質に近い)	々
第46図24	1	須恵器杯	7a 墓道⑤	128	43			淡灰色	微砂粒を多く含む	やや不良(瓦質)	粗いナデ
第46図25	1	須恵器杯	7a 墓道⑯	121	41			淡灰色	微砂粒を若干含むが全体に精良	々	回転ヘラ切り後粗いナデ
第46図26	1	須恵器杯身	7a 墓道	131	46			灰色~明灰色	微砂粒やや多い	良好(須恵質)	々
第46図27	1	須恵器杯	7a 墓道⑯	114	31			内面:明灰色、外面底部:黄灰色(自然釉(?)、口縁部:灰色)	微砂粒を若干含むが、非常に精良	々	回転ヘラ切り未調整
第46図28	1	須恵器杯	7a 羨道	112	31			淡青灰色	0.5mm内外の黑色砂粒多い	良好(やや焼成温度低い)	々
第46図29	1	須恵器龜	7a 墓道			85		淡青灰色	微砂粒を若干含むが全体として精良	良好(須恵質)	底部外面に「×」ヘラ記号あり

第4表 土器一覧表③

報告書掲載場所	支群	名称	出土場所	口径 (mm)	器高 (mm)	胴部径 (mm)	脚台径 (mm)	色調	胎土	焼成	その他特徴
第47図	1	須恵器高杯	7墓道	153				明灰色～淡灰色	1～2mm大の白色砂粒若干と白色・黒色の微砂粒を多く含む	焼成温度低い(瓦質に近い)	杯部内底面と脚部内面に「=」ヘラ記号有り
第48図1	1	須恵器壺	7a墓道	96	148	150		灰褐色～橙灰色	微砂粒を若干含むが精良	良好(須恵質)	
第48図2	1	須恵器甌	7a墓道	111	111	87		淡灰色～灰色	1mm以下の白色砂粒を多く含む	〃	
第48図3	1	須恵器平瓶	7a墓道			115		暗青灰色	0.5mm前後の白色砂粒及び微砂粒を若干含む	〃	
第48図4	1	須恵器高杯	7a墓道⑦	100	91		75	灰色	黒色砂粒若干を含むが全体に精良	〃	
第48図5	1	須恵器高杯	7a墓道	96	81		84	灰色・黒色のまだら	微砂粒をやや多く含む	〃	胸部に縦方向の沈線あり
第48図6	1	土師器甌	7c玄室床②	146	146	150		黄褐色	1mm前後の白色粒・黒色粒若干と微砂粒を多く含む	良好(土師質)	内面横方向ヘラケズリ
第48図7	1	土師器甌(杯)	7c玄室床①	128	66			淡赤褐色	0.5mm内外の砂粒を若干含むが、全体に精良	〃	内面横方向ヘラミガキ(外面不明)
第48図8	1	土師器甌(杯)	7c玄室床	132	70			淡赤褐色	0.5mm内外の砂粒を若干含むが、全体に精良	〃	内外面横方向ヘラミガキ
第48図9	1	土師器甌(杯)	7c玄室床④	96.5	48			淡赤褐色	0.5mm内外の砂粒を若干含むが、全体に精良	〃	内外面横方向ヘラミガキ
第48図10	1	土師器甌(杯)	7c玄室床③	99	57			淡赤褐色	砂粒少なく精良	〃	内外面横方向ヘラミガキ
第48図11	2	須恵器高杯	7a墓道	100	87	73		暗灰色～黃灰色	微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第48図12	2	須恵器壺(甌)	検出中			99		暗灰色～暗赤灰色	1mm以下の白色砂粒及び黒色の微砂粒を含む	〃	甌の可能性有り
第48図13	2	須恵器杯蓋	2検出中前庭	87	37	118		青灰色(外面やや黒い)	微砂粒を若干多く含む	〃	
第48図14	2	須恵器蓋(高杯)	2前庭	136.5	52			青灰色	微砂粒を若干含むが全体に精良	〃	ボタン形ツマミ
第48図15	2	須恵器杯	2検出中前庭	112.5	37			やや黄色味を帯びた青灰色	白色の微砂粒を多く含む	〃	回転ヘラケズリ
第48図16	2	須恵器杯身	2検出中前庭	94	32	115		淡灰色	微砂粒を多量に含む	〃	回転ヘラケズリ 数値は復元推定
第48図17	2	須恵器杯	2検出中前庭	110	40			青灰色(外面一部赤灰色)	黒色の微砂粒を多く含む	〃	
第48図18	2	須恵器杯	3玄室内 表土上	111	46			灰色(外面やや黒っぽい)	砂粒の少ない精良な胎土	良好(やや焼成温度低い)	
第48図19	2	須恵器杯	4墓道底面	86	30	108		青灰色	微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第48図20	2	須恵器杯身	6墓道	95	29	117		青灰色	砂粒の少ない精良な胎土	〃	
第48図21	2	須恵器杯蓋	6墓道	83		102		青灰色	1～2mm大の白色粒及び白色の微砂粒多い	〃	
第48図22	2	須恵器杯	6墓道	88	30			青灰色	0.5mm内外の白色砂粒を多く含む	〃	
第48図23	2	須恵器杯	6墓道	86	33			青灰色～淡灰色	1mm以下の白色粒を多く含む	〃	数値は復元推定
第48図24	2	須恵器小壺	6墓道底面	65	44	93		暗灰色～灰色	微砂粒を多く含む	〃	
第48図25	2	土師器甌	6b	166	55			赤褐色	微砂粒を若干含むが精良な胎土	良好(土師質)	
第48図26	2	須恵器高杯	6墓道側面	95	82	77		暗灰色～灰色	微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第48図27	2	須恵器甌	7墓道	118	122	94		青灰色	微砂粒を若干含むが非常に精良	〃	静止ヘラケズリ
第48図28	2	須恵器杯身	7玄室床	96	35	115		青灰色	微砂粒を若干含むが全体に精良	〃	
第48図29	2	須恵器平瓶	7墓道	61	117	130		暗青灰色	微砂粒を若干多く含む	〃	
第48図30	2	須恵器平瓶	7墓道	51	82	89		暗灰色底部、径7cm程の円形に 明灰色周縁部やや赤み強い)	微砂粒を若干含むが全体に精良	〃	
第48図31	2	須恵器小壺	7墓道	80	48	97		淡灰色	0.5mm前後の砂粒及び微砂粒を若干含むが、全体に精良	焼成温度低い(瓦質に近い)	
第48図32	2	須恵器小壺	7前庭 閉塞石横	82	47	96		外面:緑がかった青灰色、 内面:橙灰色	微砂粒を若干含むが全体に精良	良好(須恵質)	
第48図33	2	須恵器小壺	7前庭 閉塞石横	68	66	106		青灰色～黄白色	微砂粒を若干含むが非常に精良	やや焼成温度低い	
第49図1	2	須恵器高杯	8墓道	120	116		110	青灰色～暗灰色	微砂粒から1～2mm大の白色砂粒を若干含む	良好(須恵質)	
第49図2	2	須恵器杯身	8墓道	111	38	134		青灰色	0.5～3mm程度の白色砂粒を多く含む	〃	回転ヘラケズリ
第49図3	2	土師器甌	9前庭A-⑥			129		青灰色	1mm以下の白色砂粒を多く含む	〃	
第49図4	2	須恵器平瓶	9前庭A-⑥			112		灰色(断面は灰白色)	微砂粒を若干多く含む	不良(瓦質)	
第49図5	2	土師器甌(杯)	9前庭B-⑦	130	48			明赤褐色	0.5～1mm前後の黒色粒及び白色の微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第49図6	2	土師器甌	9前庭A-⑦	109	104	120		淡赤褐色(底部)外面に黒斑あり	1mm前後の白色粒、赤色粒及び微砂粒を若干含むが全体に精良	良好(土師質)	
第49図7	2	須恵器蓋	9前庭部A-③	155				青灰色	砂粒の少ない精良な胎土	良好(須恵質)	
第49図8	2	須恵器蓋(高杯)	9前庭B-④	142	50			青灰色	微砂粒多し	〃	
第49図9	2	須恵器蓋(高杯)	9前庭 埋土中	141	42.5			青灰色～暗灰色(外面の一部)	微砂粒を多く含む、2～3mm大の粗砂も若干含む	〃	
第49図10	2	須恵器高杯	9前庭A-⑨	132	161	162		青灰色	砂粒の少ない精良な胎土	〃	
第49図11	2	須恵器高杯	9前庭埋土中 9前庭B-⑦	115	129	136	111	やや黄色味を帯びた青灰色	微砂粒を多く含む	〃	
第49図12	2	須恵器高杯	9横穴前庭 B-⑤、9前庭左壁、経塚10 ～15前庭	123	138	144	117	淡青灰色	微砂粒を若干含む	〃	
第49図13	2	須恵器高杯	9前庭A-④	116	128	140	118	青灰色	白色の微砂粒を多く含む	〃	

第4表 土器一覧表④

報告書掲載場所	文群	名 称	出土場所	口 径 (mm)	器 高 (mm)	胴部径 (mm)	脚台径 (mm)	色 調	胎 土	焼 成	その他の特徴
第49図14	2	須恵器高杯	9前庭理土中、2支検出中、10~15前庭	126	140	141	113	青灰色~暗灰色	微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第49図15	2	須恵器提瓶	9前庭B-⑥	67	193	141		青灰色	0.5mm前後の白色砂粒を多く含む	々	
第49図16	2	須恵器壺	9前庭A-⑤ 9前庭左壁	119	156	108	108	暗青灰色(胴部の一部に火だしき状の焼成痕あり)	微砂粒を若干含むが全体に精良	々	胴部にヘラ記号
第49図17	2	須恵器壺	9義道A-②			96		灰色	白色の微砂粒を多量に含む	々	頭部にヘラ記号
第50図1	2	須恵器提瓶	9前庭B-②	136	280	410		青灰色(外縁やや黒っぽい)	黒色の微砂粒を多く含む	々	
第50図2	2	須恵器横瓶	9前庭A-①	127	245	225		青灰色	1~2mm大の白色砂粒若干と白色の微砂粒を多く含む	々	
第51図1	2	須恵器杯蓋	10前庭	80	29	97		青灰色	微砂粒多し	々	
第51図2	2	須恵器杯身	10墓道前庭部~墓道	103	34			暗青灰色	2~3mm大の白色粗砂若干と微砂粒を多く含む	々	回転ヘラ切り後ナテ、ワラ状の圧痕有り
第51図3	2	土師器小壺	10前庭	58	93	98		淡赤褐色~黄褐色	1~3mm大の石英粒若干及び微砂粒を多く含む	良好(土師質)	
第51図4	2	須恵器小壺	10前庭	64	45	75		淡灰色	微砂粒を多く含む	若干焼成温度低し(瓦質と須恵質の中間)	
第51図5	2	須恵器平瓶	10義道②	64	137	150		灰色	1mm以下の砂粒・微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第51図6	2	須恵器平瓶	10墓道前庭			183		青灰色	1~3mm大の白色粗砂及び微砂粒を多く含む	々	
第51図7	2	須恵器平瓶	10b閉塞石間	69	145	171		内面:黄灰色、外縁:暗灰色~灰白色(上面に黄灰色の自然釉)	白色・黒色の微砂粒多いが全体に精良	々	口縁部内面にヘラ記号、肩部に円形張付文
第51図8	2	須恵器杯身	11義道	98	33			暗灰色	微砂粒を若干多く含む	々	回転ヘラ切り未調整
第51図9	2	須恵器杯身	11前庭	99	32	111		淡灰色	微砂粒を多く含む	々	々
第51図10	2	須恵器杯身	11前庭	85	28	108		暗灰色	微砂粒を若干多く含む	々	(調整不明)
第51図11	2	須恵器杯身	11前庭、11~12中間前庭	96	33			灰褐色	黒色の微砂粒を多く含む	々	回転ヘラ切り後粗いナテ
第51図12	2	須恵器小壺	11前庭、11~12中間前庭	72	64	109		暗灰色~淡灰色(肩部に黄灰色の自然釉)	微砂粒を若干含むが全体に精良	々	
第51図13	2	須恵器甕	11前庭	212				外面:黑色、内面:灰色	微砂粒を若干多く含む	々	肩部にヘラ記号有り
第51図14	2	須恵器杯	11~12中間前庭	110	35			青灰色(内面淡青灰色)	微砂粒を多く含む	々	静止ヘラ切り後粗いナテ
第51図15	2	須恵器杯	11~12前庭	102	36			暗灰色(外面に黄灰色の自然釉)	黒色の微砂粒を若干含む	々	(調整不明)
第51図16	2	須恵器杯	11~12前庭	84	30	106		暗灰色~暗赤色	2~3mm大の小石少量と微砂粒を若干多く含む	々	回転ヘラ切り未調整
第51図17	2	須恵器杯	11~12前庭	88	30			暗紫灰色	微砂粒を多く含む	々	々
第51図18	2	須恵器杯蓋	11~12前庭	117	34			黄灰白色	微砂粒を若干多く含む	不良(瓦質)	々
第51図19	2	須恵器杯身	11~12中間前庭	111	36	128		淡青灰色(内面やや色が濃い)	微砂粒を若干多く含む	良好(須恵質)	々
第51図20	2	須恵器杯身	11~12前庭	107	35	124		淡青灰色	微砂粒を多く含む	々	々
第51図21	2	須恵器杯身	11~12中間前庭	104	32.5	120		黄灰褐色	微砂粒を多く含む	不良(土師質に近い)	(調整不明)
第51図22	2	須恵器蓋	11~12中間前庭	79	28	99		暗青灰色	1mm大の白色砂粒若干と、微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第51図23	2	須恵器小壺	11~12中間前庭	69	47	79		青灰色	微砂粒を若干多く含む	々	
第51図24	2	須恵器小壺	11~12中間前庭	104	47	95		暗灰色~淡灰色	微砂粒を多く含む	々	
第51図25	2	須恵器平瓶	11~12中間前庭			176		青灰色~灰白色	白色の微砂粒を多く含む	々	
第51図26	2	須恵器平瓶	11前庭、10~11前庭、11~12中間前庭	76	160			淡灰色	1mm以下の白色砂粒と黒色の微砂粒を若干多く含む	やや焼成温度低い(瓦質に近い)	肩部にヘラ記号有り
第52図1	2	須恵器長頸壺	13前庭	89	198	154		青灰色(断面は赤褐色)	微砂粒を若干含むが全体に精良	良好(須恵質)	
第52図2	2	須恵器平瓶	13前庭	60	130	149		暗紫色~灰赤色	微砂粒を若干含むが全体に精良	々	肩部に円形張付文あり
第52図3	2	須恵器杯蓋	13義道②	85	36	109		青灰色	微砂粒を若干含むが全体に精良	々	
第52図4	2	須恵器杯蓋	13義道③	77	28	92		青灰色	白色の微砂粒と1~2mm大の砂粒を若干含む	々	
第52図5	2	須恵器杯身	13義道①	83	26	99		青灰色	0.5mm内外の砂粒(白色多い)を多く含む	々	回転ヘラ切り未調整
第52図6	2	須恵器杯身	13義道④	80	30	92		青灰色	白色・黒色の微砂粒を多く含む	々	内面底部に「?」形のヘラ記号あり
第52図7	2	須恵器杯蓋	13~14前庭⑩	87	28	100		黄灰色	白色の微砂粒を多く含む	々	
第52図8	2	須恵器杯蓋	13~14前庭⑫	87.5	38	107		青灰色(外面はやや黒っぽい)	白色の微砂粒を多く含む	々	
第52図9	2	須恵器杯蓋	13~14前庭⑭	85	35	102		黄灰色~青灰色(内面に黄灰色の自然釉)	白色の微砂粒多し	々	
第52図10	2	須恵器杯蓋	13~14前庭⑮	90	32	112		淡黄灰色	白色・黒色の微砂粒を多く含む	々	
第52図11	2	須恵器杯蓋	13~14前庭⑯	78	22	93		外面:暗灰色、内面:暗赤色	砂粒の少ない緻密な胎土	々	回転ヘラケズリ
第52図12	2	須恵器杯蓋	13~14前庭⑯	80	18	91		黒色(外面に灰色の自然釉)	微砂粒を若干含むが全体に精良	々	々

第4表 土器一覧表⑤

報告書掲載場所	支群	名 称	出土場所	口 径 (mm)	器 高 (mm)	胴部径 (mm)	脚台径 (mm)	色 調	胎 土	焼 成	その他の特徴
第52図13	2	須恵器杯蓋	13・14前庭⑤	81	22	93		暗灰色(外面に黄灰色の自然釉)	砂粒の少ない緻密な胎土	良好(須恵質)	回転ヘラケズリ
第52図14	2	須恵器杯	13・14前庭⑬	99	32			外面:暗灰色~灰色、内面:淡灰色	白色の微砂粒を多く含む	々	回転ヘラ切り未調整
第52図15	2	須恵器杯	13・14前庭③	106	36			青灰色~灰色	微砂粒を多く含む	々	々
第52図16	2	須恵器杯身	13・14前庭⑦	89	32			暗赤灰色	0.5mm以下の砂粒を若干含む(2mm大1個)	々	回転ヘラケズリ
第52図17	2	須恵器杯身	13・14前庭⑧⑪	89	35	92		黒色	0.5mm内外の砂粒若干含むが全体に精良	々	々
第52図18	2	須恵器杯身	13・14前庭⑥	92	31.5			黒色(外底面は暗赤灰色)	0.5mm以下の微砂粒をやや多く含む	々	々
第52図19	2	須恵器杯身	14墓道	90	34			黒色	微砂粒を若干含むが非常に精良	良好(やや焼成温度低い)	々
第52図20	2	須恵器盤	13・14前庭⑬	98	117	85		暗灰色~青灰色	微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第52図21	2	土師器杯	13・14前庭	140	56.5	143		淡赤褐色	0.5mm内外の白色砂粒及び微砂粒を若干多く含む	良好(土師質)	内面縦方向のヘラミガキ(外面風化のため不明)
第52図22	2	須恵器高杯	13・14前庭	90	86		75	黒色(一部明灰色)杯部内面に自然釉	0.5~1mm大の白色砂粒若干と微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第52図23	2	須恵器平瓶	13・14前庭⑭	93	179	184		暗灰色~青灰色(形部及び口縁部内面に黄灰色の自然釉)	微砂粒を多く含む	々	
第52図24	2	須恵器壺	13・14前庭⑮			206		淡青灰色(胴部下半に火だしき状の焼成痕あり)	微砂粒を多く含む	々	胴部がくびれている
第52図25	2	須恵器杯蓋	14前庭	88	32.5	109		淡青灰色(外面に黄灰色の自然釉)	0.1~1mm大の白色砂粒と黒色微砂粒を多く含む	々	
第52図26	2	須恵器台付杯	14墓道	160	78		107	灰色	0.5~2mm大の粗砂粒を多く含む	良好(やや焼成温度低い)	
第52図27	2	須恵器平瓶	10~15前庭	85	157	170		0.5~1mm大の白色砂粒若干含む	0.5~1mm大の白色砂粒若干含む	焼成温度低い(瓦質)	回転ヘラ切り未調整
第52図28	2	須恵器杯	10~15前庭	100	34			暗灰色~灰色	白色の微砂粒を多く含む	良好(須恵質)	
第52図29	2	須恵器高杯	10~15前庭				99	黄灰色~暗灰色	微砂粒を多く含む	々	
第53図1	2	須恵器壺	10~15前庭⑨前庭埋土上層検出中墓道先端部出土	270				赤褐色	5mm前後の白色の小石及び白色の粗砂・微砂粒を多く含む	々	口縁部に波状文
第53図2	2	須恵器大甕(口縁部破片)	10~15前庭	376				外面:暗灰色、内面:灰色	黒色の微砂粒を若干多く含むが、全体に精良	々	口縁部に波状文
第53図3	2	須恵器小壺	16墓道⑥墓道理土中	74		123		外面:暗灰色、内面:赤灰色	白色の微砂粒を若干多く含む	若干焼成温度低い(瓦質と須恵質の中間)	数値は復元推定
第53図4	2	須恵器平瓶	16墓道⑭			137		青灰色~淡灰色	1mm以下の白色微砂を多く含む	良好(須恵質)	
第53図5	2	須恵器高杯	16墓道	99				青灰色	白色・黒色の微砂粒を若干多く含む	々	
第53図6	2	須恵器高杯	16墓道⑧			122		青灰色~黄灰色	白色の微砂粒を若干多く含む	々	
第53図7	2	須恵器短頸壺	16墓道	124	198	213		青灰色~淡黃灰色	白色の微砂粒を若干含むが全体に精良	若干焼成温度低い(瓦質と須恵質の中間)	
第53図8	2	須恵器広口壺	16墓道⑯	142	159	186		暗灰色~青灰色(断面は暗赤灰色)	微砂粒を若干含むが全体に精良	良好(須恵質)	
第53図9	2	須恵器杯蓋	16墓道⑯	116	30			淡灰色~青灰色(内面)	白色・黒色の微砂粒を若干多く含む	々	ヘラ切り後ナデ
第53図10	2	須恵器杯蓋	16墓道⑥	111	31			青灰色	微砂粒を若干含むが全体に精良	々	回転ヘラ切り未調整
第53図11	2	須恵器杯身	16墓道理土中	103	31	129		青灰色	雲母微砂粒多い	々	回転ヘラ切り後粗いナデ
第53図12	2	須恵器杯身	16墓道③	126	45	146		青灰色	1~3mm大の白色粗砂若干と微砂粒を多く含む	良好(若干焼成温度低い)	回転ヘラケズリ
第54図1	2	須恵器壺	16墓道⑪	245				淡青灰色	1~2mm大の白色砂粒を多く含む	良好(須恵質)	口径は推定
第54図2	2	須恵器提瓶	16墓道理土中		215	175		暗青灰色	0.5mm前後の白色粒をやや多く含む	やや焼成温度低い	内面に同心円文、外面に平行タタキ痕跡あり
第54図3	2	須恵器提瓶	16墓道①	57	170	142		暗灰色~淡灰色	微砂粒を多量に含む	良好(須恵質)	
第54図4	2	須恵器杯身	16-C玄室内	84	38			青灰色~淡灰色	微砂粒を多く含む	々	静止ヘラケズリ 楕円形(いわゆる耳杯形)数値は中間値
第54図5	2	須恵器杯蓋	16-C玄室内	103	30			外面:暗赤灰色、内面:暗灰色	0.1~2mm程の白色砂粒を多く含む	やや焼成温度低い(瓦質と須恵質の中間)	回転ヘラ切り後回転ナデ
第54図6	2	須恵器杯身	16-C玄室内	92	28	110		淡青灰色	黒色の砂粒(1~2mm大、及び微砂)多いが、全体に精良	良好(須恵質)	回転ヘラ切り後粗いナデ
第55図	2	須恵器提瓶破片	10~15前庭					外面:赤灰色、内面:灰色	微砂多し	々	「夫」ヘラ書きあり

第3章 田川市経塚横穴墓の出土人骨について

金宰賢^{*1}・古賀英也^{*2}・田中良之^{*1}

*1 九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座

*2 九州大学医学部解剖学第二講座

第1節 はじめに

田川市経塚横穴墓群第1支群および第2支群の横穴墓から人骨が出土した。調査を担当した田川市教育委員会文化課から九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座に人骨の調査依頼があり、金・田中が現地で調査・取り上げを行った。その後人骨を九州大学へと搬入し、基層構造講座において整理・分析を行った。なお、1体に骨折の例が認められたため、古賀がX線撮影を行い、鑑別した。

人骨が出土した横穴墓は96年度に調査された第1支群の1・6a・6b横穴墓と97年度調査の第2支群5・7a・9横穴墓の6基である。以下に、これらの整理・分析結果を報告する。なお人骨は現在、九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

第2節 人骨所見

(1) 1-1 横穴墓

【出土状態】

人骨は墓室の中央に大部分が位置している。しかしやや奥壁側にも一部の下肢骨があり、玄門付近からも遺物と共に頭蓋骨片が認められた。このように、遺存する人骨は、全体の位置関係も乱れており、四肢骨の関節状態も乱れていることから、軟部組織が腐朽した段階で片付けられたものと考えられる。したがって、最終被葬者の確認は不可能である。しかし中央の下肢骨と奥壁よりの下肢骨は両方共に左大腿骨であることから、被葬者は2個体以上と推定される。また、玄門付近に位置する骨片は頭蓋骨片のみであり、墓室中央に頭蓋骨を除く大部分の骨が認められることと、両者が位置的にも近いことから、これらは同一個体と考えられる。

【保存状態】

玄門付近に位置する頭蓋骨は左右頭頂骨、右乳様突起と左内耳孔を含む側頭骨、後頭骨片が認められる。側頭骨乳様突起と後頭骨外後頭隆起は発達している。また、頭蓋主縫合は、矢状縫合の内板が完全に閉鎖し、ラムタ縫合の内板閉鎖も進行中である。

墓室中央の人骨は左右筋突起が残存する下顎骨片、上肢は左右上腕骨・左右尺骨の近位端、左橈骨の遠位端が認められ、下肢は右寛骨片・左右大腿骨・左右脛骨・左腓骨が認められる。寛骨大坐骨切痕角は小さい。また、上腕骨三角筋粗面と大腿骨粗線が発達している。

奥壁よりの人骨は、左大腿骨骨体と右脛骨近位である。大腿骨は骨体中央周が77mmと小さく、

粗線の発達も弱い。

遊離歯も検出されたが、残存歯式は以下の通りである。

／	○	M ₁	○	○	×	○	○
	C	P ₁	P ₂	×	×	×	×
	●	●	●				

(例) ○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 ／欠損 △歯根のみ ●遊離歯 () 未萌出
以下、同様

歯の咬耗度は柄原の3°である。

【性別・年齢】

玄門部～墓質中央の個体は、頭蓋骨の乳様突起と外後頭隆起が発達していることから、男性と判定される。また、矢状縫合の内板は完全に閉鎖し、ラムタ縫合の内板閉鎖も進行中であることから、熟年以上と推定される。

墓室中央の人骨は、寛骨大坐骨切痕角が小さいこと、三角筋粗面と大腿骨粗線が発達していることから、男性と判定される。年齢は歯の咬耗度が3°であり、大臼歯が歯槽閉鎖をみせることから熟年後半～老年と推定される。

奥壁よりに位置する人骨は、大腿骨粗線の発達が弱いことから、女性の可能性が高い。年齢は、骨質からみて成人と考えられるが、それ以上の推定はできない。

以上から、玄門付近の頭蓋骨と墓室中央の四肢骨は、出土状態と共に男性であり、熟年以上的高齢であるという性別観を考えると、同一個体という推定に無理はないと考えられる。これらを1号人骨とする。奥壁よりの人骨は成人女性の可能性が高く、これを2号人骨とする。したがって、1-1横穴墓の残存人骨は2個体であり、1号人骨は熟年～老年の男性、2号人骨は成人女性と推定される。

【特記事項】

1号人骨の右大腿骨骨幹部に変形治癒骨折が認められた。肉眼的所見では、骨折は骨幹部の略中央あたりに発生したもので、直達外力による横骨折である。骨折部は大きく転位・隔離しており、骨治癒は認められないが仮骨形成(6×8cm)吸収はよく進行し、変形を残して治癒したものである。骨折部の表面は粗且つ不整で大小の穴が数個認められる。また、レントゲン所見も肉眼的所見に一致する。

(2) 1-6a 横穴墓

【出土状態】

人骨は細片化し、いくつかの群にまとめられた状態で出土した。これらは頭蓋骨片の大部分が玄門部付近に、下顎骨と肩甲骨片が中央部、下肢骨片が奥壁よりに認められる、明らかに片付けられた状態をなす。

【保存状態】

頭蓋骨は上顎骨片・前頭骨片・左右頭頂骨片・後頭骨片・左右側頭骨片・下顎骨体が遺存する。歯は左上顎第2大臼歯1本と小白歯がみられた。残存歯式は以下の通りである。

$\times\circ\circ$	$/\circ\circ\circ$	M^2
$\triangle \times \circ \circ \circ \circ \circ /$	$/ / \circ \circ \circ$	

歯の咬耗度は柄原の3°である。

上肢は肩甲骨片・左上腕骨体・前腕骨片が、下肢は右寛骨と大腿骨片・脛骨片が認められる。

【性別・年齢】

性別は、眉弓と乳様突起が発達し、寛骨大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は、矢状縫合の内板閉鎖が完了していること、歯の咬耗度が3°であり、大臼歯の脱落と歯槽閉鎖がみられることから、熟年後半から老年と推定される。

(3) 1-6b 横穴墓

【出土状態】

墓室の中央に人骨が残存するものの、頭蓋骨とはなれて下顎骨片と上腕骨片が位置している。まったく関節状態を想定できないものであり、軟部組織腐朽後に片付けられたものと考えられる。

【保存状態】

頭蓋骨を除く人骨の保存状態は不良である。頭蓋骨も右半のみ完全である。眉弓および側頭骨乳様突起の発達は弱い。下顎骨は左右筋突起のみ遺存する。上顎骨に植立した歯牙および遊離歯が一部遺存している。これらの歯式は以下の通りである。

$M^3 M^2 M^1 P^2 P^1 C I^2 /$	$/ I^2 C$	$M^1 M^2$
M_2	$I^2 C P_1$	$M_1 M_2$
●	● ● ●	● ●

歯の咬耗度は柄原の2° bである。

四肢骨は左上腕骨の遠位端と左尺骨の近位端が認められる。その他、椎骨片が一部残存する。

【性別・年齢】

性別は眉弓と乳様突起・外後頭隆起の発達が弱いことから女性の可能性が高い。年齢は歯の咬耗度が2° bであることから熟年と推定される。

【計測的性質】

頭蓋骨の計測値を表1に示す。頭長高示数は70.3で中頭、上顎示数(V)は67.3で低顎、眼窩示数78.6は中眼窩、鼻示数54.5は広鼻にそれぞれ属している。

(4) 2-5 横穴墓

【出土状態】

墓室中央から骨片1点が認められる。

【保存状態】

寛骨の坐骨部と月状面を含む部位が残存する。

【性別・年齢】

残存する人骨が成人のものと想定されるが正確な性別・年齢は不明である。

(5) 2-7a 横穴墓

【出土状態】

人骨は、奥壁近くに頭蓋骨片と大腿骨片、ほぼ中央に頭蓋骨片と大腿骨片が認められた。これらは、その配置からみて本来の位置関係を示しておらず、片付けられたものと想定される。しかし、残存する部位が少ないため埋葬順位および最終被葬者の推定は困難である。

また、遺存する大腿骨は粗線の発達が違うことから別個体と考えられるため、墓室中央のものを1号人骨、奥壁よりのものを2号人骨とする。

【保存状態】

1号人骨：ラムタ縫合を含む後頭骨片、右上腕骨遠位端の後面、左大腿骨の近位端が遺存する。頭蓋主縫合はラムタ縫合の閉鎖が始まっている。大腿骨は粗線が発達する。

2号人骨：後頭骨片と右大腿骨の近位端が残存する。後頭骨の外後頭隆起、大腿骨粗線とも発達は弱い。

【性別・年齢】

1号人骨：大腿骨粗線が発達していることから性別は男性の可能性が高い。年齢はラムタ縫合の内板閉鎖が始まっていることから、成年以降であると推定される。

2号人骨：外後頭骨隆起と大腿骨粗線の発達が弱いことから女性の可能性が高い。年齢は推定可能な部位が残存しないため不明である。

(6) 2-9 横穴墓

【出土状態】

墓室のほぼ中央から人骨が出土した。人骨は関節状態や本来の位置関係を保持していないことから、片付けられた可能性が考えられる。しかし、墓室内部は盗掘を受けていたため、出土状態の正確な推定は困難である。

【保存状態】

遺存状態は比較的良好であるが、部位の重複がないこと、遺存した部位がすべて同性であると考えられることから、同一個体と推定される。頭蓋骨は下顎骨のみ認められる。残存歯式は下記の通りである。

$\times M_2 \times P_2 P_1 C I_2 \circ$	\mid	$\circ\circ/\circ\circ/\times$
---	--------	--------------------------------

歯の咬耗度は柄原の $2^{\circ}b$ である。

上肢は右上腕骨、右橈骨の近位端、左尺骨の遠位端が認められる。下肢は左大腿骨の骨体および内側顆、右脛骨片が残存する。

【性別・年齢】

性別は、上腕骨三角筋粗面と大腿骨粗線が発達していることから、男性と判定される。年齢は歯牙咬耗度が $2^{\circ}b$ であることから熟年と推定される。

【特記事項】

下顎にはカリエスによる歯槽閉鎖が認められる。

第3節 考 察

経塚横穴墓群からは6基の横穴墓で計8個体の人骨が出土した。このうち、複数個体が確認されたのは1-1横穴墓と2-7a横穴墓であり、その他は単体であった。複数埋葬例の被葬者構成は2例とも男女であり、単体埋葬例では1-6a横穴墓が男性、6b横穴墓が女性であり、2-9横穴墓が熟年男性と、男女ともに例がみられた。しかし、いずれも保存状態が悪いため、本来の被葬者構成を表すかどうかは定かではないと考えられる。ただ、いずれも人骨の位置関係が本来のものではなく、軟部組織腐朽後に再び開口して人骨の位置関係を乱したことを示唆している。このような行為は、6世紀後半頃から顕著になるものであり、葬送儀礼における最終段階の行為であると考えられているが（田中・村上1994；田中1995）、本遺跡の事例もそのような葬送儀礼によるものであると考えられる。

1-1横穴墓1号人骨（老年男性）からは右大腿骨から骨折による治癒痕が認められた。肉眼所見およびレントゲン所見から直達外力による骨折と鑑別されるが、大腿骨にはほぼ水平に外力が加わって折れた骨が、重複しやや回転しながらも、その状態のままで仮骨形成して安定したものである。その状態は、やや右足が短くなったものの、歩行自体は可能であったようである。また、本人骨が治癒後老年にまで達していることからみても、生活自体を困難にするほどの大きな支障がなかったことをうかがわせる。

次に、1-6b横穴墓の熟年女性は頭蓋骨の計測が一部可能であった。比較群とともに第5表に示しているが、脳頭蓋は前後に長くて低い傾向があり、頭長高示数は西北九州弥生人に近い。顔面は、中顎幅が比較的狭い割には上顎高が低く、結果的に上顎示数は47.8（K）と67.3（V）となり、北九州古墳人の値に近くなっている。眼窩は、幅がやや狭い割りに高さが低いために、南九州古墳人と近い低い眼窩となっている。鼻は、鼻高が低いために、鼻示数は南九州と北九州の中間の値をとる。したがって、全体的には頭が低めで、やや小作りな顔面、眼窓は低めで、やや鼻が広い女性であったということができよう。しかし、この1体を比較群の平均値と比較しても、個体のおおよそのイメージが得られるのみであり、筑豊地方における古墳時代人の形質を明らかにするにはさらに事例を加える必要があり、今後に期したい。

最後に、本人骨の調査にあたりご配慮いただいた田川市石炭資料館田代健二氏をはじめ関係各位に感謝申し上げたい。

参考文献

- 熊谷正哉, 1958 : 山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の骨病変に就いて. 人類学研究, 5卷 1-4号別刷.
- 神中正一, 1990 : 神中整形外科学 (第21版).
- 鈴木隆雄, 1998 : 骨から見た日本人
- 永井昌文, 1985 : 北部九州・山口地方—国家成立前後の日本人. 季刊人類学, 16-3
- 中橋孝博・永井昌文, 1989 : 弥生人の形質. 弥生文化の研究1 雄山閣
- 原田忠昭, 1954 : 現代西南日本人頭骨の人類学的研究. 人類学研究, 1
- 田中良之・村上久和, 1994 : 墓室内飲食物供献と死の認定. 九州文化史研究所紀要, 39.
- 田中良之, 1995 : 古墳時代親族構造の研究. 柏書房, 東京
- 柄原 博, 1957 : 日本人歯牙咬耗に関する研究. 熊本医学雑誌, 31-4
- 福島一彦, 1988 : 西南日本弥生人の骨病変について. 福岡医学雑誌, 79-2
- Martin,R.1922 : Lehrbuch der Anthropologie II.
- 山本浩, 1967 : 骨のレ線写真の読み方 (第3版)

第5表 頭蓋骨計測値 (女性)

	経塚	北九州(古墳)		南九州(古墳)		北部九州(弥生)		西北九州(弥生)		西南日本(現代)		
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	
1	頭蓋最大長	182	37	175.6	6	176.7	86	177.0	15	178.1	42	172.8
17	Ba-Br 高	128	30	139.6	7	131.0	66	130.7	7	127.3	42	131.5
17/1	頭長高示数	70.3	27	74.2	4	73.9	62	74.1	7	71.2	42	76.2
45	頬骨弓幅	(138)	27	131.2	2	131.5	61	131.3	6	130.2	42	124.3
46	中顎幅	(98)	31	100.4	8	99.5	67	99.8	11	95.9	42	93.6
48	上顎高	66	33	67.7	12	61.0	66	70.1	12	60.9	48	68.6
48/45	上顎示数(K)	(47.8)	23	51.7	2	47.5	49	53.7	6	47.6	40	55.1
48/46	上顎示数(V)	(67.3)	27	67.7	7	60.8	57	70.2	11	63.5	40	73.2
51	眼窩幅(右)	42	31	41.3	14	40.7	66	41.6	10	41.1	42	40.7
52	眼窩高(右)	33	34	33.9	14	32.0	65	34.1	10	31.2	42	34.0
52/51	眼窩示数(右)	78.6	31	82.2	14	78.7	62	82.0	10	75.9	42	83.7
54	鼻幅	(24)	32	25.9	12	26.4	72	26.6	12	26.6	42	25.2
55	鼻高	44	32	48.5	14	46.7	71	49.8	12	46.3	42	48.7
54/55	鼻示数	54.5	30	53.8	12	56.5	69	53.5	12	57.4	42	51.9

第4章 経塚3号墳の調査

第1節 はじめに

3号墳は、経塚横穴墓群・古墳群が所在する尾根の最も南に位置しており、3号墳から北西に延びる尾根上に1・2号墳が列状に構築されている。丘陵の標高は約50mで、田川市上伊田・伊加利、大任町今任原の彦山川流域一帯を一望できる。3号墳の南側・西側は旧地形のままであったが、東・北東側は、学校建設の際に斜面が削られている。

第2節 遺構

1. 墳丘（第61～63図）

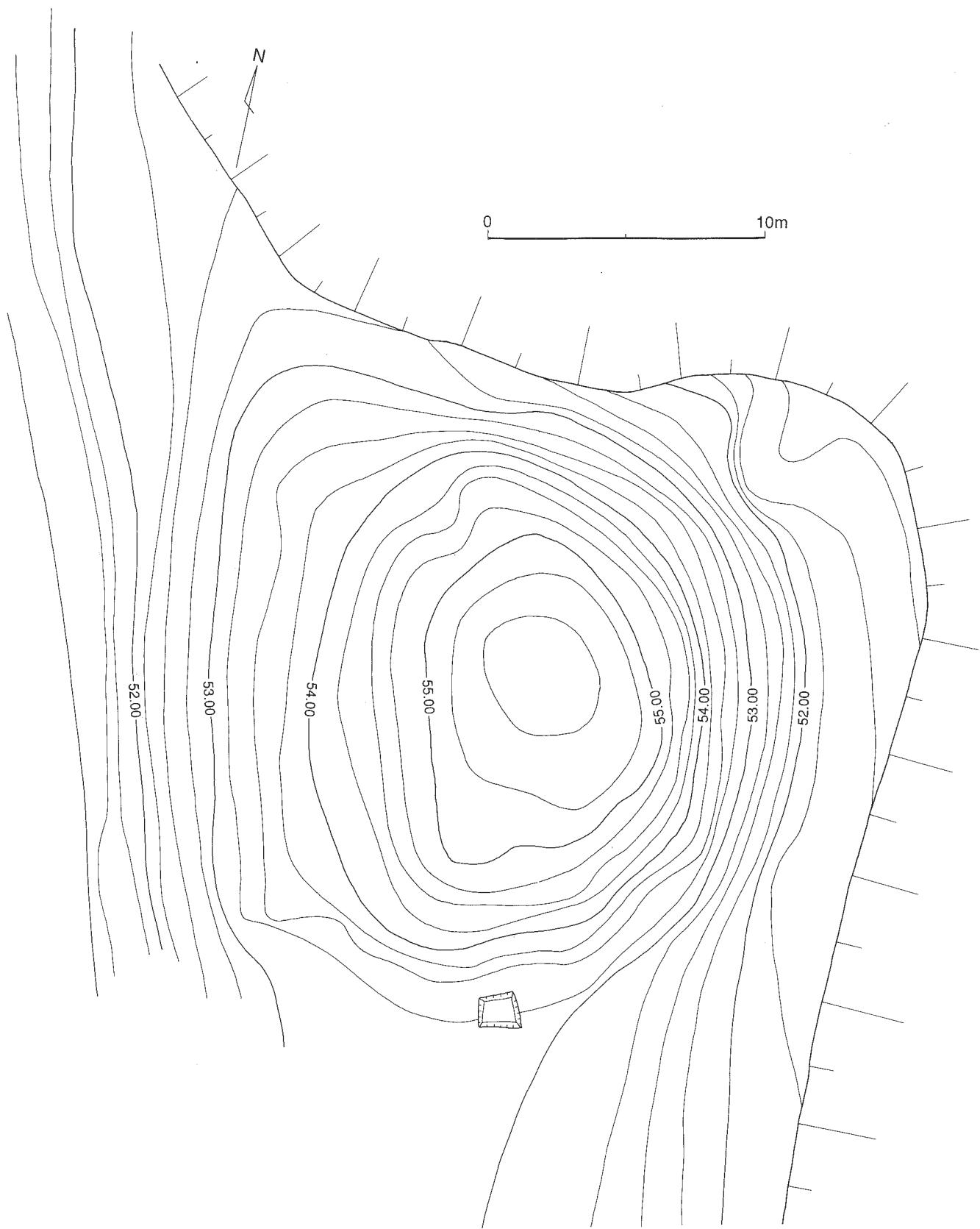
墳丘は、地山を若干整形した上に盛土をして構築されている。周溝はなく、葺石・埴輪列もみられなかった。墳丘東側部分では、明確な墳端部を確認できたが、西側部分は丘陵斜面との境界が明確でなかった。盛土の割合は多く、墳丘断面をみると、最も厚い部分では2m以上の盛土が行われている。盛土は、主体部の位置する付近にまず山盛りに土を盛り上げ、その後周囲に互層に盛土を行っている状況が観察できた。東側部分では、墳端部と墳頂の比高をみると、東側が約4mあるのに対し、北東側が約3m、南側が約2.7mとかなりの差がある。また、東側部分では粘質の薄い盛土を数多く積み重ねており、丁寧に構築されているが、西側の盛土は雑な印象を受ける。平面形をみても、東～北東部分の墳端は整った円弧を描くのに対し、西側の墳端は扁円形を呈している。盛土の流失による変形を考慮する必要もあるが、これらを併せて考えると英彦山川平野部から直接見える東側部分を重点的に整形した意図がうかがえる。

2. 主体部

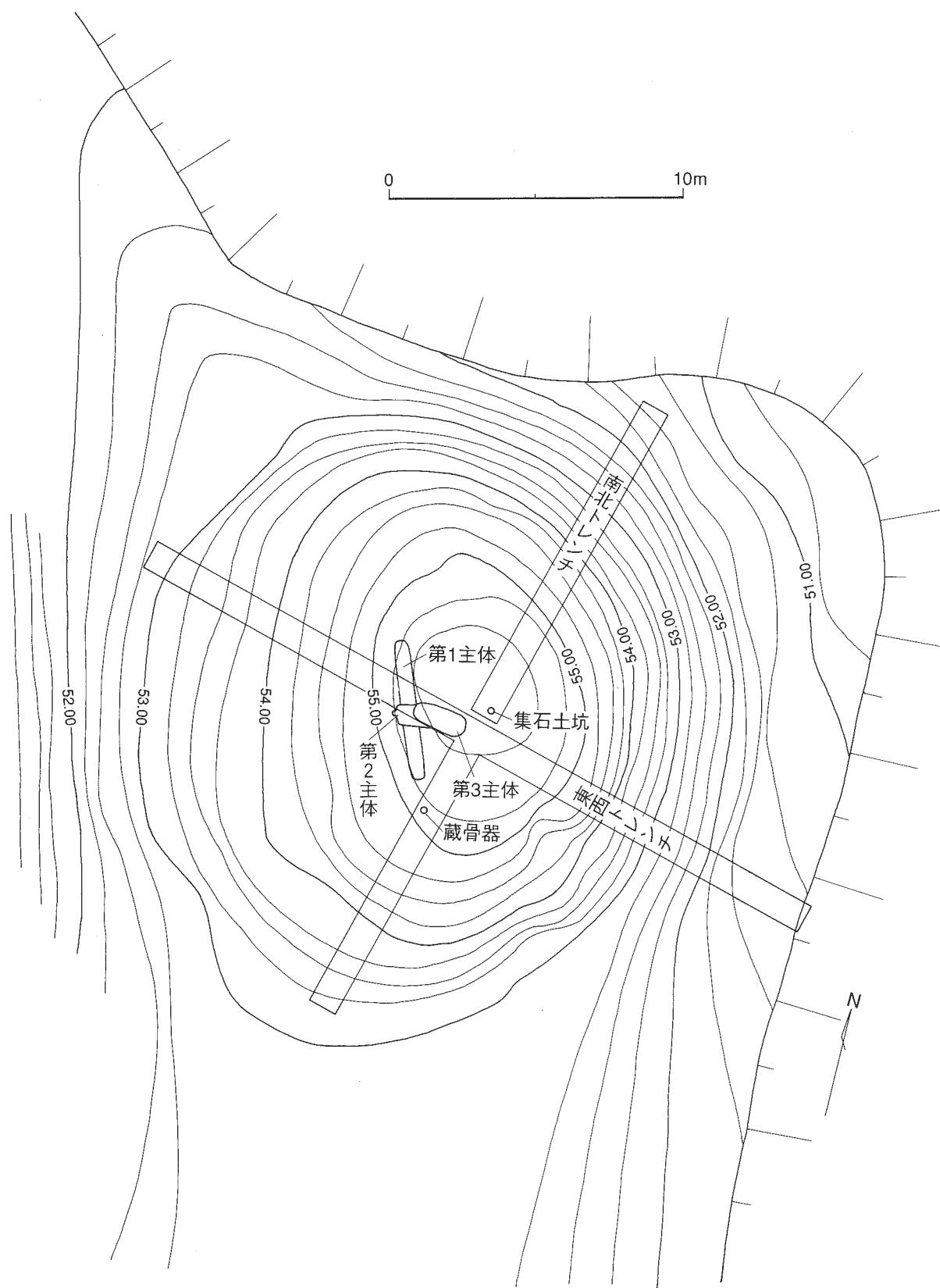
墳頂平坦面のやや西よりの部分で粘土櫛（第1主体）1基と土壙墓2基（第2・第3主体部）を検出した。切り合いから第1主体→第2主体→第3主体の順に構築されたことがわかる。

第1主体（第64図）

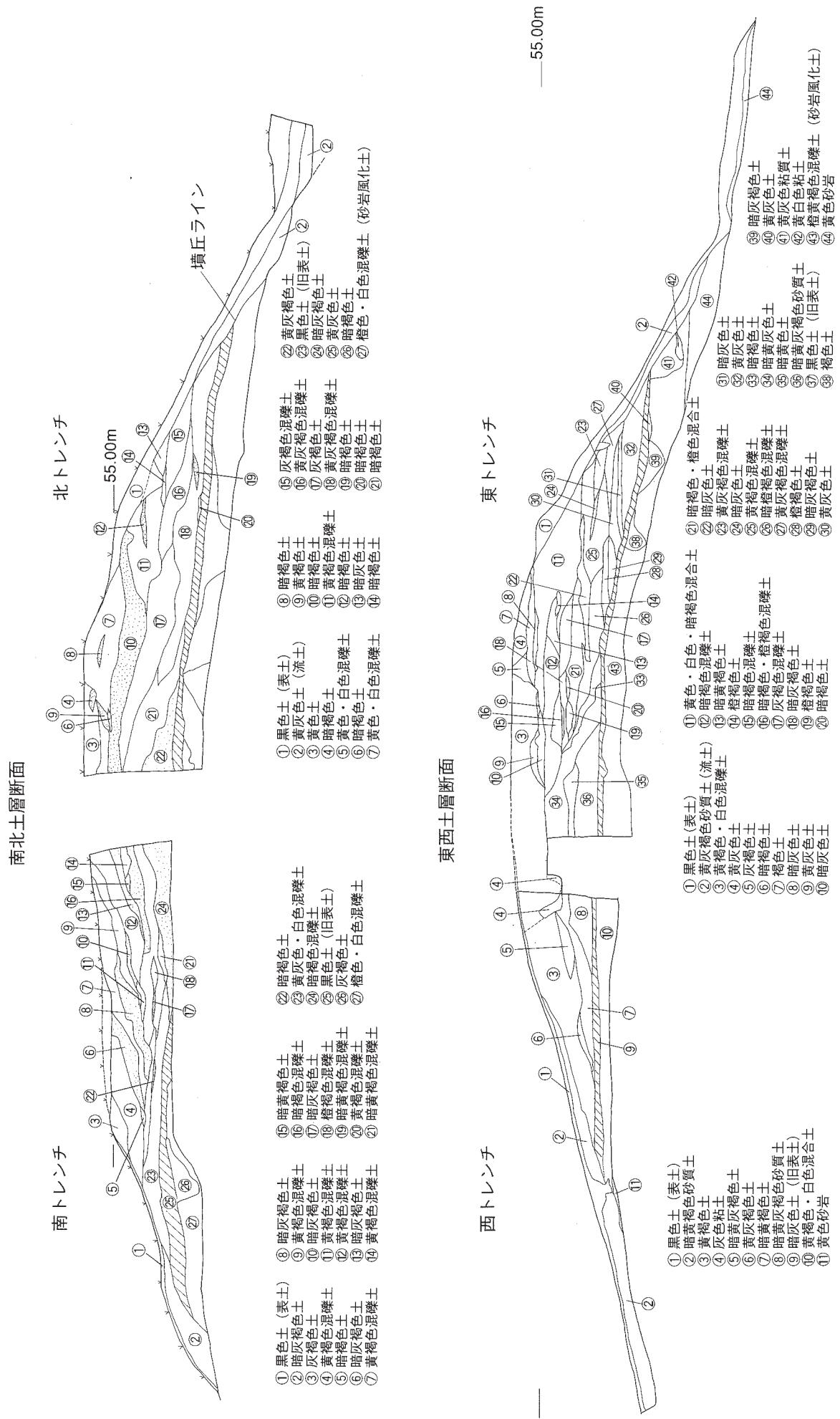
中央部を第2主体に切られており、最も先行する主体部である。長さ450cm、南側の幅93cm、北側の幅87cmの粘土櫛である。棺は遺存していなかったが、粘土櫛の内法が木棺の大きさを表していると考えると、最大長388cm、南側幅68cm、北側幅52cmとなる。南側の棺幅が広いことと、遺物の出土位置からみて、南側が頭位方向であったと思われる。棺床部は緩やかに湾曲している。木棺は、アールの大きさと、北側の端部に側板の出っ張りと思われる粘土の窪みがあることからみて、割竹形木棺ではなく、組合せ木棺を使用したものと考えられる。また、床面には細かい凹凸があり、樹皮のついたままの材を使用していたと推定される。棺側部分の粘土はかなり厚みがあるが、棺床粘土及び被覆粘土は薄く、部分的に粘土のとぎれた箇所がある。被覆粘土と棺床粘土間の木棺部分と思われる部分全面で赤色顔料（註1）を検出した。木棺の



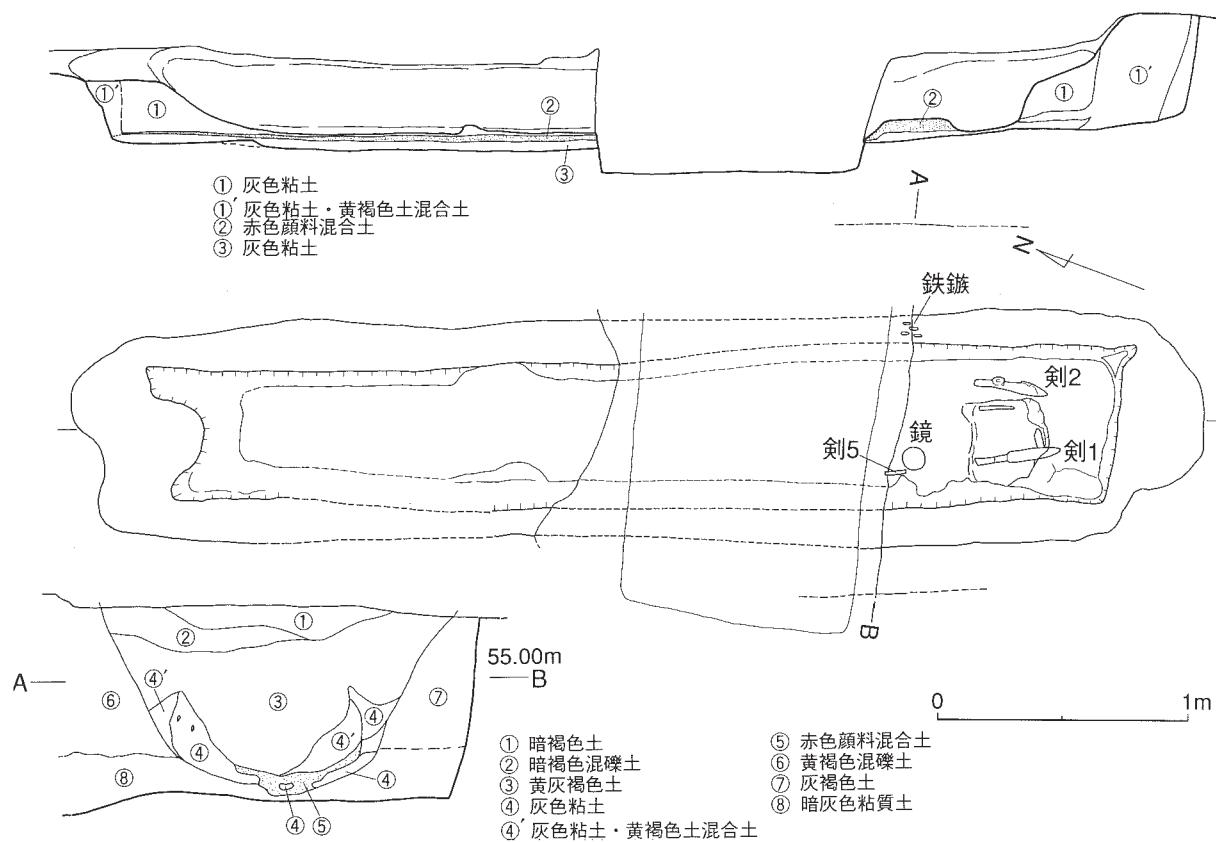
第61図 経塚3号墳平面図〔調査前〕(S = 1 / 200)



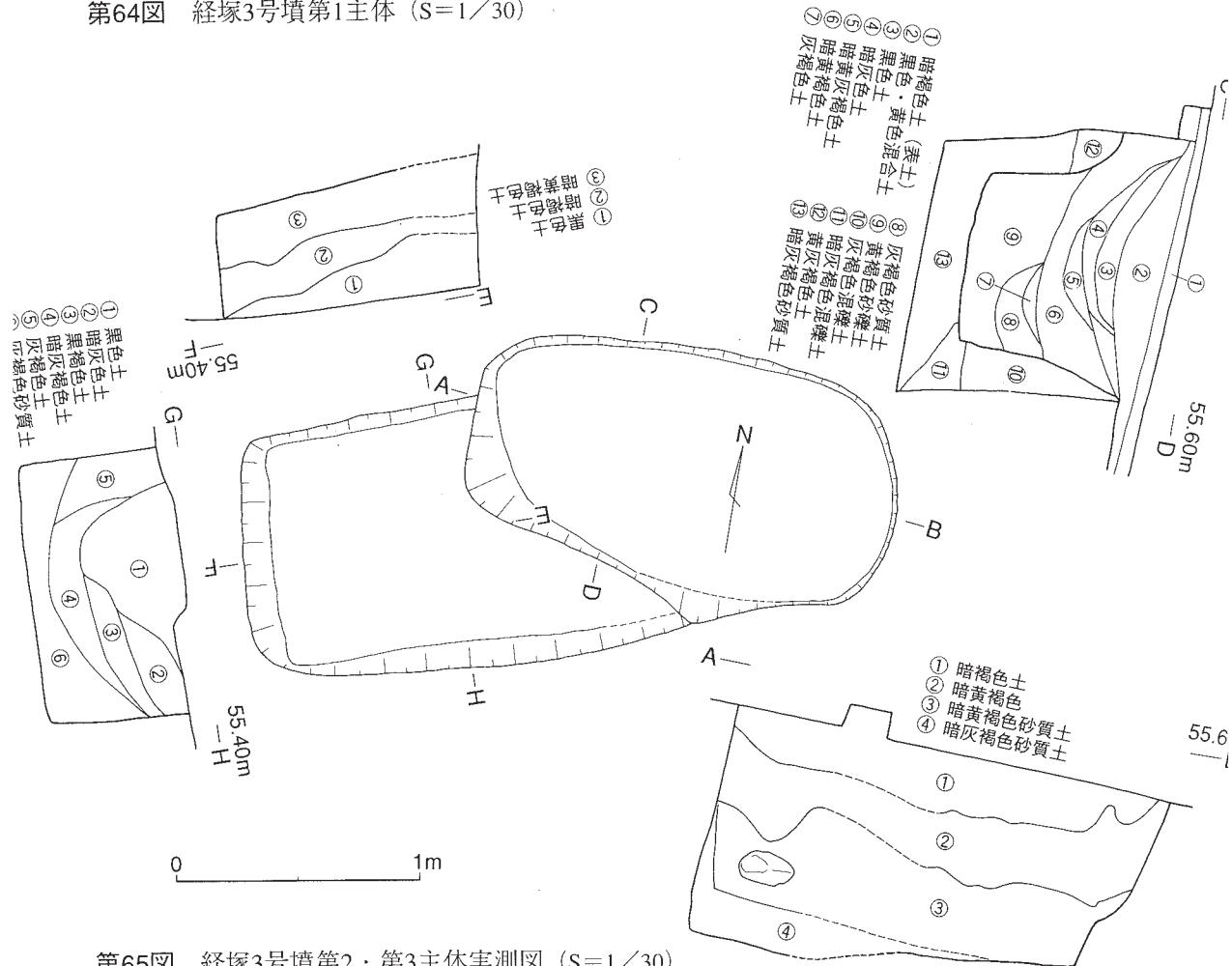
第62図 経塚3号墳平面図〔調査後〕(S = 1/200)



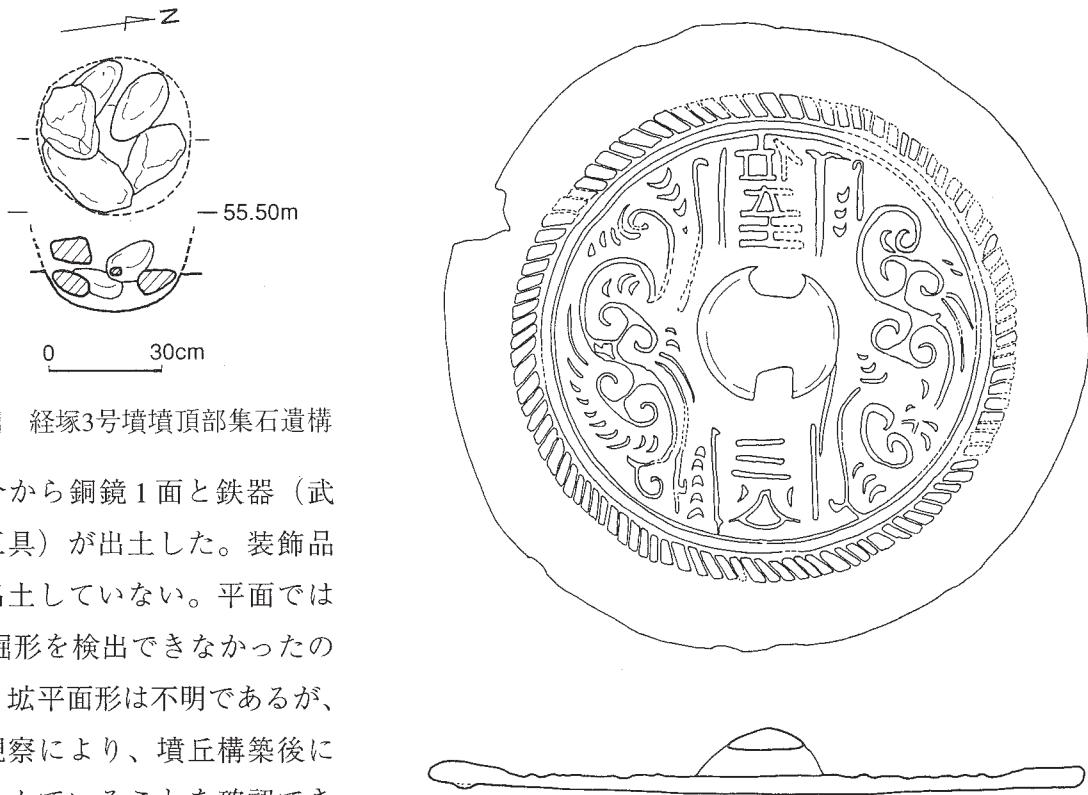
第63図 経塚3号墳墳丘土層断面図 ($S=1/100$)



第64図 経塚3号墳第1主体 (S=1/30)



第65図 経塚3号墳第2・第3主体実測図 (S=1/30)



第66図 経塚3号墳墳頂部集石遺構

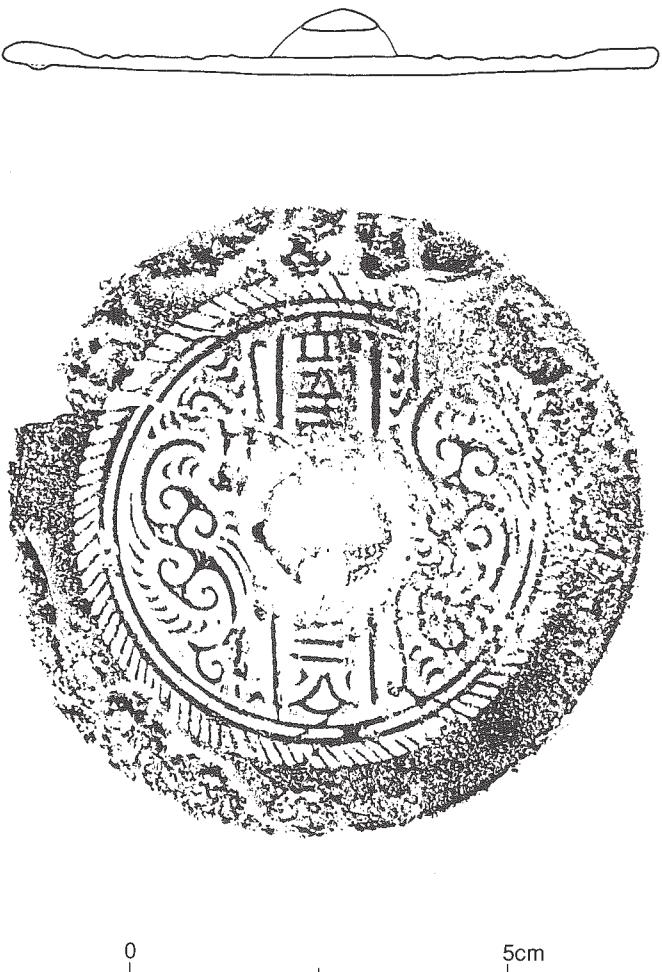
南部分から銅鏡1面と鉄器（武器・工具）が出土した。装飾品類は出土していない。平面では墓塚掘形を検出できなかったので、墓塚平面形は不明であるが、断面観察により、墳丘構築後に掘り込んでいることを確認できた。掘形は上方に広がる形で、墓塚底面に直接粘土を敷き粘土櫛を構築している。墓塚掘形の断面形や、棺床・被覆の粘土が薄いことからみて、かなり簡略化された形態である。

第2主体（第65図）

東側部分を第3主体に切られているので全長はわからない。残存部の最大幅は111cmで、検出面から底面までの深さは63cmである。素掘りの土壙墓で、木棺痕跡はみられなかった。遺物は出土していない。

第3主体（第65図）

第2主体を切って構築されており、長さ178cm、東側幅97cm、西側幅83cm、検出面からの深さ100cmである。幅の差からみて、



第67図 経塚3号墳第1主体出土銅鏡（S=1/1）

東側が頭位方向であろう。遺物は出土していない。

集石土坑（第66図）

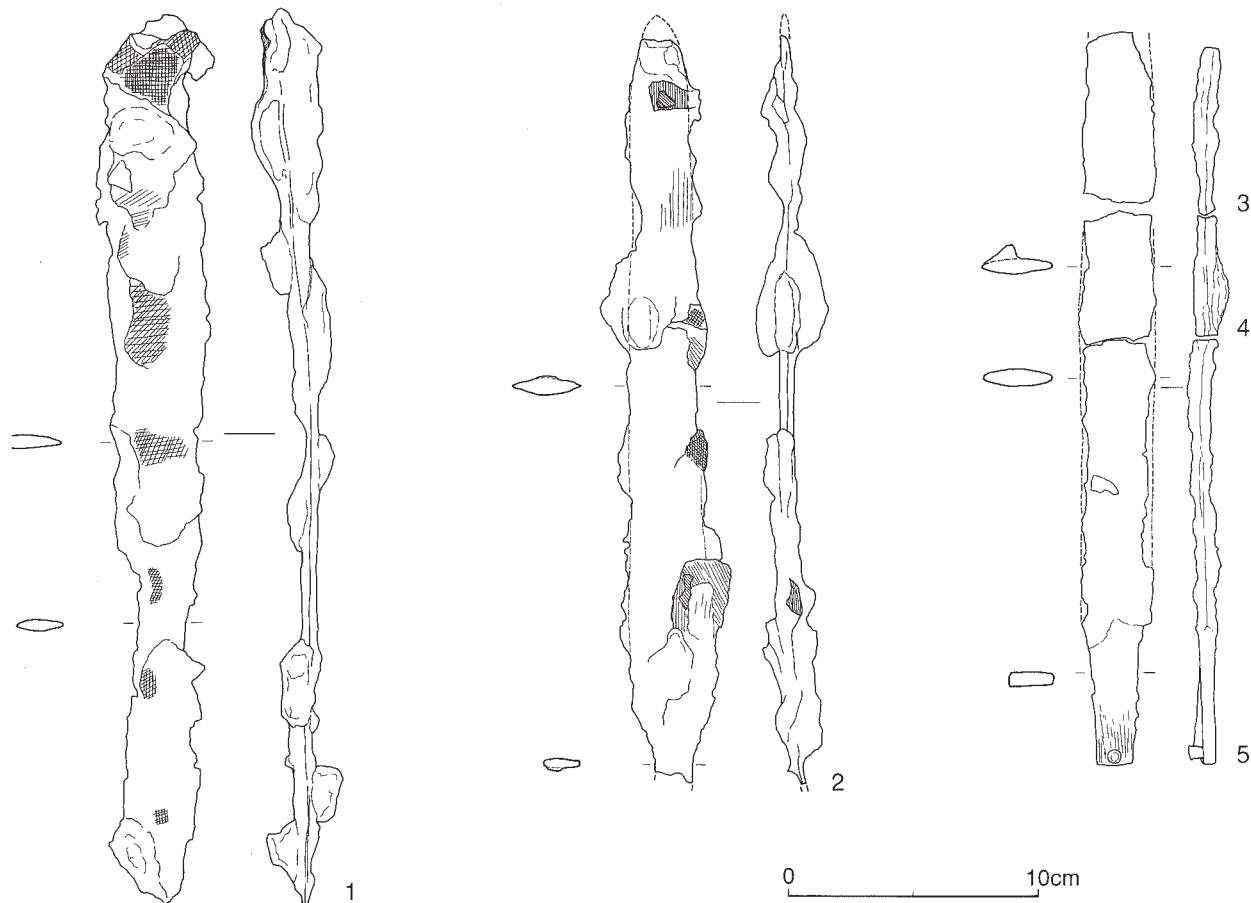
墳頂やや東よりの地点で検出した。古墳に伴うかどうかは不明。経塚火葬墓等遺構の一部である可能性が考えられる。

第3節 遺 物

1. 経塚3号墳出土遺物

銅鏡（第67図）

径85mmの銅鏡で、直行銘文双夔（鳳）鏡の一種である（註2）。背面中央に縦方向の「位至三公」銘文があるが、左右逆字である。銘文から「位至三公鏡」とも呼ばれる。銘文の左右の内区には夔（鳳）文を配し、外区には斜行櫛歯文をめぐらせている。縁部は平縁である。中華人民共和国湖北省房県城関鎮二龍岡2号漢墓出土鏡と銘文字体、夔（鳳）文全体の文様構成等が良く似ている（註3）。この鏡式は後漢晩期に盛行したものとされており、オリジナルであるならば古墳時代出土鏡としては古式に属するものであるが、銘文が左右逆字であることからみて、い



第68図 経塚3号墳第1主体（粘土櫛）主土鉄剣（S=1/3）

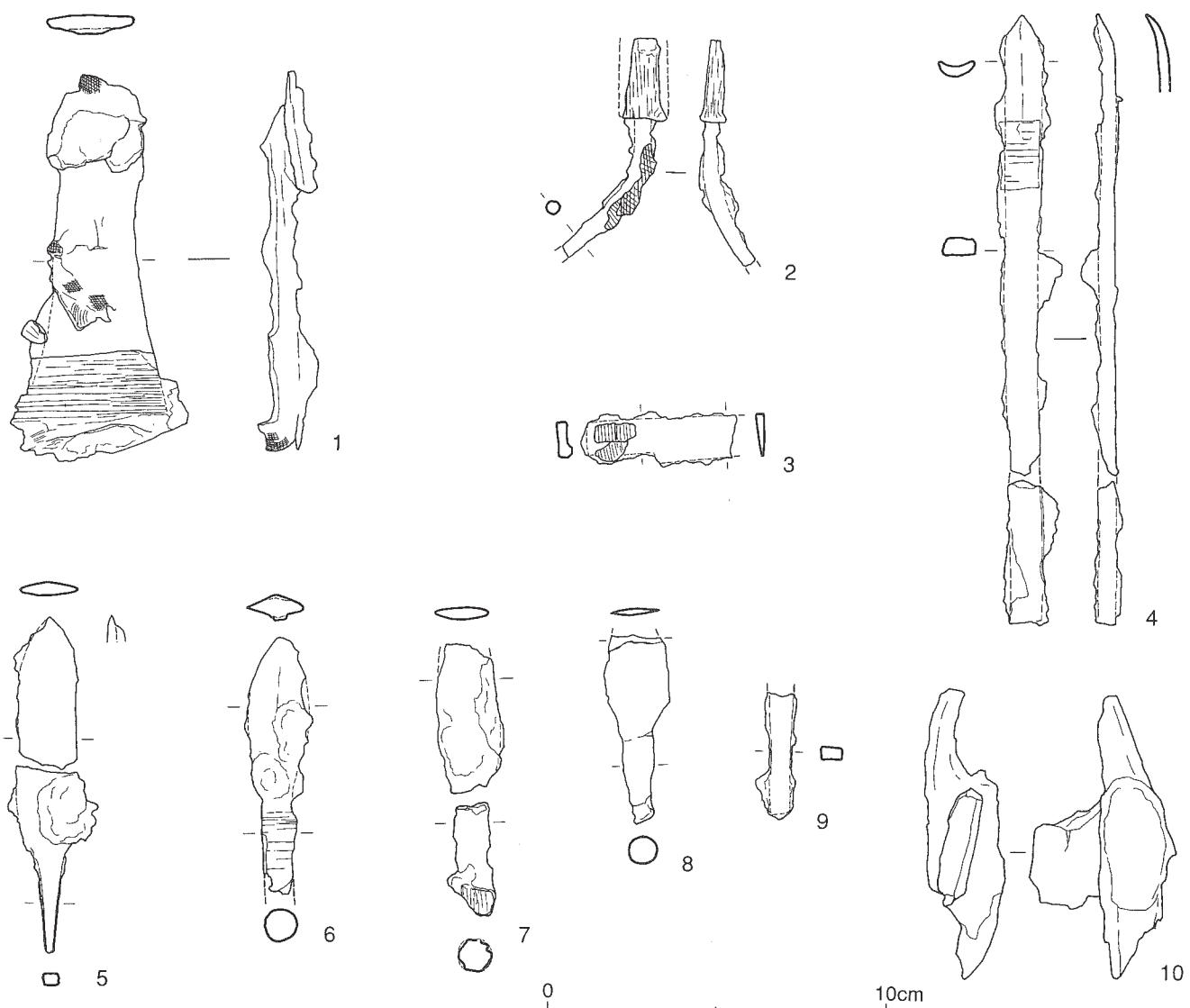
わゆる倣古鏡の可能性も考えられる。

鉄劍（第68図）

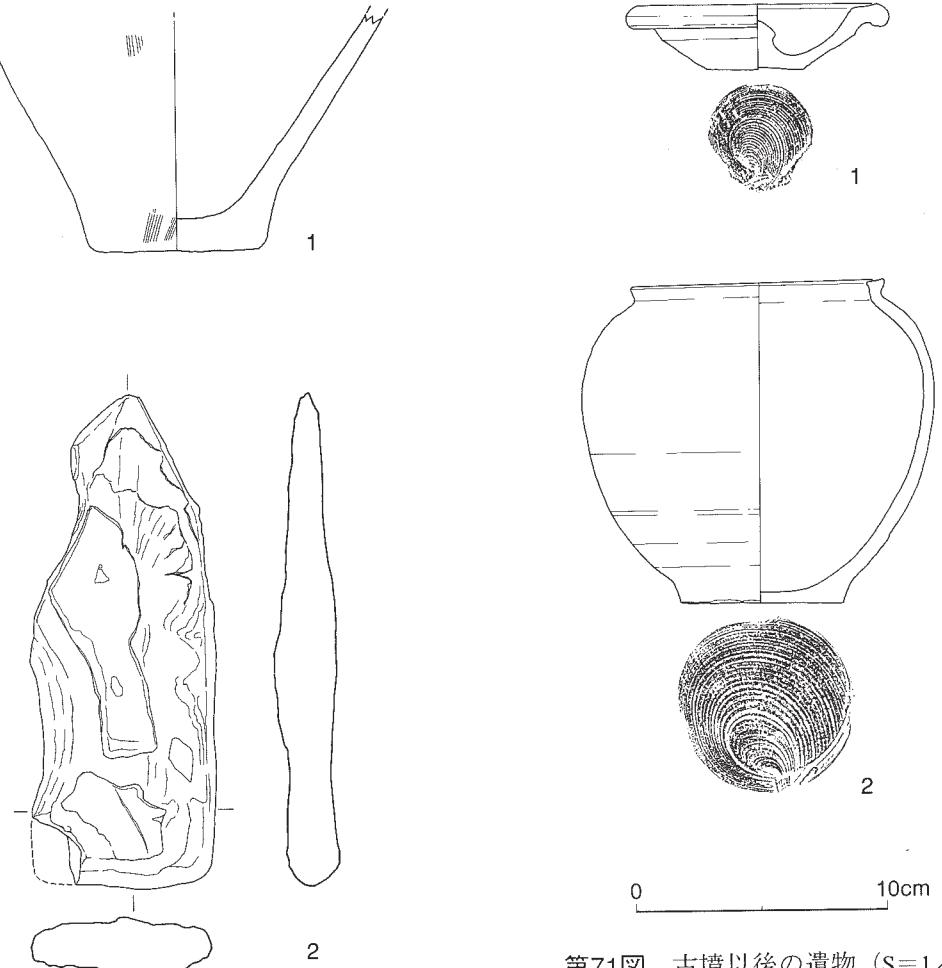
1・2・5は、粘土櫛南側部分で、被覆粘土と棺床粘土上面間の赤色顔料面から出土しており、棺内に副葬されたものである。3・4は2号主体の掘り下げ中に出土し、正確な位置は不明であるが、幅・厚さなどからみて5と同一個体と考えている。

1は布が良く遺存しており、副葬時には全体を布で包まれていたと考えられる。木質はみられず、鞘は使用していないようである。2も、部分的に布が遺っており、やはり布で包まれていたと考えられる。

5は、銅鏡の近くから出土した。少量ではあるが、布が遺っており、これも当初は布で包まれていたものと思われる。また、茎部には柄の木質と目釘が遺っていた。



第69図 経塚3号墳出土鐵器等 (S=1/2)



第71図 古墳以後の遺物 (S=1/3)

0 10cm

第70図 古墳以前の遺物 (S=1/3)

鉄鎌 (第69図5~9)

これらの鉄鎌は、棺側の粘土中から出土しており、棺外の副葬品である。6は断面菱形で鎧があるが、その他の鎌は断面扁平である。

鉄斧 (第69図1)

小形の鉄斧と思われる。刃部に板状の木質が遺っている。基部には別の鉄片が付着しており、これをソケット状の柄に固定するためのくさびと考えると、手斧であった可能性が高い。大きさからみても手斧と考えるのが妥当だろう。これも部分的に布が遺っており、副葬時には布で包まれていたと考えられる。

錐 (第69図2)

断面円形の鉄の棒に木の柄が付けられている。湾曲しているが、形状からみて錐と思われる。これも副葬時には布で包まれていたと考えられる。

刀子（第69図3）

小形の刀子と思われる。これも布が遺っており、副葬時には布で包まれていたものと思われる。

ヤリガンナ（第69図4）

柄の木質はほとんど遺っていないが、刃部と茎部の境部分に紐が遺っていた。刃部裏面は窪み、表面中央に鎬がとおっている。

用途不明鉄器（第69図10）

2号主体部の掘り下げ中に出土した。側面に鉄剣の破片がくい込んでいる。（鉄剣破片は第66図5と同一個体の可能性がある）

2. 古墳に伴わない遺物

弥生式土器（第70図1）

東トレンチ墳丘直下から出土。赤褐色を呈し、内面はナデ調整、外面は縦方向のハケメ調整である。弥生時代前期後半頃の甕型土器の底部と考えられる。

打製石斧（第70図2）

東トレンチ墳丘盛土内から出土。いわゆる石鋤と思われる。刃部は摩耗して丸くなっている。緑灰色～暗緑灰色を呈し、緑色片岩系統の石材が使用されている。

蔵骨器（第71図1・2）

北トレンチの墳頂平坦部周縁の表土直下から出土。検出時には、壺内部に火葬骨が残存しており、その上に蓋が落ち込んでいた。淡橙黄色を呈し、焼成温度は低く、瓦質である。底部が糸切りであることからみて古代末～中世頃の遺物であろう。

第4節 小 結

中心主体（第1主体）出土の直行銘文双夔（鳳）文鏡（位至三公鏡）は、漢代後期に盛行した鏡式で、古墳出土のものとしては古式に属する。ただし、鏡は伝世の期間を考慮する必要があるので、他の遺物をみてみると、鉄鎌は頸部がなく身に直接茎部が付く形式であり、鉄斧も板状鉄斧の系統と考えられること、及び剣のみで大刀を持たないことなど、鉄器の組成にも新しい様相はみられない。ただし、粘土櫛自体はかなり簡略化した形態と考えられるので、両者を勘案すれば、4世紀後半～5世紀前半頃の時期が考えられる。

なお、墳丘盛土内及び墳丘直下から古墳時代以前の遺物が出土したので、3号墳の調査終了後重機により盛土を除去し、地山面で遺構検出を行ったが、明確な遺構は検出できなかった。

註

註1 本田光子氏のご教示によると、朱と丹の双方が見られることがある。

註2 鏡式の判定の際に吉原瀧雄氏からご教示を得た。記して謝意を表したい。

註3 孔祥星・劉一曼著、高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎訳『中国古代銅鏡史』1991

参考文献

新納 泉「2副葬品の種類と扁年 1武器」『古墳時代の研究 8古墳II副葬品』1991
小林行雄「鉄鎌」『図解 考古学辞典』1974

第4節　まとめ

1. 横穴墓群について

今回の発掘調査で、横穴35墓（小横穴含む）を確認した。出土した須恵器からみれば横穴墓群の継続年代は、小田富士雄氏の須恵器編年のⅢB期からⅥ期頃までと考えられる。この中では、Ⅳ期からⅤ期の須恵器が最も多く、大部分の横穴墓がこの時期に含まれるようである。なお、今回調査した横穴墓の中で、明確な墳丘を確認できたものはない。

第1支群と第2支群間の空閑地は、岩質からみれば横穴墓を構築可能であり、意識的に両支群を区画することを目的として設けていたものと考えられる。第2支群は、第1支群とほぼ同じ面積に、倍近い数の横穴墓が構築されており、また、第2支群では複室構造のものや、内部に筋状の装飾を施すものなどがみられるが、第1支群にはそのような横穴墓はみられないことなど、両支群の間には、明確な違いがみられる。残念ながら大部分の横穴墓が盗掘を受けていることから、副葬品の違いなどは明確ではないが、支群間に格差のあったことは言えるだろう。

両支群とも、さらにその中にいくつかの小群を析出できる。これらの小群は、墓室のレベルや横穴墓の形態、墓道の大きさなどで多様なあり方を示している。特に第2群D群（10a～14b）は最も高い位置に構築されており、複室構造のものが多いことや装飾性に富むことなどで他の支群に優越した状況がうかがえる。また、後続の横穴墓は、通常先行の横穴墓を避けて構築するのが普通であるが、2—14aは、先行の2—15を壊して構築されており、このことからもD群の優越性を見ることができる。

2. 経塚3号墳について

この古墳は、沖積地を見下ろす丘陵尾根上に築かれており、典型的な前期古墳の立地である。中心主体が粘土槨であることや副葬品からみても、古墳時代前期の小首長墓古墳と考えてよいであろう。

近隣では、田川郡方城町迫古墳（註1）、飯塚市辻古墳（註2）などが、いずれも沖積地をおろす丘陵上に占地しており、埴輪・葺石を伴わない円墳（註3）で、主体部に粘土槨を使用していることで経塚3号墳と共通している。また、迫古墳では副葬品は出土していないが、辻古墳では、鏡（盤龍鏡）と鉄製武器類（鉄刀・鉄剣・鉄鎌）が出土しており、経塚3号墳との共通性がみられる。辻古墳では鉄刀が出土しているが、内反りを呈する古式のものである。それぞれ、多少の階層差がみられるが、両者とも経塚3号墳と近い時期の小首長墓と考えてよいだろう。この地域では、粘土槨を中心主体とし、埴輪・葺石を持たない円墳という形式が、小首長墓の墳墓形式として一般化していたことがうかがえる。

註1 浜田信也 1977『迫古墳』方城町教育委員会

註2 嶋田光一 1989『辻古墳』飯塚市教育委員会

註3 辻古墳は、報告書では前方後円墳である可能性も指摘されている。

図版



北 1 号墓群



北 1 - 1 号墓玄室



北 1 - 2 号墓

図版2



北1-3号墓玄室



西側斜面（調査前）



西A-1号墓道（東から）



1. 1—5 横穴墓正面観



2. 1—5 横穴墓玄門部



3. 1—5 横穴墓玄室内



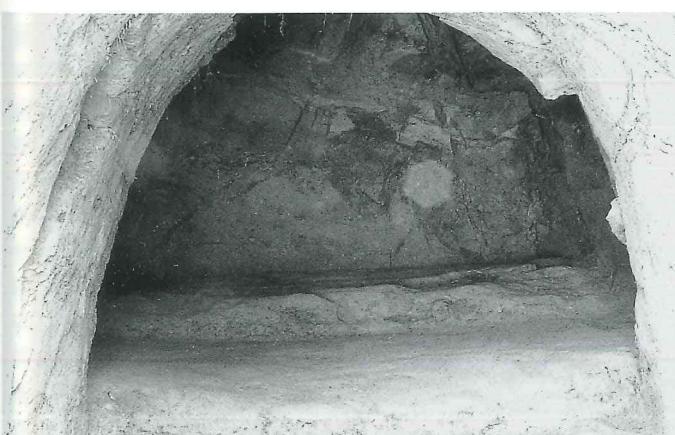
4. 1—6 a 横穴墓鉄刀出土状況



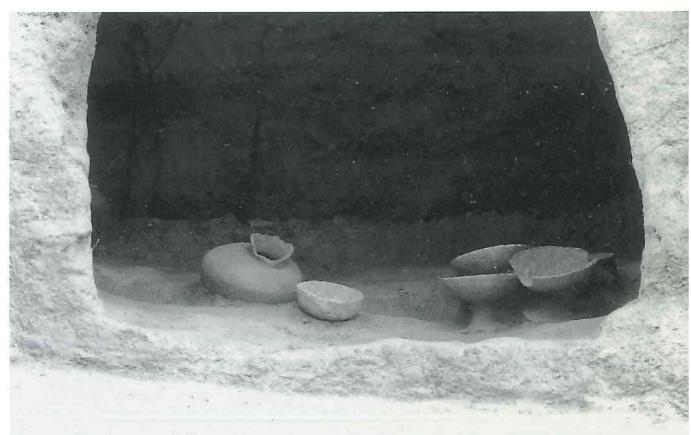
5. 1—6 a 横穴墓人骨・遺物出土状況①



6. 1—6 a 横穴墓人骨・遺物出土状況②



7. 1—6 a 横穴墓玄室内



8. 1—6 b 横穴墓遺物出土状況

図版4



1. 1—6b 横穴墓人骨・遺物出土状況



2. 1—7b 横穴墓閉塞石



4. 1—7c 横穴墓閉塞石



3. 1—7a・7b 横穴墓及び墓道



5. 1—7c 横穴墓正面観



1—7c 横穴墓玄室内遺物出土状況



7. 第2支群調査前の状況（西から）



1. 2—1 横穴墓石組及び閉塞石



2. 2—1 横穴墓正面觀



3. 2—1 横穴墓石組



4. 2—2 横穴墓正面觀



5. 2—2 横穴墓石組側面



6. 2—2 横穴墓玄室内

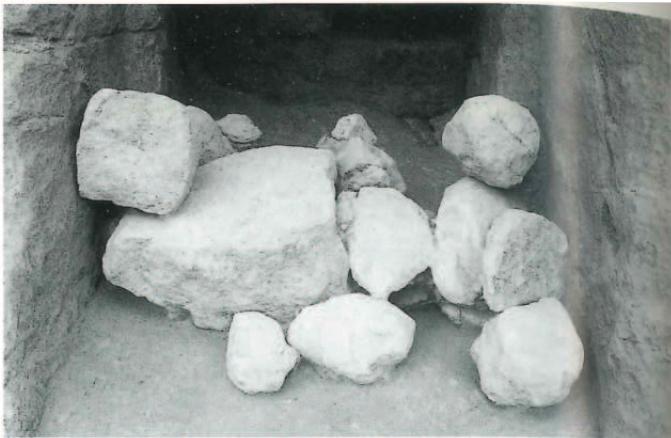


7. 2—3 横穴墓正面觀

図版6



1. 2—5 (左) • 4 (右) 横穴墓正面観



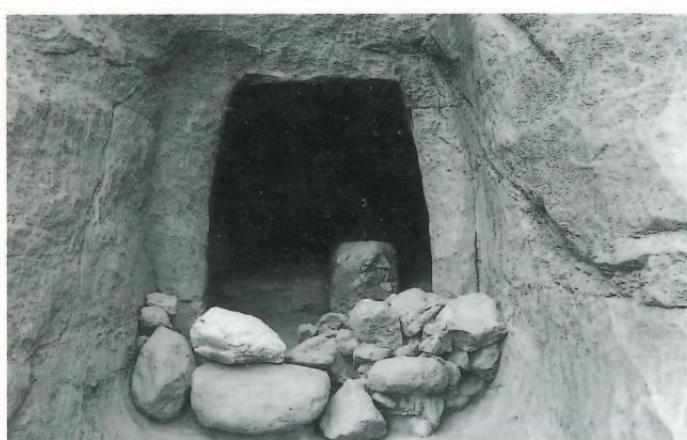
2. 2—4 横穴墓閉塞石



3. 2—4 横穴墓前室



4. 2—4 横穴墓玄室内



5. 2—5 横穴墓閉塞石



6. 2—5 横穴墓玄室内



7. 2—6a 横穴墓閉塞石



8. 2—6a 横穴墓正面観



1. 2—6a 横穴墓玄室内



2. 2—6b 横穴墓遺物出土状況



3. 2—6c 横穴墓



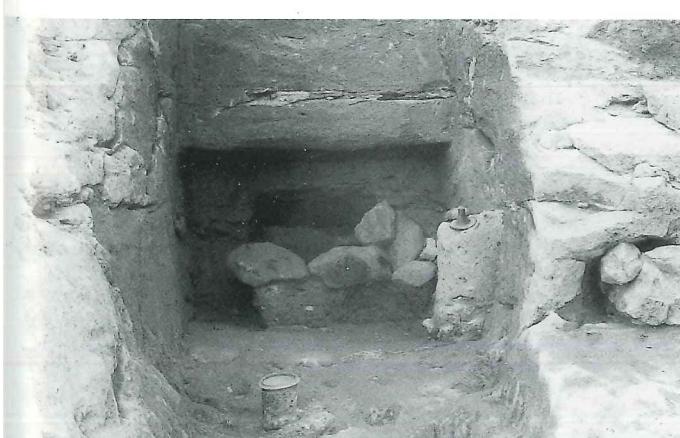
4. 2—7a 横穴墓閉塞石



5. 2—7a 横穴墓玄室内人骨出土状況



6. 2—7b 横穴墓 (?)



7. 2—8 横穴墓閉塞石及び遺物出土状況



8. 2—9 横穴墓前庭部遺物出土状況

圖版8



1. 2—9 橫穴墓閉塞石



2. 2—9 橫穴墓正面觀



3. 2—9 橫穴墓玄室內人骨出土狀況



4. 2—10a 橫穴墓正面觀



5. 2—10b 橫穴墓遺物出土狀況



6. 2—10a 橫穴墓羨道・玄門（玄室から）



7. 2—10a 橫穴墓羨道（前庭から）



1. 2—10a 横穴墓玄室内



2. 2—11 横穴墓正面觀



3. 2—11 横穴墓羨道



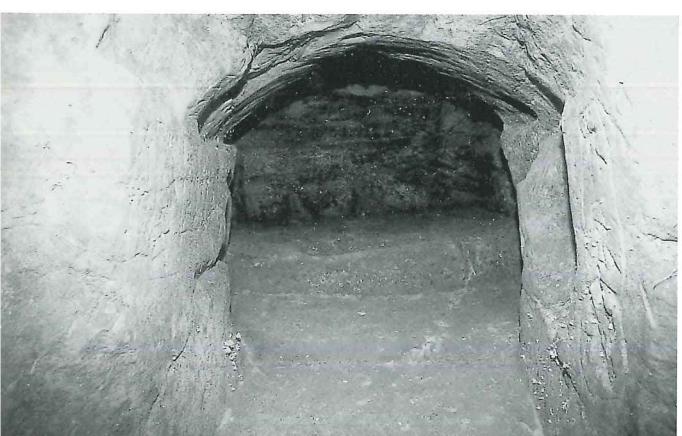
4. 2—11 横穴墓玄室内



5. 2—11 横穴墓玄門・羨道（玄室から）



6. 2—11・12 中間間前庭遺物出土状況



7. 2—12 横穴墓羨道

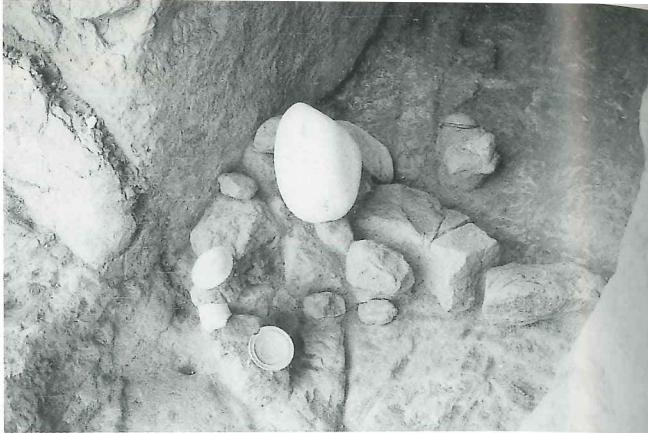


8. 2—12 横穴墓玄門（玄室から）

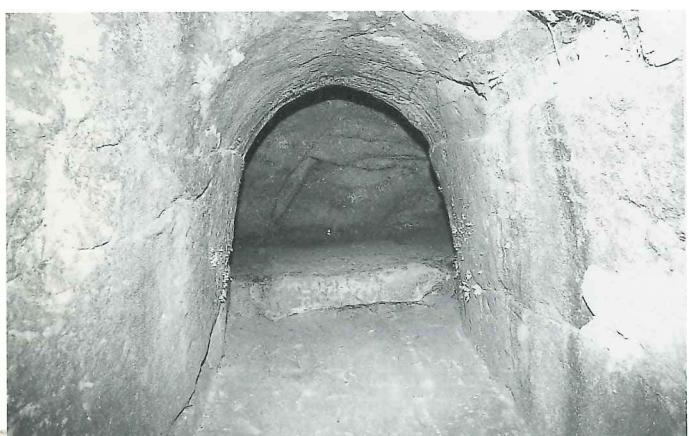
圖版10



1. 2—12 橫穴墓玄室內



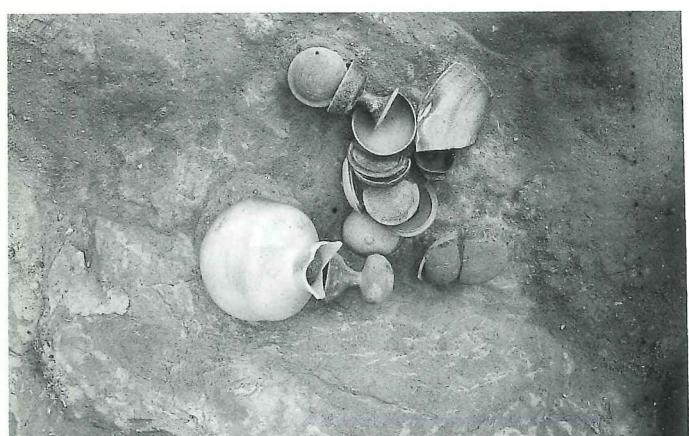
2. 2—13 橫穴墓閉塞石



3. 2—13 橫穴墓羨道



4. 2—13 橫穴墓玄室內



5. 2—13 · 14 橫穴墓中間前庭部遺物出土狀況



6. 2—14a 橫穴墓正面觀



7. 2—14a 橫穴墓前室



8. 2—14a 橫穴墓玄室內



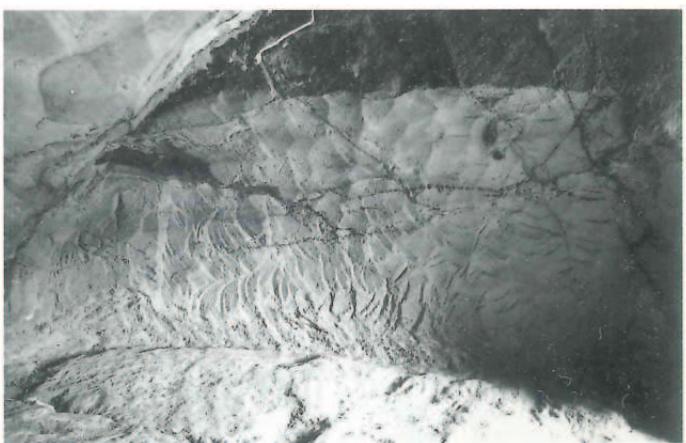
1. 2—14b 横穴墓



2. 2—15 横穴墓



3. 2—15 横穴墓正面觀



4. 2—16a 横穴墓玄室壁面工具痕



5. 2—16a 横穴墓閉塞石



6. 2—16c 横穴墓正面觀



7. 2—16c 閉塞石

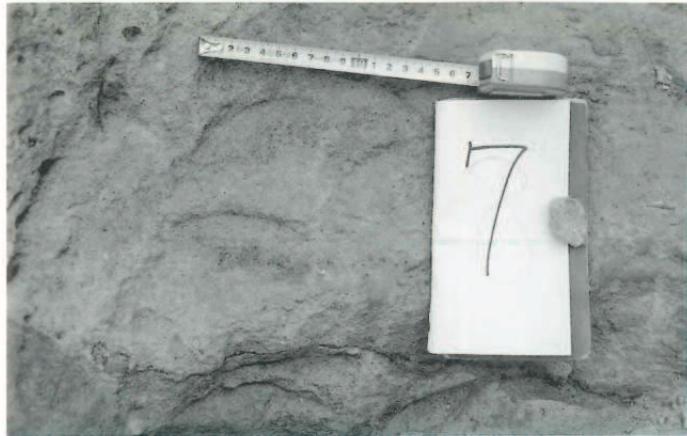
図版12



1. 第1支群調査後全景（南から）



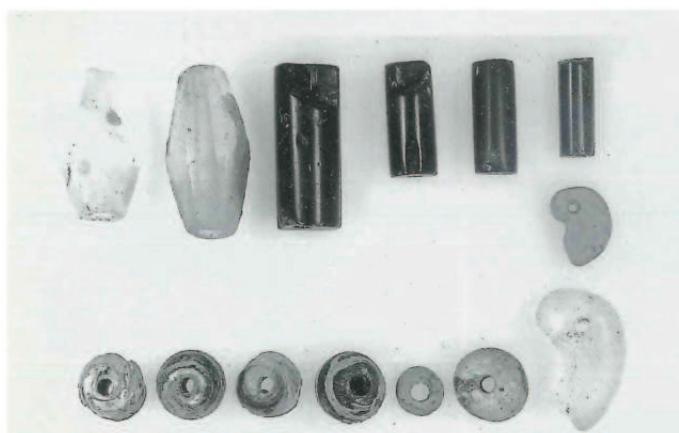
第2支群・第1支群調査後全景（西から）



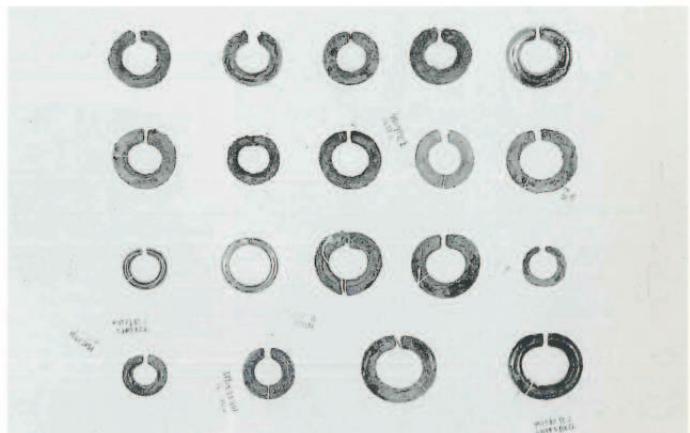
1. 2—7 横穴墓前庭部工具痕



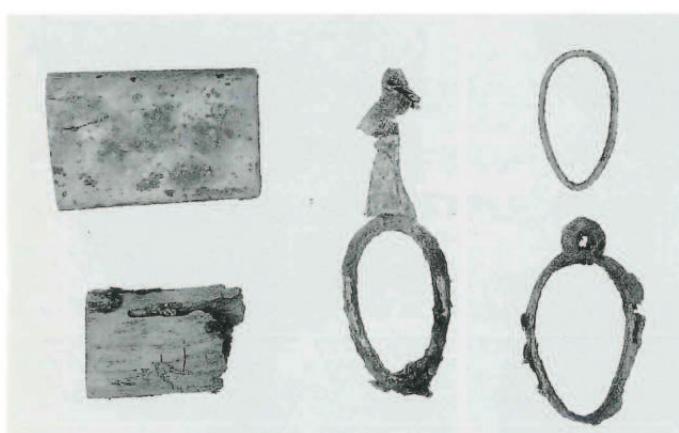
2. 2—9 横穴墓墓道工具痕



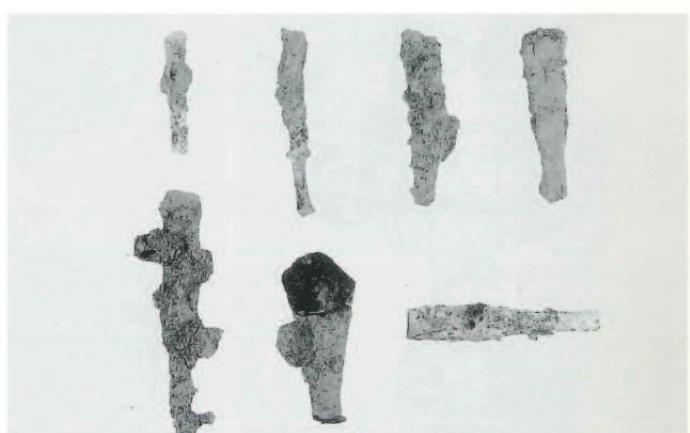
3. 経塚横穴墓群出土玉類



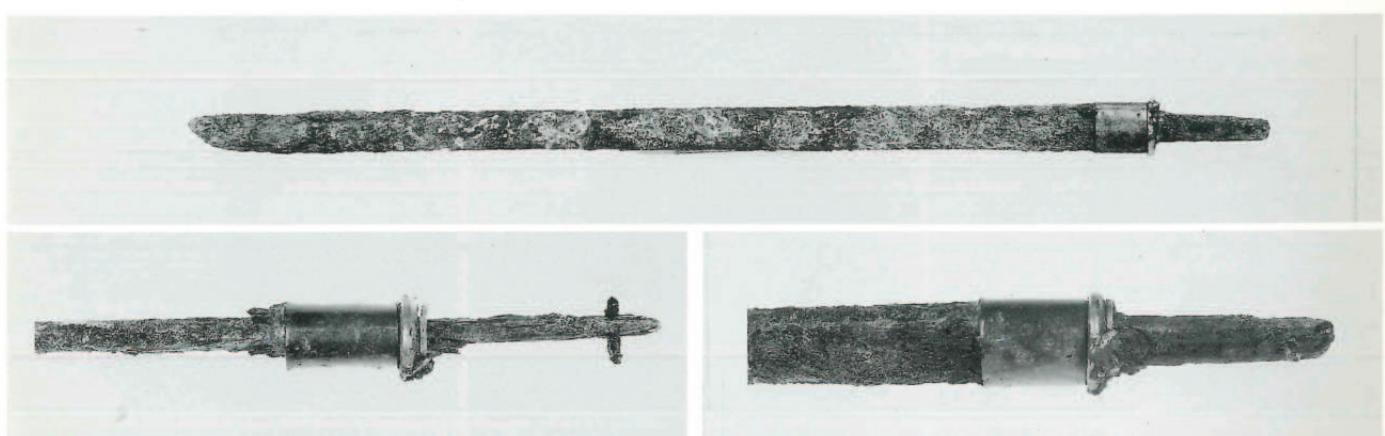
4. 経塚横穴墓群出土耳環



5. 1—6a 横穴墓出土鉄刀金具類及び柄部残片

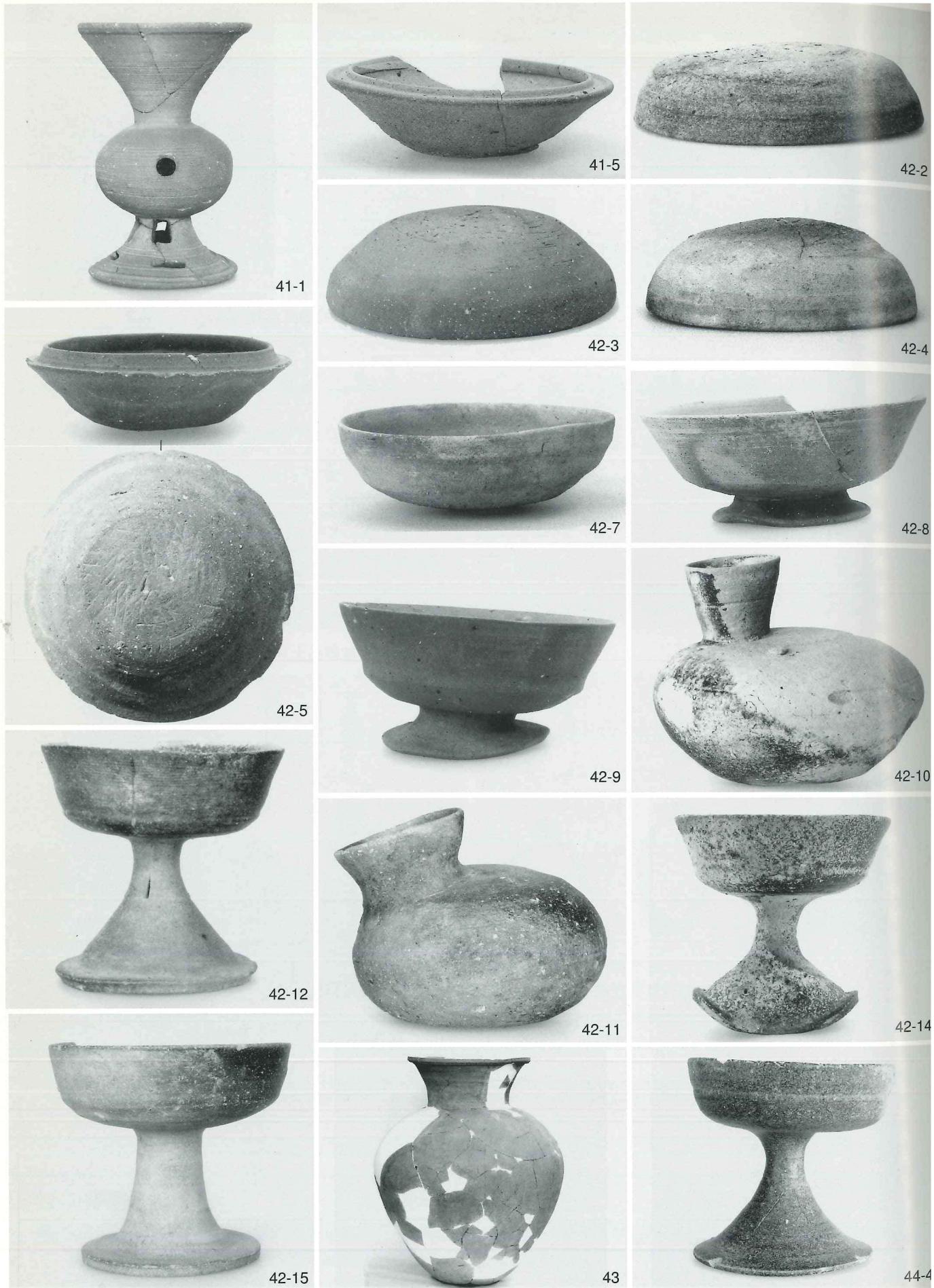


6. 経塚横穴墓群出土鉄器

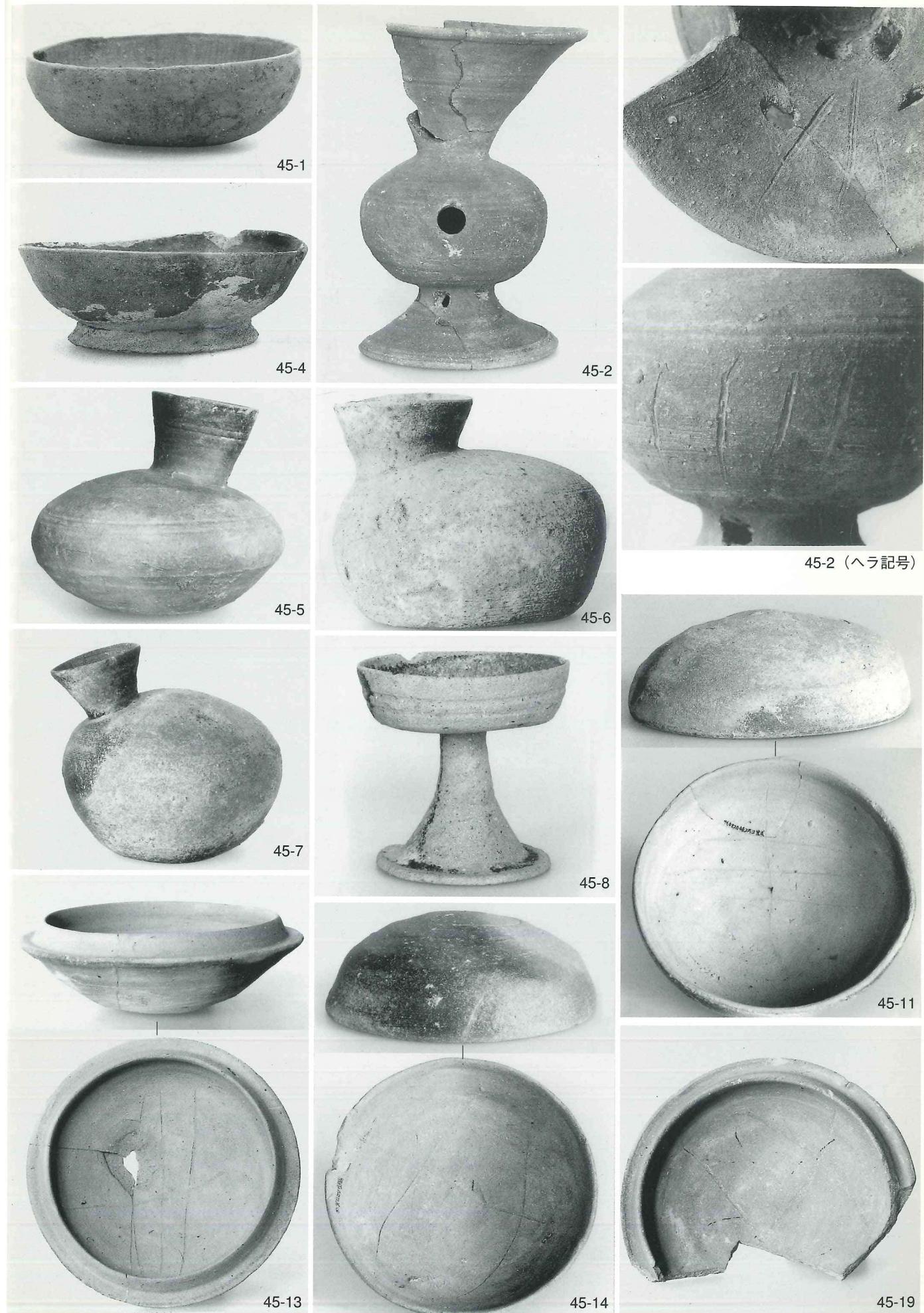


7. 1—6a 横穴墓出土鉄刀

圖版14

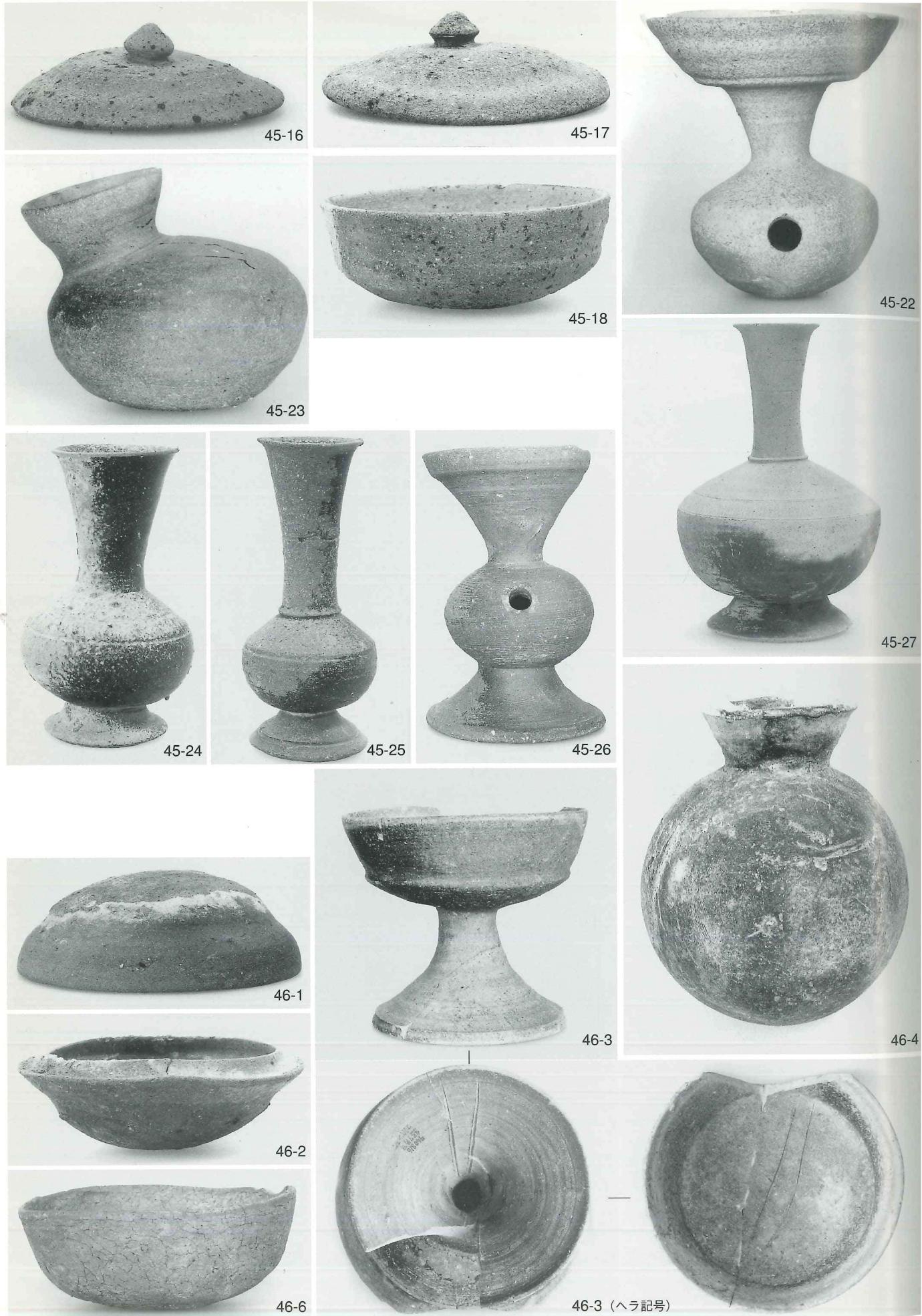


経塚横穴墓群出土土器①



経塚横穴墓群出土土器②

図版16



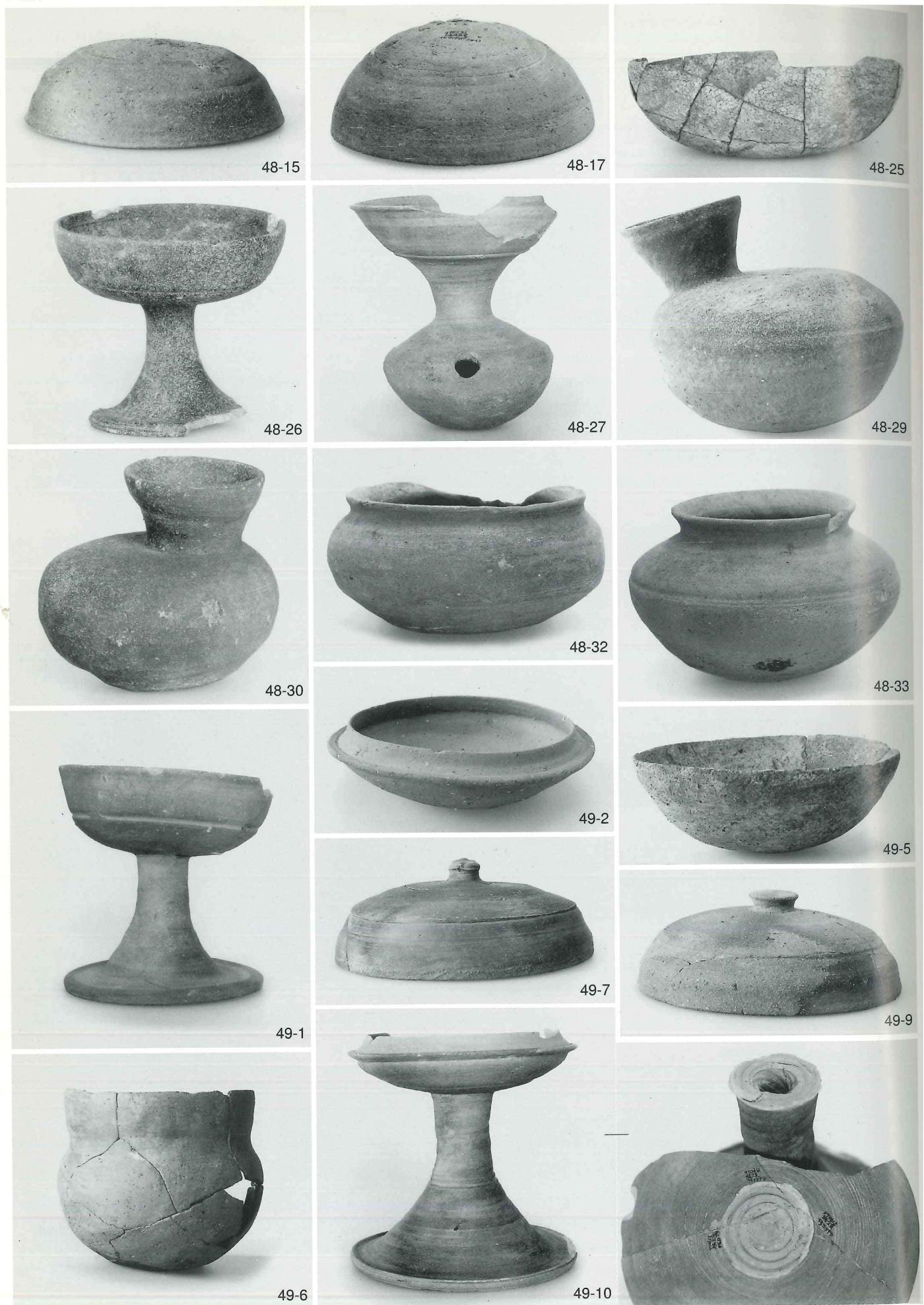
経塚横穴墓群出土土器③



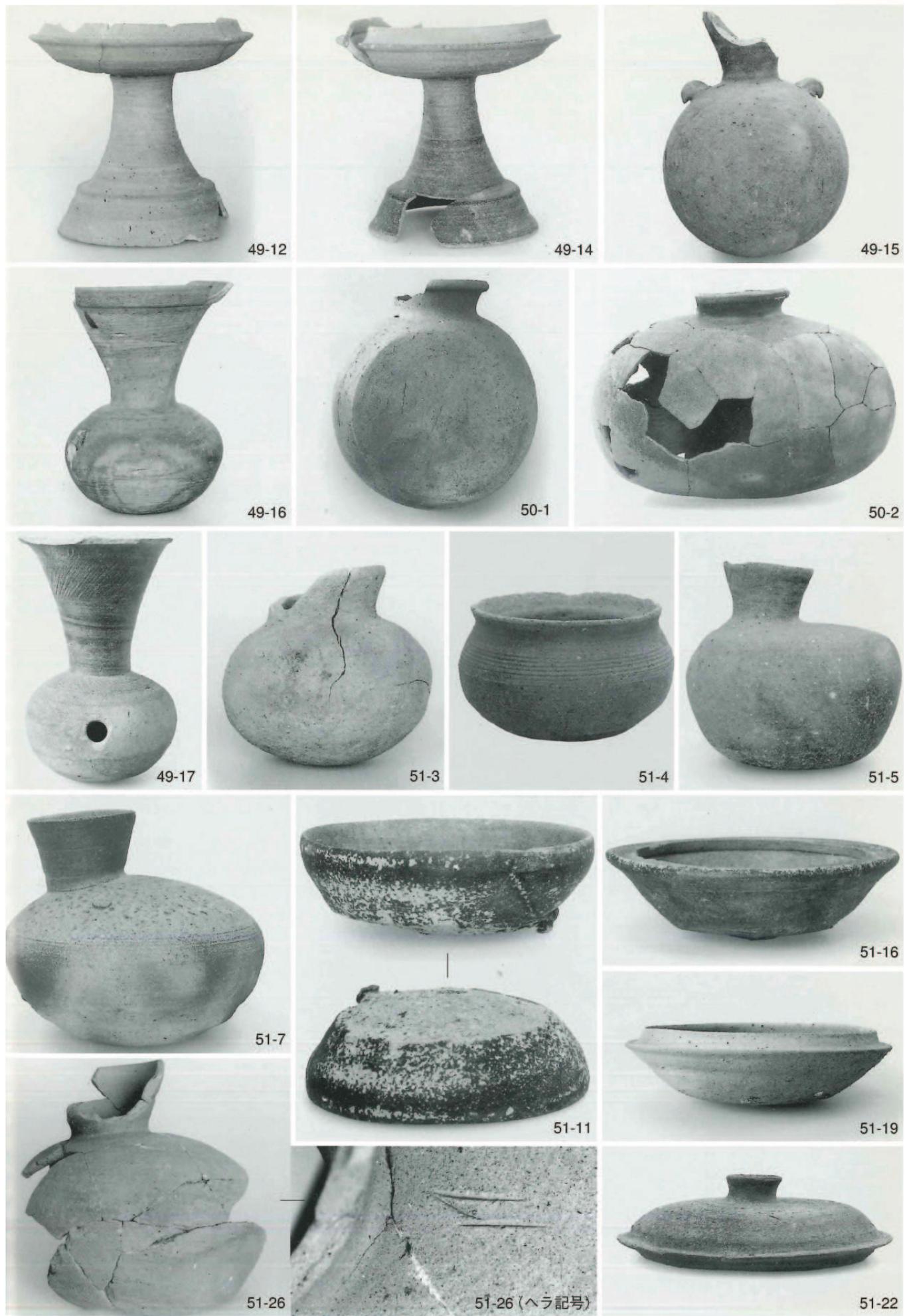
経塚横穴墓群出土土器④

47-21 (ヘラ記号)

図版18

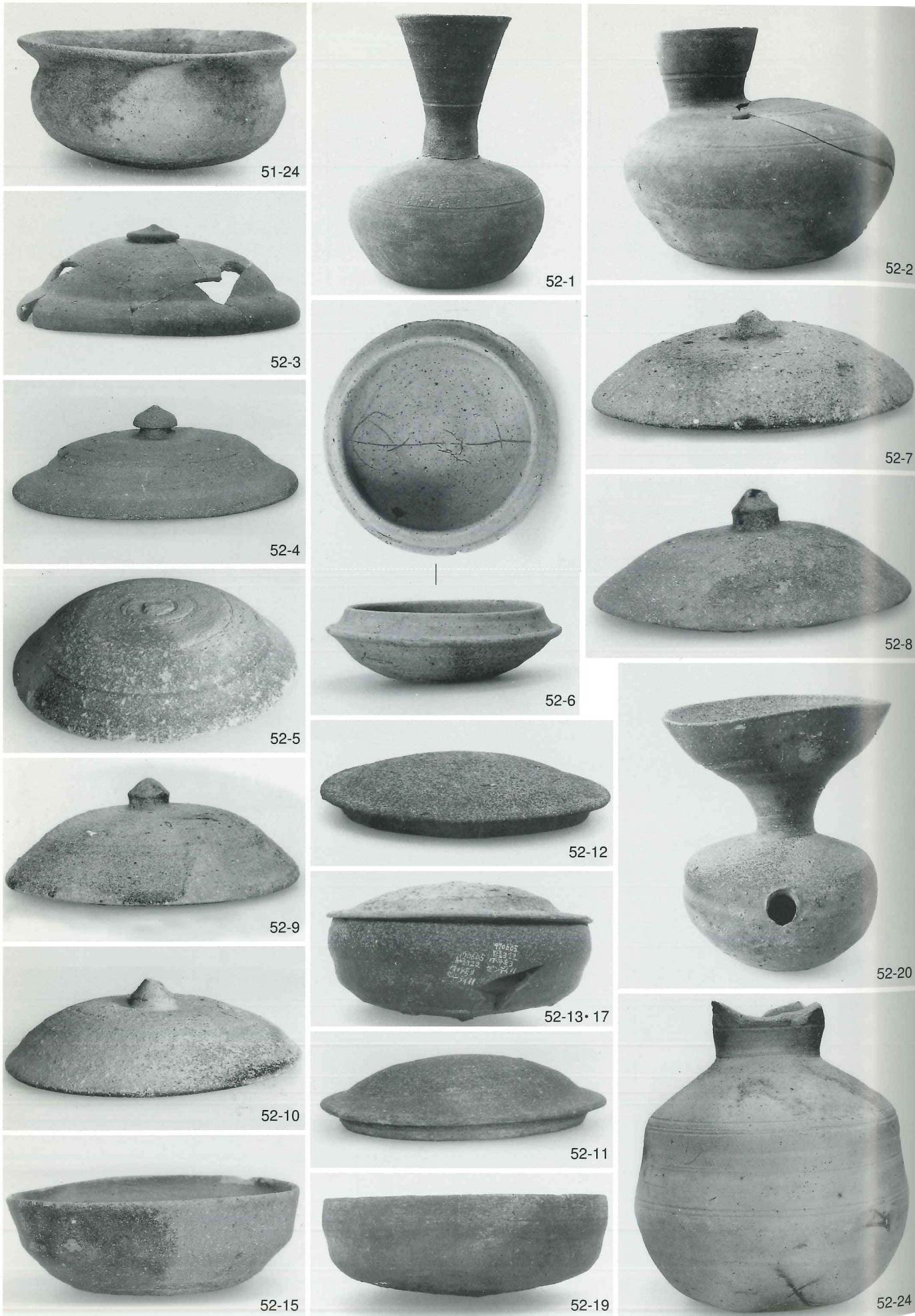


経塚横穴墓群出土土器⑤



経塚横穴墓群出土土器⑥

図版20

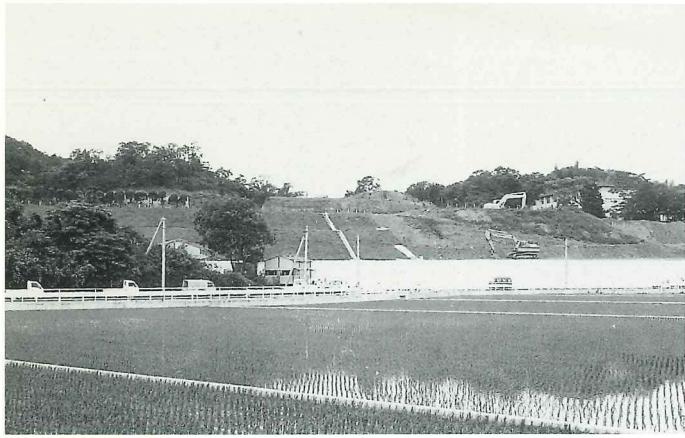


経塚横穴墓群出土土器⑦



経塚横穴墓群出土土器⑧及び石器・石製品

図版22



1. 経塚3号墳遠景（東方、彦山川から）



2. 経塚3号墳調査前（北西から）



3. 墳頂平端部調査前（西から）



4. 調査後の墳丘（北西から）



5. 第2・第3主体検出状況



7. 第2・第3主体完掘状況



第2主体断面（短軸）



1. 第1主体（粘土櫛）検出状況



2. 第1主体床面検出状況



3. 第1主体鉄剣出土状況



4. 第1主体銅鏡・鉄剣出土状況①



5. 第1主体銅鏡・鉄剣出土状況②



6. 第1主体粘土櫛南端部断面



7. 第1主体土層断面



8. 東トレンチ墳丘土層断面

図版24



1. 西トレンチ墳丘土層断面



2. 東側墳端部の状況



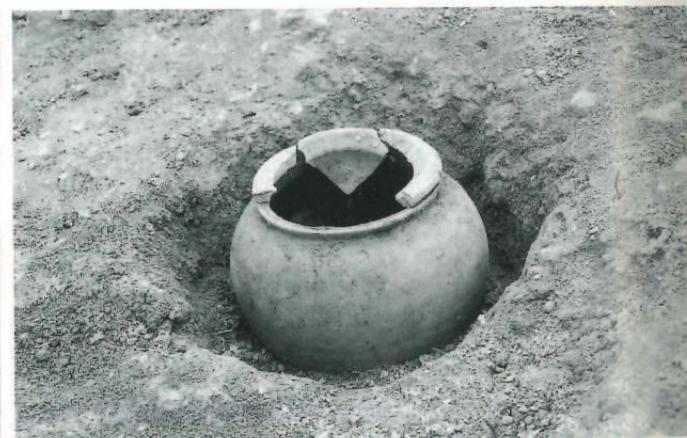
3. 北トレンチ墳丘土層断面①



4. 北トレンチ墳丘土層断面②



5. 北側墳端部の状況



6. 藏骨器出土状況



7. 経塚3号墳調査後（南から）



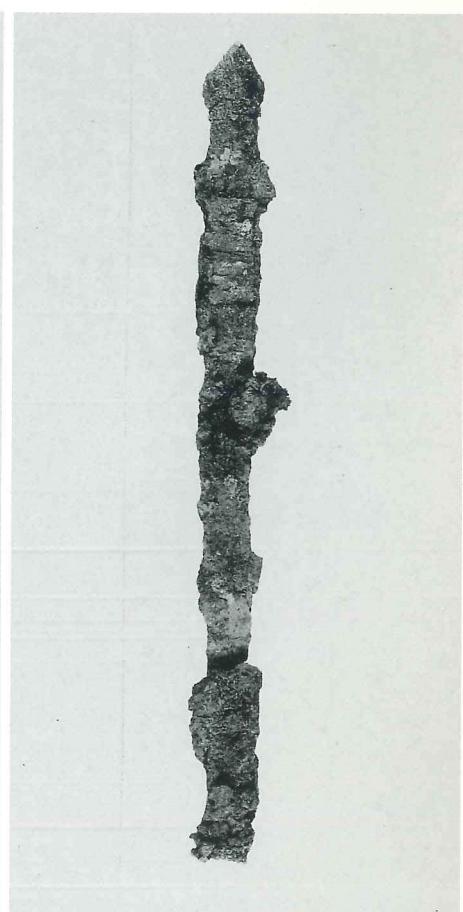
8. 墳丘盛土除去作業



1. 経塚3号墳調査後全景（北西から）

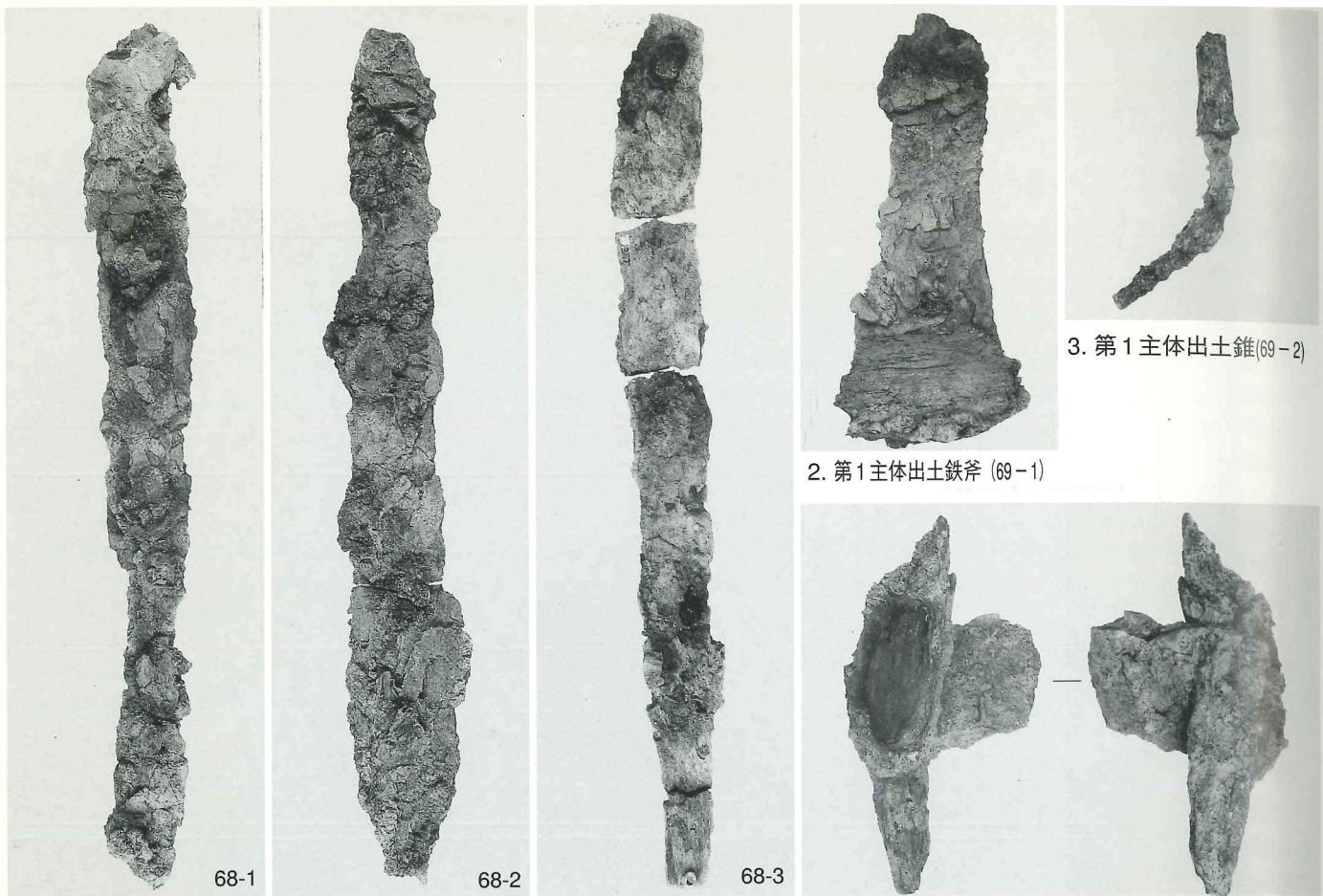


2. 第1主体出土銅鏡



3. 第1主体出土鉈

図版26



1. 第1主体出土鉄剣

68-2

68-3

4. 不明鉄器 (69-10)

68-1

5. 第1主体出土鉄鏃

69-8

69-9

69-5

69-6

69-7



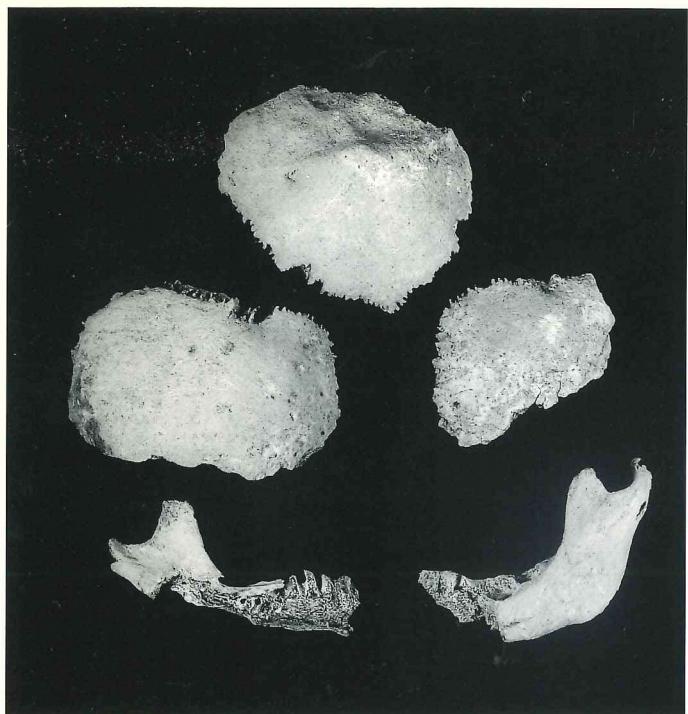
6. 鉄剣 (68-1) 付着布拡大写真 (中央付近)



7. 鉄剣 (68-1) 付着布拡大写真 (先端部) ①



8. 左 同 ②



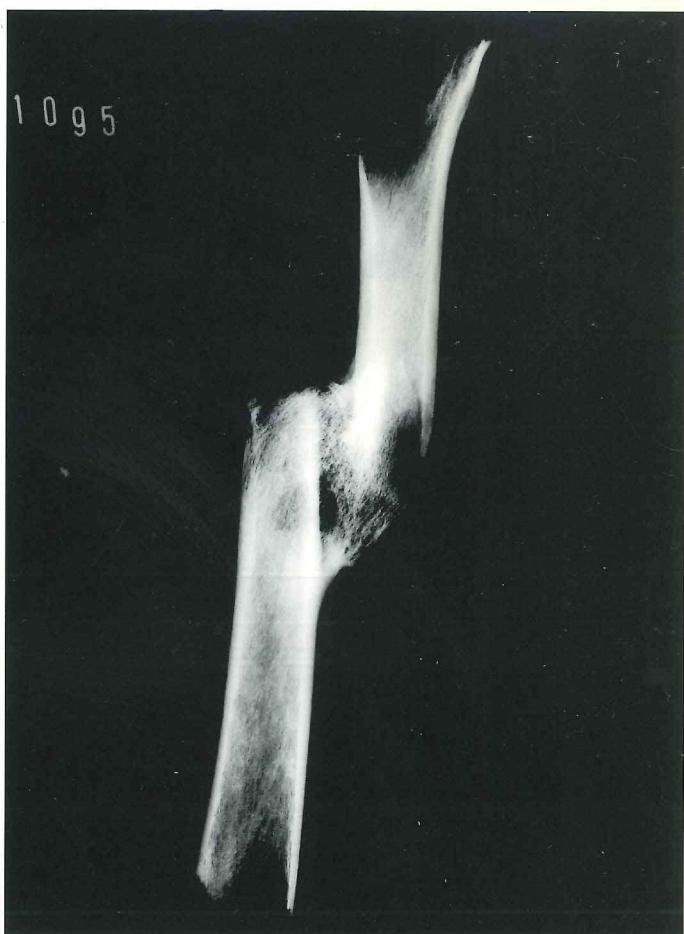
1支群1号頭蓋片



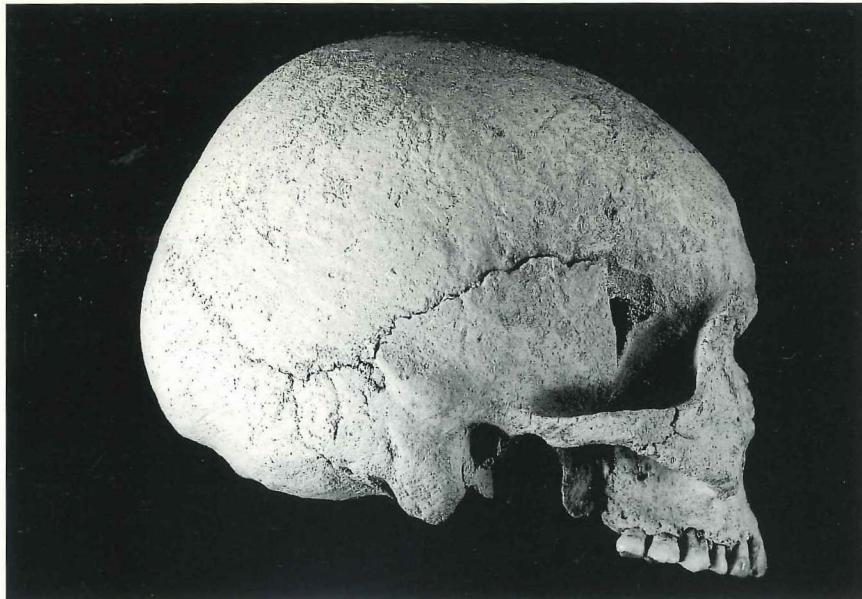
1支群1号四肢骨



1支群1号右大腿骨（骨折痕）



1支群1号右大腿骨（レントゲン像）



1支群6号頭蓋骨（側面觀）



2支群9号下顎骨



2支群9号四肢骨

報 告 書 抄 錄

ふりがな	きょうづかよこあなぼぐん・こふんぐん						
書名	経塚横穴墓群・古墳群						
副書名	福岡県田川市大字伊田・伊加利所在遺跡の調査						
卷次							
シリーズ名	田川市文化財調査報告						
シリーズ番号	第9集						
編著者名	金宰賢、古賀英也、田中良之、田代健二（編）						
編集機関	田川市教育委員会						
所在地	〒825-0002 福岡県田川市大字伊田2734-1						
発行年月日	西暦1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
経塚横穴墓群 第1・第2支群	福岡県 田川市 大字伊田 2016.1・2017. 2018	402061 060091 060147	33° 37' 59"	130° 49' 52"	1996.7.11 1996.9. 1 1997.5. 1 1997.11.18 1996.5.21 1996.8. 9	約2100m ²	市立中学校運動場整備工事 市道建設工事
経塚3号墳	大字伊加利 1919						市立中学校運動場整備工事
所収遺跡名		主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
経塚横穴墓群 第1・第2支群	横穴墓群	古墳時代	横穴墓35基 (小墳穴含む)	須恵器 土師器 鉄器(鉄刀・鉄鎌)			
経塚3号墳	古墳	弥生時代 古墳時代 古代～中世	円墳 1 (粘土櫛 1) (土壙墓 2) 墓地	土器・打製石斧 銅鏡 鉄劍・鉄鎌 鉄製工具類 蔵骨器	銅鏡は直行銘文双 夔(鳳)文鏡で、「位 至三公」の銘文有り。 (銘文は左右逆字)		

田川市文化財調査報告書 第9集
経塚横穴墓群・古墳群

平成11年3月31日

発行 田川市教育委員会
田川市大字伊田2734-1
田川市石炭資料館内

印刷 アスカ印刷
田川市大字夏吉立石1202-5

